ISSN 0913−4654

No.27
2011

国際武道大学研究紀要

THE INTERNATIONAL
BUDO UNIVERSITY
JOURNAL

27

国 際 武 道 大 学
The International Budo University

国際武道大学研究紀要

第　27　号　　（2011）

目　　次

〈原著論文〉
林　伯原
　中国明代における槍術の実態に関する研究　―槍術流派・槍術体系・槍術訓練を中心に―…　1
塚脇　誠
　アルペンスキー技術論　Ⅱ
　　―アルペンスキーにおける外向傾姿勢とターン運動における主要局面に関する教授学
　　（運動技術論）的一考察―……　13
〈研究報告〉
高木　誠一
　中学校・高等学校の保健教育における「自己」概念の検討……　37
望月　好恵
　科学的・換喩的ホームズと多義的・神秘的ブラウン神父
　　―私たちはなぜ探偵小説が好きなのか―……　45
〈資料〉
岩切　公治
　高校生に対する剣道の意識調査　―若潮杯争奪武道大会（剣道の部）を対象に―……　55

教育研究活動報告
〈研究成果報告〉
松井　完太郎・土居　陽治郎・木村　寿一・佐藤　正伸
　体育・スポーツ系大学（学部）における初年次教育の実践を通した学士課程教育
　カリキュラム構築に関する研究……　63
高橋　正人・立木　幸敏・河野　俊彦
　スポーツにおける薬物乱用者に対するインターネットを用いた副作用相談……　69
中西　純・鈴木　和弘・小磯　透
　体つくり運動への応用を意図したコミュニケーション・ワークプログラムの開発とその検証…　74
〈授業研究報告〉
木村　寿一・土居　陽治郎・松井　完太郎・高木　誠一
　国際スポーツ文化学科における初年次教育の新しい取り組み
　　―「ディベート形式討論会」実施の試み―……　79

〈研究報告（縦書き）〉
魚住　孝至・立木　幸敏・大保木　輝雄・吉田　鞆男・仙土　克博・朴　周鳳・中嶋　哲也・長南　信之
　日本の武道文化の成立基盤　―新陰流と一刀流剣術の研究を通じて―……　91

国武大紀要 (Int. Budo Univ. Journ.)
第27号：１－11（2011）

原著論文

中国明代における槍術の実態に関する研究
―槍術流派・槍術体系・槍術訓練を中心に―

林　伯原

Study on Development of Chinese Spearmanship in Ming Dynasty
―Taking spearmanship schools, spearmanship system and spearplay training as the centre―

Lin Boyuan

Abstract

This thesis studies the following contents in order to make it clear that the social background and developing state of spearmanship decelopment in Ming Dynasty. One, the social background of spearmanship development in Ming Dynasty. Two, about the state of spearmanship schools in Ming. Three, “Yangs’ spear skill” and “Yangs’ 36 lu huaqianga”. Four, the differences of spear play training between the army and the people. The conclusion includes the following points: One, the spearmanship of Ming made developments on the folk spearplay of Song Dynasty which had already been achieved. Two, after Yuan Dynasty, folk martial arts came back to life, which created favorable conditions for spearmanship development. Three, because the spearmanship was revered as the first skill in martial arts in the people, many spear play schools competed against others, which was the motive power to develop spear play. Four, in spearmanship system there were the spear play which aimed actual combat and huaqiang with many aims. The former’s main exercise measures were basic movements, encounter and actual combat; while the latter’s training activities were mainly by pattern. Five, in the period the spearmanship had an important change. That was the staffplay was absorbed by spear play training. Six, at that time though spear play was trained mainly by actual combat in the army and the people, the people paid attention to individual person’s skill; while the army paid more attention to the group’s combat effectiveness. So the training routines were arranged obviously differently between the army and the people.

Key words：槍　spear　槍術 spearmanship or spear play　槍勢 spear combination
流派 school　花槍 huaqiang（a kind of spear play mainly with patterns）

１．問題の提起

古代中国において民間に槍術の名称が現れたのは宋代のことである。この時代の槍術に関してはごく僅かな文献資料しか残されていないが，やがて明代に至ると多種多様な槍術流派が文献上に現れてくる。だが，このように多くの槍術流派が登場することになった当時の社会背景に関する研究はこれまであまり見られ

ず，明代の槍術流派の種類とその体系，訓練方法の実態，軍隊と民間それぞれの槍術に見られる相異点に関しても詳細に検討されたことはない。これまで出版された『中国武術史』等の中にも明代の槍術流派を取り上げたものは少なくないが，その内容はごく一般的な解説に止まっており，上述のような問題が深く掘り下げて論じられる機会はなかったのである。そこで本論文では主に，明代の槍術に関する原典資料に依拠して上述の問題点を中心に検討し，明代における槍術の実態解明を試みる。

また，唐順之の『武編』前集巻５「槍」，戚継光の『紀效新書』巻10「長兵短用説篇」，何良臣の『陣紀』巻２「技用」，程宗猷の『長槍法選』，茅元儀の『武備志』巻87「槍」，呉殳の『手臂録』，韓嶠の『武藝諸譜』の「長槍前譜」など，明代の槍術に関する原典資料は，これまで日本語に翻訳されていないが，本文では，このような資料を初めて日本語訳し，さらに，上述した資料を互いに参照しつつ考察し，その中で最も詳細かつ確実な資料を選んで取り上げると同時に，他説も付記している。

２．明代に現れた槍術流派について

明代に入ると多くの槍術流派が文献上に現れた。この状況は次の表１「明代の文献に記載されている民間槍術流派の一覧表」から窺い知ることができる。

表１　明代の文献に記載されている民間槍術流派の一覧表

出　典	刊行年	槍術流派の名称
唐順之（1507-1560）『武編』前集巻５「槍」	萬暦末	楊家槍法（梨花六合）
戚継光（1528-1587）『紀效新書』巻10「長兵短用説篇」	1566年	楊家槍法・沙家槍法・馬家槍法
鄭若曾（1503年-1570年）『江南経略』巻８上「兵器総論」	1568年	楊家三十六路花槍・馬家槍・金家槍・張飛神槍・五顕神槍・拐突槍・拐刃槍・錐槍・梭槍・槌槍・太寧筆槍・拒馬槍・搗馬突槍・峨嵋槍・沙家十八下倒手杆子・紫金鏢・地舌槍
王圻（1529年～1612年）『続文献通考』巻166「兵考・軍器」	1586年	楊家三十六路花槍・馬家槍・金家槍・張飛神槍・五顕神槍・拐突槍・拐刃槍・錐槍・梭槍・槌槍・太寧筆槍・拒馬槍・搗馬突槍・峨嵋槍・沙家十八下倒手杆子・紫金鏢・地舌槍
何良臣（嘉靖-万歴年代生存）『陣紀』巻２「技用」	1591年	楊家槍法・沙家槍法・馬家槍法・李家短槍
王鳴鶴（嘉靖-万歴年代生存）『登壇必究』巻30「長槍」	1598年	楊家槍法・沙家槍法・馬家槍法
程宗猷（1561-不詳）『耕余剰技・長槍法選』,	1621年	河南の李克復槍法
茅元儀（1594-1630）『武備志』巻87「槍」	1621年	楊家槍法・沙家槍法・馬家槍法・李家短槍
呉殳（1611-1695）『手臂録・自序』	1678年	楊家槍法・沙家槍法・馬家槍法・少林槍法・程氏汊口槍法・峨嵋槍法。また金家槍・拒馬槍・太寧筆槍など十数家を言及する。
陸世儀（1611-1672）『桴亭先生文集』巻６「石敬厳伝」	1678年	（楊氏）梨花槍法，石敬厳の槍法
呉殳（1611-1695）『手臂録・附巻下』	1678年	夢緑堂槍法（明代の少林寺の洪轉）
呉殳（1611-1695）『手臂録・附巻上』	1678年	石敬厳の槍法
呉殳（1611-1695）『手臂録』巻２「針度篇」	1678年	淄川韓氏槍法

明代の槍術に関する従来の研究は大凡上述した文献資料に依拠して当時の民間槍術流派を数えている。だが，これらの槍術流派が当時本当に存在していたかについては疑問がある。先ずはこの点を問題として取り上げ論じていきたい。

上述した文献に取り上げられた槍術流派は概ね次の二種類に分けることができる。

一つは，明の時期に現れた楊家槍法，少林（寺）槍法，馬家槍法，沙家槍法，韓氏槍法，峨嵋槍法，李家短槍，石敬厳の槍法である。これらの槍術流派は明以前の文献には記されておらず，その一方で多数の明代文献にその体系・技法・特徴等が詳しく取り上げられている。故に，これらが明代に現れ，また実際に行われた槍術流派であったことはまず疑いないだろう。

もう一つは，鄭若曾（1503年～1570年）の『江南経略』（1568年刊行）と王圻（1529年～1612年）の『続文献通考』（1586年成立）に登場する拐突槍，拐刃槍，錐槍，梭槍，槌槍，太寧筆槍，拒馬槍，搗馬突槍，金家槍，張飛神槍，五顕神槍といった槍術流派であるが[1]，これらの一部は流派名ではなく，北宋の曽公亮らが著した軍事著書『武経総要』に登場する武器の名称である。『武経総要』によると，拐突槍，拐刃槍は城を守るための武器（前集巻12「守城」），拒馬槍は敵軍の進攻を阻止するために陣地前に備える防御武器（前集巻10「攻城」，巻13「器用」），錐槍，梭槍，太寧筆槍，搗馬突槍は当時軍隊に使用されていた戦闘用武器，また槌槍は教習や閲兵で用いられる武器（前集巻13「器

用」）であった[2]。これらの武器と同名の槍術流派が明代に存在した可能性は考慮されるべきだが，明代の文献資料にこれらの名称を持つ槍術流派の体系・技法・特徴等に関する記述が存在していない点を考えると，その可能性は低いと言わざるを得ない。また，これらを明代の槍術流派として取り上げた文献は『江南経略』と『続文献通考』であるが，『続文献通考』の記述は『江南経略』から転載されたものであるため，実際には上述の槍術流派が明代に実在したと主張する文献は『江南経略』しか存在しないのである。また，これら宋代の槍は明代に至るまで継続的に使用されたのかについても疑問がある。上述の槍は当時の軍隊で使用された武器であるが，明代には既に軍事的武器としては廃れてしまっていたものと思われる。なぜなら，茅元儀の『武備志』巻103「槍」には『武経総要』の記載によって錐槍，太寧筆槍，搗馬突槍，槌槍等の名称が登場するが，それらは明の時期に使われていた六種類の槍の中に含まれていないことが明らかにされているからである[3]。明代に使われていた六種類の槍とは長槍，長槍一，長槍二，長槍三，鉄鈎槍，龍刀槍である。茅元儀の説明によると，長槍は柄が木や竹で作られ，槍の中で最も長いもので，遠い間合いから敵を刺突することができた。長槍一は宋代の鵶項槍に形状が似ており，長槍二は長槍に似ているが柄がやや軽く（挿絵によると，槍先も菱形で，長槍と比べると少し短い），長槍三は古代の矛そのままの形状であった。この三種類の長槍を用いた槍法にはすべて棍法の技術が含まれており，いわば「連槍帯棒」（槍法を主としながらも，棒術すなわち棍法を取り入れている）と言うべき技術であった。鉄鈎槍は刀と鈎を合わせて作られた新しい形状を持った槍である。刺突に加え，鈎で引っ掛けることもできる攻守兼備の優れた武器で，盾を一緒に装備して進攻する場合にも非常に有効であった。また，龍刀槍も刺突と斬撃が可能な新式槍であった。以上のように，明代には軍隊における戦法戦術の変化により，前代の槍を研究・改良した上で開発・製造された新式槍が登場し，さらに用法面でも宋代の単純な刺突に代わって「連槍帯棒」という形式が現れていたことがわかる。

さらに，明代の槍術流派に関しては，明末期の民間武術家である呉殳（1611-1695）は，『手臂録・自序』で次のように指摘している。

「私の知っている槍の流派のうち，石家槍法は石敬厳により成立し，峨嵋槍法は程真如から伝承され，楊家槍法，沙家槍法，馬家槍法は誰によって作られたものか確認することができず，また少林寺槍法は私が（少林寺僧）洪轉から習ったもので，汊口槍法は程沖闘によって伝承されている。（中略）以上の七種類の槍法の他，金家槍，拒馬槍，太寧筆槍等，十数種類の槍の名称があったが，名だけが残されたにすぎず，実際は存在せず，文献資料にもその技が記されていないので調べることができない。」[4]

この記述によれば，『江南経略』に記されている金家槍，張飛神槍，五顕神槍，拐突槍，拐刃槍，錐槍，梭槍，槌槍，太寧筆槍，拒馬槍，搗馬突槍，張飛神槍・五顕神槍といった槍術流派は，武器或は武術流派としてその名称だけは残っていたものの，明代に至り実際には存在しなくなっていたことがわかる。

3．明代における槍術発展の社会背景

明の時代に多くの槍術流派が登場し，また槍を訓練する気風が非常に盛んであったことは偶然ではない。その理由は以下の四点にあると考えられる。

第一に，社会環境の変化から考えると，元王朝の滅亡によって，それまで弾圧されていた民間における武術活動が息を吹き返し，各地で武術を行う気風が高まったことが挙げられる。これに伴い，各地の武術に伝統的，文化的風土の違いによる多様性や独自性が現れてきたのであるが[5]，これが明代に様々な槍法が登場することになった社会背景であると考えられる。

第二に，明代の槍法が宋以来の槍術流派発展の流れの延長線上で成熟していったことが挙げられる。宋代は周辺の異民族との戦争が絶えず，また国内でも社会矛盾が先鋭化する等の理由から争乱が頻発したため，槍術が有効な軍事技能として注目され発展した。また，小作制の定着に伴う庶民文化の発達により，民間において専ら槍術を教えることで生計を立てる武術家も現れた。宋の岳珂の『鄂国金佗萃編・続編』には次のように記されている。「宋代の著名な武将岳飛は射を学んだ後，宣和四年（1122年）外祖父の姚大翁の紹介を経て，当地の槍の名人陳広に槍法を学んだ結果，一県に敵無しとなった。」[6]また，当時民間において槍を用いる達人たちの伝承する技術にはそれぞれ差異があったことから，宋代の槍術にはすでに流派の別が見られた。『宋史』巻477「李全伝（下）」には「（李全の妻楊妙真は）二十年に亘って身につけた黎花槍の技で，天下敵無しであった」[7]とある。さらに，南宋の利登は『梅川行』と題する詩の中で，招賢寨の一揆軍に

おける武術の訓練を次のように描写している。「招賢の三尺の刃は霜の如し，手挟むに巨大な盾と張・朱の槍を以て」その原注に「招賢の人は刀を製造することができ，賊（一揆軍を指す）はこれを用いており，その上に張，朱二家の槍法を身につけていた」[8]とある。上述の楊氏の黎花槍及び張氏，朱氏の槍法に関する記載は，当時民間において槍術の達人が輩出され，また彼らが槍法を創意工夫していく上で分派が生まれてきたことを反映している。明代の民間における槍術はまさにこうした状況の延長線上で展開していったと考えられる。しかし，宋代の文献資料に記されている槍術流派はごく少数であるから，民間における槍術流派の本格的な発展はやはり明代から始まったと言うべきであろう。

第三に，明の時代には軍隊，民間を問わず槍が尊ばれ，槍こそ「武藝の王」であるという認識が一般化したことも無視できない。宋代には軍隊であれ民間であれ，弓が最も重要な武術として重視されていた。南宋の華岳は「軍器には三十六種があるが，弓はその筆頭に挙げられるべきものである。武藝には十八般があるが，弓がその第一である」[9]と述べている。このように宋代の軍隊や民間の武術においては弓の訓練こそ最も重要なものと考えられていたのである。しかし，明代になると，弓矢や銃は牌盾（負傷しないように身を隠す武器）で防ぐことができるため，最終的な勝敗は槍の技法の優劣によって決するという認識が広く一般に浸透した。茅元儀が『武備志』で「槍」について「戦場で最も実用するものは槍に他ならない」[10]と指摘している。また，明の武術家程宗猷（1561-不詳）は『長槍法選』で「槍を尊び，藝中の王とし，長い武器の中で技がこれを超えるものはない」[11]と述べて，槍の重要性を明確に指摘している。

さらに，明末期の民間武術家呉殳が『手臂録』巻１「槍王説」で次のように述べている。

「弓・弩・鳥銃（火縄銃）は二十歩以上の距離でその威力を発揮するが，牌盾でこれを防ぐことができる。また，たとえ大砲でも人に命中させることができるか否かは天命であり，以上の二つの武器は長槍より威力はあるものの恐れるに足らない。『諺』に言う『槍は諸武器の中で王と称され，諸武器を用いて槍と戦うと，直ちに槍に敗れてしまう。』（中略）敵と接戦する際，双方が二丈（約636cm）以内で血戦すれば，槍の達人にとっては必中の間合いである。一方，相手が（短い武器を用いて）槍の達人を攻撃するためには，少なくとも一丈（318cm）以内に接近する必要があるが，長槍を相手に接近することは不可能である。この場合，いかなる短い武器を使っても無駄なことであろう。」[12]また，同書巻三「単刀図説」では「単刀の達人と称される者は決まって単刀を用いて槍を打ち破ることができると言うが，実際に単刀を用いて槍と戦うと，往々にして相手の槍に敗れている」[13]とも述べている。

また，当時，槍術が重視された結果，雑多な武術を一本化し，槍の技によって稽古・応用するという意識も現れた。呉殳の『手臂録自序』には，これについて次のように述べられている。

「（石）敬厳（著者呉殳の師）は諸流派を習ったが，四十歳になって程眞如に会い，再び武術の本源たる基礎を工夫し，やっと武術の真髄を究めた。晩年になって槍法が棍・棒・刀・牌（楯）の諸武芸に代わるものとして応用され，いわば『化雑以爲純』（雑多な武芸の集合が，槍という一本筋の通った武術に昇華した）の境地に至った。」[14]

上述した武術家の見解からも，当時の民間では槍術が諸武芸を代表する技法であり，最も重要視されていたことがわかる。

第四に，多くの槍術流派が同時代に林立し，互いに競争・交流・吸収を行ったことが槍術の発展にとって有益な状況を提供した点が挙げられる。表２「明代における槍法の特徴一覧表」からは，それぞれ独自性に富む各家槍法が互いに雄を競い合っていた当時の状況を窺い知ることができよう。

表２　明代における槍法の特徴一覧表

槍法名称	槍の長さ	技の体系	主要な特徴	出　典
楊家槍法	１丈４尺－１丈８尺（445.2－572.4cm）	八母・六合・24槍勢	手は槍の末端を握り，穂先をなるべく長く前に出し，奇正・虚実があり，進退が速く，軍隊の戦闘で多用	戚継光：『紀效新書』巻十「長兵短用説篇」。呉殳：『手臂録』巻１「石沙楊馬少林衝斗六家槍法説」
馬家槍法	９尺７寸（308.5cm）	六合・24槍勢。槍勢の中に棍勢を混ぜる	楊家槍法に基づいて棍法を兼ねる	呉殳：『手臂録』附巻上「馬沙楊三家槍式説」
沙家槍法	１丈８尺－２丈４尺（572.4－763.2cm）		槍が長くて，その槍法の変化は両足にある	呉殳：『手臂録』巻１「石沙楊馬少林衝斗六家槍法説」

槍法名称	槍の長さ	技の体系	主要な特徴	出　典
峨嵋槍法	9尺7寸（308.5cm）	十八扎法，十二革法	槍勢や足の運び方等が説かれておらず，心身の鍛錬を棍本として攻守ともに重視される	呉殳：『手臂録』巻1「槍式説」，附巻上「峨嵋槍法」
少林寺槍法		八母・六妙・五要・三奇	槍法を主としながらも，棍法を取り入れているものがあり，また，柔をもって剛を制し，弱さで強さを挫くものもある	呉殳：『手臂録』巻1「石沙楊馬少林衝斗六家槍法説」，附巻下「夢緑堂槍法」
程宗猷槍法	1丈6尺－1丈8尺（508.8－572.4cm）	八母・六合・18槍勢	剛強な性質の技によって一門を立てた	程宗猷：『長槍法選』
石敬厳槍法	9尺7寸（308.5cm）		槍法の変化は両手にあり，臂・身・足が一体となる	呉殳：『手臂録』巻1「石沙楊馬少林衝斗六家槍法説」

戚継光の『紀效新書』，程宗猷の『長槍法選』，呉殳の『手臂録』等によると，当時流行していた石家槍法，少林寺槍法，馬家槍法，楊家槍法，沙家槍法，峨嵋槍法，程宗猷槍法等はそれぞれ独自の技術体系を持つだけではなく，槍の形状及び技術上の風格もまた異なり，同じ槍法を名乗る技術であっても，その使い方には異同があったとのことである。

当時の人々は熱心に槍術を学び，その交流も盛んに行われた。

戚継光は楊家の槍法を重視し，浙江の西興江楼で将軍の唐順之に楊家槍法を学んだ。彼の『紀效新書』には次のような記述がある。

「戚継光は『他の人が槍を用いるところを見ると，圈串（槍法の一つ）が大きいものは五尺にも及びますが，兵主（唐順之を指す）の槍はただ一尺の圈しか用いないのは何故でしょうか』と質問した。唐はこれに対し，『人の身体を側面から見た形はただ六七寸のみであり，槍における圈（動き）は相手の槍を一尺拿開（外側に払う）しさえすれば我が身膊に及ぶことはない。圈拿が大きければ相手の槍を遠くに払うことができるが，それは自分にとって無益であり，かえって自分の力を使い果たしてしまう』と答えた。これを聞いて戚はその教えの極めて精緻なことに感嘆した。」[15]

また，『手臂録』には次のような記事がある。「槍の近祖」と称された劉徳長は初め少林寺の僧侶であり，後に天下を遊歴したが，遊歴後はその槍の技が特に優れていることで世に知られた。後年，彼は辺帥（辺境の司令官）の招きを受け，方袍（和尚の袈裟）を棄て游撃将軍として仕えた。また，真定（今の河北省正定県）巡撫中丞の韓晶宇は彼を招聘して，その配下の武将を指導させた。この時，常熟の武術家石敬厳と少林寺の武僧洪記が会いに来た。洪記は少林寺の技を第一として傲慢であったが，劉と腕比べをしたところ，その長物（槍）を劉徳長に撥去（はじきとばすこと）され，心を挫かれて石敬厳と共に劉に百拝して教えを請うた[16]。

民間武術家の石敬厳（不詳-1634年）は最初，河南の李克復と一緒に楊氏梨花槍を学び，その後，武術の伝承地である少林（河南の登封県の嵩山少室山），伏牛（現河南の嵩県西南の伏牛山），五台（現山西の五台県東北の五台山）を遊学し，それぞれの槍法を吸収してから「江南の槍法第一」と称された[17]。

安徽休寧の人程宗猷は河南の李克復から槍法を学び，また少林寺で武藝を学ぶこと十余年に及んだ。その後，自ら一門を立てたが，少林寺の槍法とは異なるとのことである[18]（図1．程宗猷：『長槍法選』，清の道光22年（1842年），聚文堂藏板，国会図書館所蔵）。

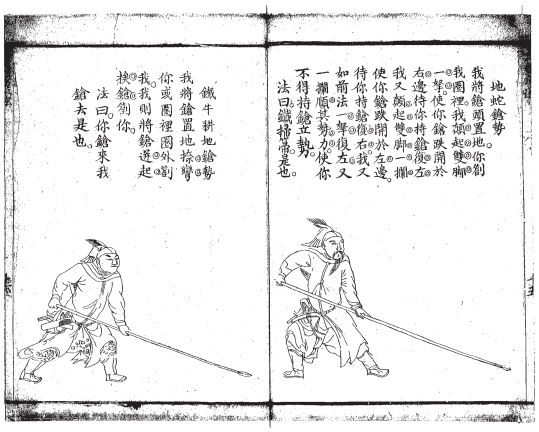


図1　明・程宗猷の槍法。程宗猷の『長槍法選』より

呉殳自身も三十年に亘って各種の武術を学び，特に槍法槍術に対する細心な工夫と研究を行っていた。彼は『手臂録』巻二「針度篇」で次のように述べている。「最初，石敬厳について石家槍法を授かった。その後，各種の槍法を広く求め，少林寺の僧侶の洪轉の著述から少林寺の槍法を知り，鄭華子から馬家槍法，倪近楼から楊家槍法と沙家槍法を学んだ。また，山東

省の聊城で淄川韓氏槍法を習い，最後に程真如の峨嵋槍法を得た。彼は研究を重ねた上，四方の槍師と戯（腕比べ）をすることを好んだので，その腕前は十分に成熟し，たびたび槍師を打ち負かしたため，非常に名声が高かった（図２．呉殳：『手臂録』巻２「馬家槍二十四勢説」，中華書局，叢書集成初編本によって復刻版，1985年，p.44-45）。」

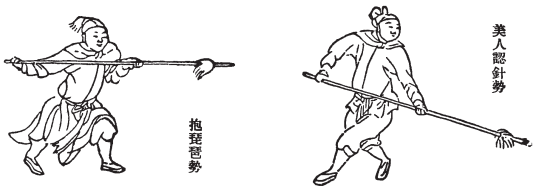


図２　呉殳の『手臂録』巻２「馬家槍二十四勢説」，中華書局，叢書集成初編本より

以上のように，明代は民間において槍法流派が林立し，またそれぞれに伝承が行われ，さらに各流派が相互に競争・交流・吸収しあったことにより民間槍法の発展が促進されたのである。

４．「楊家槍法」と「楊家三十六路花槍」

明代以前には槍術の体系に関する記載が存在せず，また練習法としては単に「刺す」ことのみが記されている。例えば，『宋史』によると，当時，歩兵戦において槍は真直ぐに突き刺す（直刺という）技術を主としていたので，槍術の訓練も「足を駐（とど）め，手を挙げて擯刺（投げるように刺す）すること，四十回を以て本等とする」[19]という形式であった。連続四十回に亘る「擯刺」が兵士に対する槍術の基本的な技術訓練の基準だったのである。また，南宋の淳熙年間（1174-1189）には，槍手を表彰する際に，何回連続して擯刺できるかによって格式（等級）が設けられており，元の馬端臨の『文献通考』には「擯刺の多寡によって十二等の銀が支給され，命中の多少による差もあった」[20]と記されている。要するに，明代以前には「刺す」ことだけが槍術の主要な訓練内容として重要視されていたのである。

しかし，明代に至ると，槍の各流派が激しく競い合うなかで，武術家たちは単純な刺突以外にも様々な槍の用い方を案出し，それらの技術によって槍術諸流派はその体系を整備していった。

呉殳は『手臂録』付巻上で「程眞如の峨嵋槍法」について次のように述べている。

「私が今まで槍術の諸流派から収集した技法は五百余に達したが，これは槍法の中にたくさんの棍法が混じっているためである。（中略）実は，槍法は技法の数ばかりが多くなった結果，槍の真髄が失われてしまった。（中略）徽州の程眞如が著した『峨嵋槍法』には，ただ槍の革法（防ぐ方法）十二，扎法（突き刺す方法）十八だけが載せられており，槍の勢や歩法は説かれていないが，これは優れた見識であろう。」[21]

ここで述べられた「雑多な槍法を洗練して本質的なものを求める」という傾向は，当時の民間における槍術流派の発展趨勢であったと考えられる。こうした明代の武術家たちの槍術に対する細心な工夫と研究から「楊家槍法」「峨嵋槍法」「夢緑堂槍法（少林寺槍法）」「長槍法（程宗猷の槍法）」「馬家槍法二十四勢」等の「槍譜」（槍術体系とその練習法を含むテキスト）が生まれた（表２「明代における槍法の特徴一覧表」を参照）。諸家の槍法はそれぞれ独自の体系を有し，各派に共通の内容も多かったが，流派固有の独創的な技術も少なからず存在した。いずれも比較的整った体系を有していたが，その内容は実戦のため構成された槍術と，「路」から構成された「花槍」の二つに分類することができる。以下，「楊家槍法」を例として，その体系を検討していく。

戚継光が『紀效新書』（十八巻本）巻十「長兵短用説篇」で，軍隊における実用性を求める立場から，当時流行していた楊家槍法の「八母槍」「六合」「二十四槍勢」から成る技術体系を取り上げている。

いわゆる「八母槍」とは八種の基本槍法の練習法であり，すなわち「扎対拿」「扎対攔」「扎対顛（「提」ともいう）」「上扎対捉」「下扎対櫓」「上扎対捉」「下扎対顛」「槍起対纏攔槍から扎対拿」のことである。「八母槍」の練習は二人一組で行う移動を伴わない相対稽古の形式であり，一人が上・中・下・内側・外側方向から刺突してくるのに対し，もう一人がその動きに応じて「拿」「攔」「顛」「捉」「櫓」「纏攔」等の方法で対応するのである。この「八母槍」は槍法の基礎であり，槍法を一つずつ組み合わせ，二人で攻防を繰り返すことにより，各種槍法の実戦における応用を身につけることができるようになっていた。

次の「六合」とは六種類のコンビネーション槍法を用い，やはり二人一組で互いに各種の変化に応じて練習する方法を指している。「八母槍」とは異なり「六合」は個々の槍法を単独で練習するものではなく，一扎一拿，一扎一攔といった槍法を数種類組み合わせ

て，その場で攻防を繰り返す形式の相対稽古である。こうした訓練は主として反復練習を通じて各種槍法の応用方法を熟知することにより，槍をより自由自在に操れるようにすることが目的であった。

最後の「二十四槍勢」とは，敵を制し勝負に勝つための各種の変化を備えた二十四種類の構えのことである。この「槍勢」とは単に一つの動作ではなく，様々な応用変化の可能性を内に含む中核的な技法群を指す用語である。この「槍勢」は前述の「八母槍」「六合」とは異なり，その場での相対稽古ではなく，様々な敵の動きを仮想しつつ，一人で進んだり退いたり移動しながら訓練する方法である。要するに「槍勢」とは槍法の中で代表的かつ重要な技法群であり，その応用法を理解すれば，実戦の中で然るべき攻防を行うことができるものと言えるだろう。「二十四槍勢」の名称は次の通りである。①夜叉探海勢②四夷賓服勢③指南針勢④十面埋伏勢⑤青龍献爪勢⑥邊攔勢⑦鉄翻竿勢⑧跨剣勢⑨鋪地錦勢⑩朝天勢⑪鉄牛耕地勢⑫滴水勢⑬騎龍勢⑭白猿拖刀勢⑮琵琶勢⑯霊猫捉鼠勢⑰太山壓卵勢⑱美人認鍼勢⑲蒼龍擺尾勢⑳闖鴻門勢㉑伏虎勢㉒推山塞海勢㉓鷂子撲鵪鶉勢㉔太公釣魚勢（図３，明・茅元儀：『武備志』巻87，「陣練制・教芸４・槍」より，中国人民解放軍出版社，遼沈書社：『中国兵書集成』，第30冊，1989年復刻版，p.3446-3447）。

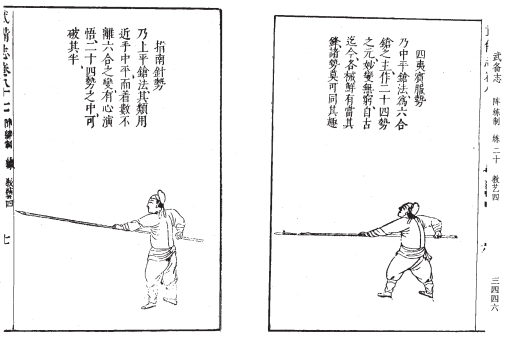


図３　明・戚継光の『紀效新書』「長槍習法」。茅元儀の『武備志』より

以上のように，楊家槍法の体系は三つの部分から成り立っている。すなわち，第一に基本槍法の練習，第二にコンビネーション槍法の練習，第三に槍勢（槍法の構えと変化）の訓練である。第一と第二は二人一組となりその場で槍を交えて対戦する相対稽古であり，第三は仮想の敵に対して移動しながら一つ一つの技を行っていく一人稽古である。こうした訓練体系はいずれも実践経験を通じて総括され，洗練完備されてきたものであったと思われる。

しかし，上述した楊家槍法の体系は軍隊の訓練においては複雑過ぎるものであった。このため，軍隊の訓練では常に楊家槍法の「八母槍」「六合」「二十四槍勢」という体系全体が用いられたわけではない。その理由について，戚継光が次のように述べている。

「以上の槍の諸法（「八母槍」「六合」「二十四槍勢」を指す）はすこぶる繁雑である。兵士たちは愚かであるから，これらの全てを身につけることはできないが，ここに記載して備えとしておかないわけにもゆかない。もとより，洞察の深い者は，これらの槍法に精通することができるだろう。兵士に対しては封，閉，捉，拿，上攔，下攔という六つの槍法を用いて訓練すれば十分だと思われる。なぜなら，封，閉，捉，拿の中に実戦用の大門法と小門法（大門，小門とは，主な槍術の使い方である）が含まれているからである。」[22]

このように戚氏は兵士の訓練においては多くの動作を身につけていることよりも，幾つかの動作に精通していることの方が重要だと考えたわけである。

一方，上述した楊家槍法の「八母槍」「六合」「二十四槍勢」から成り立つ技術体系とは別に，当時「楊家三十六路花槍」と呼ばれるものが存在していた。

鄭若曾の『江南経略』巻八上「兵器総論」には「楊家三十六路花槍」に関して次のように記されている。

「楊家三十六路花槍，そこから出たものは曰く大閃干，曰く小閃干，曰く大六合，曰く小六合，曰く穿心六合，曰く推紅六合，曰く埋伏六合，曰く辺攔六合，曰く大封臂，曰く小封臂である。」[23]

明代において武術用語としての「花槍」は次の二つの意味で用いられた。一つは「閃賺」（フェイントをかける槍法）という意味で，相手を惑わす見せかけのために使われる槍法である。もう一つは様々な槍法の動作を繋ぎ合わせ，一連の運動として構成された「路」（「套子」ともいい，日本の武道における「形」に相当する）と呼ばれるものであり，ここで言う「楊家三十六路花槍」は三十六種類の「路」を指しているものと思われる。

武術の一人稽古を行うために作られた「路」という用語は宋の時代に用いられ始めた。明代初期に編集された『永楽大典』の13991巻には宋代の三つの戯文（雑劇の台詞）が収録されているが，その『張協状元』第八に「（原文）我使幾路棒与你看。（訳文）私は棒術の『路』を幾つかやってみせるので，あなたに見

てもらいたい」という台詞がある[24]。「路」は古漢語では「通り道」と解釈するが，ここではもちろん武術の「形」を意味している。明代において「路」という訓練法は軍隊，民間を問わず採用されていたが，軍隊と民間ではその目的が異なったために，「路」の構成もまた異なり，特に民間で作られた「路」はその内容が複雑過ぎて戦場では応用できないものとして軍事家からは厳しく批判された。

これについては戚継光が著した『紀效新書』の「或問篇」に以下のような記述が見られる。

「ある人が『平時，官衙で行われている花槍・花刀・花棍・花叉等は，戦場において応用することができるのか，あなたが教えた武術の中にこれらはあったのか』と尋ねると，戚継光は『両軍が対陣して戦うことと，練習場で武芸を比べたり，泥棒を捕まえたりすることの間には大きな違いがある。戦場では横列を組んだ千百の戦士たちが揃って前進するので，勇気ある者が先に進むことも，怯えた者が後ろに下がることもできず，群がる鎗を敵に突き出し，敵も槍ぶすまを形成して迫りくる相手に反撃すべく備え，また互いに刀を手に斬り込み，猛烈に撃ち合っては退いていく。ただこれ一斉に擁し進むのみで転手は皆難く，いずくにか花法のように能く左右に動き，跳ねることを容れん。（中略）長槍は，一人で練習する場合において圏串（各種の槍法に伴う槍の先端の円状の動き）で手法を習い，また，進退によって歩法や身法を学ぶことができるが，これ以外のいわゆる単舞なるものは皆これ花法なり，学ぶべからざるだろう』と答えた。」[25]

ここで戚継光が述べる「単舞」とは，民間人がただ武術の姿勢及びその「形」のプロセスだけを真似て編出した「花法」と呼ばれる「路」のことであり，その中に「花槍」も含まれる。

また，当時の将軍であった何良臣も「花槍」について次のように指摘している。

「花鎗，套棍，滾叉の類，誠に実用において役立たず，美しく看えたりといえども，そもそも実戦において何の益あらん。このため，軍中で最も禁止されたものは套子武芸にあり。」[26]

すなわち，鄭若曾の『江南経略』に記されている「楊家三十六路花槍」の大閃干，小閃干，大六合，小六合，穿心六合，推紅六合，埋伏六合，辺攔六合，大封臂，小封臂とは，それぞれ槍法の「路」（形）」の名称であったと考えられるが，上述のような槍術の変質は当然ながら「楊家三十六路花槍」だけに限られたものではなく，当時の槍術がそれまでとは異なった方向に発展しつつあった状況を反映している。宋代以来，民俗文化の発達に伴い，個人技を中心として展開していった民間武術では護身，健身（健康増進），演武といった目的に応じ，花鎗，套棍，滾叉等の套子が多く編集された。槍術における「花槍」もこのような潮流に乗って形成されたものと思われる。

5．明代における槍術の訓練方法―軍隊と民間の槍術，その相異点を中心に―

これまで述べてきた通り，明代においては軍隊，民間を問わず槍を尊び，「武藝の王」とする認識が高まっていたため，花槍のような例外はあるものの，槍法に関しては実戦的な訓練方法が依然として主流であった。これについては次の史料に見ることができる。

当時，民間における槍の訓練にも実戦に用いることを想定したものが存在した。例えば，呉殳は『手臂録』の中で石敬巌が崇禎六年（1633年）に江蘇婁江の報本寺で陸桴亭らに指導した様子を次のように記述している。

石敬巌は槍法を教えるにあたり，先ず戳（突き刺す動作）を教えた。全ての戳には必ず全力を用い，四歩或いは五歩進むのを一組として小休止を挟んだ。各組の練習は「力尽為度」すなわち力尽きるまで行われた。こうした訓練方法は現代のインターバルトレーニングに似ていると言うことができよう。この様なやり方で各組の回数を次第に増やしていき，最終的に戳の回数を500回にまで到達させ，戳の動作に力とスピードが共に備わり，一突きで壁に穴を開けられるようになることが求められた。

こうして戳の基礎が確固たるものになると，次は「革法」（敵の攻撃を遮る動作）に移り，すなわち攔，拿等の訓練を開始した。この段階の練習は二人一組で行い，一人が矢の如く稲妻の如く戳してくるのを，もう一人が絶えず攔，拿等を用いて防いだ。これは「八母槍」であり，防御の反応が緩慢であったり，方法が正しくない場合には戳者の槍が革者の身体に命中し，革者が地面に転倒したと言う。二人で練習する時は両者とも槍先を外し，韋絮（綿を入れたなめし革）を先端につけるか，紙竹を厚く肋前で束ねて身体を守り，負傷しないようにしていた。それでも練習が終わると左腕右臂が青紫色に腫れあがり流血していたと言うようなことが往々にして見られたと言い，その訓練の厳しかったことがわかる。革法の練習が終わると「連

環」の練習（「六合」に当たる）を行った。いわゆる「連環」とは一戳一革のことを指し，すなわち一扎一拿，一扎一攔といった類の練習方法に相当する。この練習を行う時には二人一組で交互に主客（攻撃者を主，防御者を客とする）となり，互いに仇怨を殺さんとするかの如く行うことが求められた。以上の練習過程全てに精通した後に破法及び「夜叉探海」等の槍勢，また「中平槍は槍中の王なり」と言った要訣を学ぶことになっていた。以上の過程は百日以内で学習することができ，これで全ての訓練過程を基本的に終了したことになった[27]。

上述した石敬厳の槍法訓練を見ると，まさに一人で「刺す」練習から二人で「打ち合う」練習に至り，さらに二人での実戦訓練を行うというパターンで行われたもので，最後に「槍勢」の練習を通じて対戦のレベルを向上させるという内容であった。

上述の石敬厳は河南の李克復と一緒に楊家槍法を学んでいる。彼は学習目標を達成するために各種の槍法を系列化し，段階的に練習を進めているが，この手法は『紀效新書』の「長兵短用説篇」に記されている楊家槍法の「八母槍」「六合」「二十四槍勢」という三段階の訓練法と同質のものである。すなわち，このような段階的訓練法は当時の軍隊と民間の槍術訓練に共通する基本的な方法論であったと言えるだろう。

しかし，こうした民間における実戦を想定した槍術の訓練はあくまで軍隊のように陣形・隊列を組んで団体の戦闘力を発揮すべきという立場から実施されたものではない。民間における槍術では個人の戦闘技術向上を重視していた点が軍隊の槍術訓練とは根本的に異なっている。

また，槍術の「形」を用いた訓練では，軍隊と民間の相異点がさらに明確に現れた。

『紀效新書』巻六「比較武芸賞罰篇」には軍隊における槍術の「形」の訓練について次のように記されている。

「（原文）比槍，先単槍試其手法，歩法，身法，進退之法，復二槍對試，眞正交鋒。（訳文）長槍の訓練成果を調べるために槍の技を比べ合う場合，先ず一人での稽古により，その手法，歩法，身法，進退の足運び法の能力を試し，その後，二人で実戦を想定した相対稽古を行うことにより試し，最終的には二人で実戦のように対戦した。」[28]

さて，ここで「単槍」とは何かということが問題となる。『紀效新書』（十八巻本）巻十「長兵短用説篇」と（十四巻本）巻四「手足篇」には明確に記されていないのだが，我々は朝鮮人韓嶠が明萬暦二十六年（1598年）に著した『武藝諸譜』からそれを知ることができる。『武藝諸譜』は『紀效新書』（十四巻本）を元に編集されたもので，韓嶠は自分が見た中国将兵の槍法の訓練法を記録しており，その中に「単槍」の練習法が記されている。これによると「単槍」の練習法とは，実は各槍勢を繋げて訓練する「形」のことである。

その「長槍前譜」に記されている「単槍」の練習法は次のようなものである[29]。「（前進動作）太山壓卵→美人認鍼勢→鉄翻竿勢→四夷賓服勢→滴水勢→指南針勢（両足同時に一歩前進）→滴水勢→指南針勢（二歩前進）→鉄牛耕地勢→十面埋伏勢（刺突する）→（ここから後退動作）滴水勢→指南針勢（一歩後退）→滴水勢→指南針勢（一歩後退）→そのまま立つ→（再び前進動作）滴水勢→指南針勢→（一歩前進）滴水勢→指南針勢→（二歩前進）→鉄牛耕地勢→十面埋伏勢（刺突する）→滴水勢→指南針勢→邊攔勢→（転身して一歩後退）→白猿拖刀勢→一歩後退して騎龍勢をする。」[30]（図４，韓嶠：『武藝諸譜』（1598年）より，韓国復刻版）

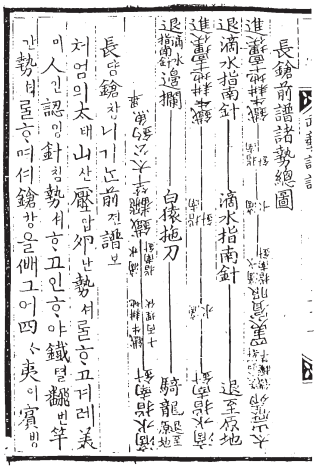


図４　長槍前譜，韓嶠の『武藝諸譜』（1598年）より

以上の記述によれば，軍隊の槍術の「形」は複数の「槍勢」から構成されたもので，「槍勢」と「槍勢」が緊密に結び付いていた。進攻及び防御の変化に従い，一歩或いは二歩進んで攻撃したり，後退しながら防御したり反撃したりするものであった。このような「形」は主として兵士に槍法の各種変化，歩法，身法，

進退の能力を身につけさせるための訓練手段として用いられたものである。兵士たちはこうした「形」による訓練を経た後，二人で行う実戦を想定した相対稽古を経て，最終的には実戦さながらに対戦するのである。

一方，民間武術の「形」には軍隊のそれと比較して明確な違いが見られる。上述のように民間槍術の「形」は花槍の「路」（套子とも言う）であり，戚継光は「周旋左右，満面花草（飛んだり跳ねたりして，見せかけだけの花や草のようなもの）」[31]という言葉で民間の套子を形容した。民間人によって編み出された「花槍」による練習は，実戦よりもむしろ個人の訓練・演武・健康・教育・治病等に役立つものと捉えるべきと思われる。しかし，当時の軍隊はほとんどが民間人を募集して編成されたものであるから，民間で急速に広まった「花槍」が軍隊での訓練にますます浸透するようになった。花槍を練習している者は実戦の役に立たず，花槍の影響で軍隊の槍術訓練が次第に実戦から乖離していったこともあって，戚継光，何良臣といった軍事家・武術家らは軍隊において花槍のような「形」の訓練を厳禁したのである。このような状況には，当時の軍隊における槍術と民間武術文化における槍術に生じた相異点がはっきりと示されている。

6．まとめ

本論の要点は，以下のように要約される。

1．明の時代，槍術は諸武芸を代表するものとしての存在であった。軍隊では戦法戦術の変化に伴い，前代の槍を研究・改造した上で開発・製造された新式槍が使用された。また，用法面でも新たに「連槍帯棒」という形式が導入され，明代以前の刺突のみを中心とした槍術訓練に重大な影響を与えて，古代中国における軍隊槍術の訓練に革命的な変化をもたらした。

2．従来，明代の槍術流派として紹介された流派の中には，宋代に使われて既に廃れた軍用武器の名称及び明代には既に伝承されなくなった槍術流派の名称が含まれている。当時，民間においては楊家槍法，少林寺槍法，馬家槍法，沙家槍法，韓氏槍法，峨嵋槍法，李家短槍，石家槍法といった流派を中心に槍術が流行していた。

3．明代の民間槍法は宋以来の槍術流派発展の流れの延長線上で成熟していったものであり，様々な「槍勢」が槍術の中でも主要な技能として重視され，槍の「路」（形）という練習法も定着するようになった。槍を尊び「武藝の王」とする認識が高まっていたため，槍術諸流派が林立し競合するといった局面が現れた。諸家の槍術は各々が独自の技術体系を持つだけではなく，槍の形状及び技術上の風格もまた異なっていた。

4．槍法の体系の中には実戦のため構成された槍術と，「路」（形）によって構成された「花槍」の二つの種類が存在した。前者は「八母槍」「六合」「二十四槍勢」を中心に構成された実戦的な体系であるが，後者は民間人の様々な需要に応える形で槍の動作を繋げて編み出されたもので，次第に実戦からは乖離していった。

5．軍隊，民間を問わず当時の槍法訓練は実戦的な内容が主流であったが，民間では軍隊のように陣形・隊列を組んで団体の戦闘力を発揮すべきという立場からは訓練が実施されず，あくまで個人の戦闘技術向上に重点が置かれていた。また，槍術の「路」（形）による訓練は軍隊にも民間にも存在したが，その目的が違っていたため，「路」の構成や訓練により得る効果も異なっていた。

注

1　明・鄭若曾：『江南経略』巻８上「兵器総論」，文淵閣四庫全書，子部。第728冊，台湾商務印書館，1988年復刻版，pp.426-427。明・王圻：『続文献通考』巻166「兵考・軍器」，『続修四庫全書』（765冊）・史部・政書類，上海古籍出版社，2002年復刻版，p.307。

2　北宋・曾公亮等：『武経総要』前集巻10，巻12，巻13，中国人民解放軍出版社，遼沈書社：『中国兵書集成』，第３冊，1988年復刻版．拒馬槍 p.476，p.698。拐突槍，拐刃槍，p.585。錐槍，梭槍，太寧筆槍，搗馬突槍，pp.696-697。

3　明・茅元儀：『武備志』，巻103,「槍」，中国人民解放軍出版社，遼沈書社：『中国兵書集成』，第31冊，1989年復刻版，pp.4289-4302。

4　明・呉殳：『手臂録・自序』，中華書局，叢書集成初編本によって復刻版，1985年，p.1。

5　林伯原ら：『明代における武術の実態に関する研究（１）』国際武道大学武道・スポーツ科学研究所年報（第14号），国際武道大学発行，pp.91-94。

6　宋・岳珂編，王曾瑜校注：『鄂国金佗萃編・続編校注』（下），巻28「永州軍事判官孫適編：『鄂王事』」，中華書局，1989年，p.1599。

7　元・脱脱等：『宋史』巻477「李全伝（下）」，中華書局，1985年復刻版，p.13850。
8　南宋・利登：『梅川行』，林伯原：『中国武術史』より，北京体育大学出版社，1994年，p.207。
9　南宋・華岳：『翠微北征録』巻７「弓制」，『続修四庫全書』（959冊），子部・兵家類，上海古籍出版社，2002年，p.258。
10　明・茅元儀：『武備志』，巻103,「槍」，中国人民解放軍出版社，遼沈書社：『中国兵書集成』，第31冊，1989年復刻版，p.4289。
11　明・程宗猷：『長槍法選』の「長槍説」，山西科学技術出版社，2006年復刻版，p.1。
12　呉殳：『手臂録』巻１「槍王説」，中華書局，叢書集成初編本によって復刻版，1985年,「本文」p.1。
13　呉殳：『手臂録』，巻３「単刀図説」。中華書局，叢書集成初編本によって復刻版，1985年，p.61。
14　呉殳：『手臂録・自序』，中華書局，叢書集成初編本によって復刻版，1985年，p.1。
15　明・戚継光：『紀效新書』（十八巻本），巻10「長兵短用説篇」，中華書局，1996年復刻版，p.116。
16　呉殳：『手臂録』，附巻上「峨嵋槍法原序」，p108。「単刀図説」。中華書局，叢書集成初編本によって復刻版，1985年，p.61。
17　明・陸世儀：『桴亭先生文集』巻６「石敬厳伝」，『続修四庫全書』（1398冊）・集部・別集類，上海古籍出版社，2002年復刻版，pp.519-520。
18　呉殳：『手臂録』巻１「石沙楊馬少林衝斗六家槍法説」，中華書局，叢書集成初編本によって復刻版，1985年，p.16。
19　元・脱脱等：『宋史』，巻195，兵九「訓練之制」，中華書局，1985年復刻版，p.4871。
20　元・馬端臨：『文献通考』，巻157,「兵九」，中華書局，1985年復刻版，p.1374。
21　清・呉殳：『手臂録』，付巻上,「程眞如の峨嵋槍法を評する」，中華書局，叢書集成初編本によって，1985年復刻版，pp.98-99。
22　明・戚継光：『紀效新書』（十八巻本），巻10「長兵短用説篇」，中華書局，1996年復刻版，p.115。
23　明・鄭若曾：『江南経略』巻八上「兵器総論」，文淵閣四庫全書，子部，第728冊，台湾商務印書館，1988年復刻版，p.426。
24　『張協状元』,『永楽大典』の13991巻,『続修四庫全書』（1768冊），集部，戯劇類，上海古籍出版社，2002年復刻版，p.228。
25　明・戚継光：『紀效新書』（巻十八本）巻首,「或問篇」，中華書局，1996年復刻版，p.6。
26　明・何良臣：『陣紀』，巻２,「技用」，中国人民解放軍出版社，遼沈書社：『中国兵書集成』，第25冊，1989年復刻版，p.728。
27　呉殳:『手臂録』，附巻上「石敬厳槍法記」，中華書局，叢書集成初編本によって復刻版，1985年，pp.109-110。
28　明・戚継光：『紀效新書』（十八巻本），巻首,「比較武芸賞罰篇」，中華書局，1996年復刻版，p.58。
29　韓嶠は二十四勢を「長槍前譜」十二勢と「長槍後譜」十二勢の二つの部分に分けるとともに，それぞれについて，各勢が繋がった「長槍前総図」と「長槍後総図」を付した。このうち，前十二勢は，中国の将兵の訓練方法をもとに並べられたものである。一方，後十二勢は韓嶠が自己の考えに基づいて編集したものである。
30　韓嶠：『武藝諸譜』の「長槍前譜」，明萬暦二十六年（1598年），韓国復刻版，pp.27-31。
31　明・戚継光：『紀效新書』（十八巻本），巻首,「或問篇」，中華書局，1996年復刻版，p.10。

（2011年12月13日　受理）

国武大紀要 (Int. Budo Univ. Journ.)
第27号：13－36（2011）

原著論文

アルペンスキー技術論 Ⅱ
―アルペンスキーにおける外向傾姿勢とターン運動における主要局面に関する教授学（運動技術論）的一考察―

塚脇　誠

Alpine Ski Technik Ⅱ
―Eine didaktische（technische）Forschung der alpinen Grundeinstellung oder des alpinen Fahrverhaltens und Hauptphase des Schwingens beim alpinen Skifahren―

Makoto TSUKAWAKI

Zusammenfassung

Jetzt wurde Carving Ski in Japan popularisiert. Und gleichzeitig sagte eine japanische Lehrmethode（nicht alle Verbände）auch, daß Caving Ski neue Bewegungstechnik brauchen soll.

Aber meine morphologischen, lehrmethodischen und didaktischen Forschungen[51),57),61),66～70)] der Bewegungstechnik von Carving Ski haben folgende andere Ergebnisse gegeben. Wenn man mit dem Carving Ski fährt, soll man neue Bewegungstechnik besonders nicht brauchen.

Die besondere Bewegungstechnik ist die Körperrichtung des Skifahrens nach außen Richtung und Außenlage als alpine Grundeinstellung.

Aber meine bisherige Forschungen sind bei der Vorbereitungsphase und Endphase oder Zwischenphase vom Schwingen beim alpinen Skifahren als Bewegungsstruktur.

Deshalb soll ich hier über eine Forschung der Huptphase vom Schwingen machen. Also ist meine Ziel dieser Forschung eine Beziehung zwischen den alpinen Grundeinstellung und den Huptphase vom Schwingen.

Natürlich soll ich diese Forschung über morphologischen, lehrmethodischen und didaktischen Aspekt betrachten. Also soll sie als querschnittswissenschaftliche Forschung sein.

Wenn man an der besten Bewegungsaufgabe des alpinen Skifahren lösen möchte, soll man "Natürliche Körperhaltung des alpinen Skifahrens" als an der wichtigsten Körperhaltung der Sportbewegung sein.

Die Ergebnisse dieser Forschung sind folgende,

◆ Bei einem Schwingen wird die Hangneigung geändert. Das wird Flachhang ⇒ Steilhang ⇒ Flachhang.

◆ Die Änderung der Hangneigung ist folgende Phasen anpassen. Das ist Flachhang ⇒ Steilhang ⇒ Flachhang … = Vorbereitungsphase ⇒ Hauptphase ⇒ Endphase／Zwischenphase ….

◆ Wenn man guten Schwingen als sportliche Bewegung machen will, soll man alle Richtung（vor / zurück, rechts / links, hoch / Tief）der Bewegung vorbereitende Körperhaltung oder Position sein.
◆ Diese Körperhaltung oder Position ist an der bestenen Variation der Köperhaltung, grungliche Körperhaltung und Vorbereitung der Körperhaltung zur sportlichen Bewegung.
◆ Diese Körperhaltung oder Position ist einen Körperschwerpunkt des Skifahrers auf der senkrechte Linie von der Fußposition des fahrenden Hangs.
◆ Die alpine Grundeinstellung bei der Vorbereitungsphase oder Endphase（Zwischenphase）ist eine Körperhaltung der Vorbereitung vom Flachhang zum Steilhang also zur Fallinie. Das heißt, daß die optimale alpine Grundeinstellung eine wichtige Körperhaltung der Bewegungsvorbereitung als der Körperschwerpunkt auf der senkrechte Linie von der Fußposition des fahrenden Hangs bringen kann.
◆ Also, ist die optimale alpine Grundeinstellung an bester Körperhaltung der Bewegungsvorbereitung zu der Hauptphase vom Schwingen. Deshalb kann man eine Möglichkeit am besten Schwingen haben.
◆ Wenn man alle Richtung（vor / zurück, rechts / links, hoch / Tief）der Bewegung vorbereitende Körperhaltung oder Position ist und die Kanten von den Skier gelöst werden, nenne ich hier diese Körperhaltung und Position "Natürliche Körperhaltung des alpinen Skifahrens".
◆ "Natürliche Körperhaltung des alpinen Skifahrens" ist eine sportliche Körperhaltung, also "eine ganze Mittellage sein", "grundliche Körperhaltug und jederzeit können ändern möglich", "jederzeit können zu aller Richtung bewegen und können angreifen oder verteidigen", deshalb "kann man Ski oder Körper zur Verfügung stellen".
◆ "Natürliche Körperhaltung des alpinen Skifahrens" ist keine statische Körperhaltung, sondern eine sportbewegliche Körperhaltung. Weil natülich Skifahren eine sportliche Bewegung und eine menschliche Handlung ist.
◆ "Natürliche Körperhaltung des alpinen Skifahrens" ist eine mittellage fahrende Schußfahren mit der allen Fahrrichtung.
◆ Eine Vorbereitung für "Natürliche Körperhaltung des alpinen Skifahrens" ist eine richtige optimale alpine Grundeinstellung bei der Vorbereitungspahase oder Zwischenphase.
◆ Wenn man keine richtige und optimale alpine Grundeinstellung ist, bekommt man nicht richtige "Natürliche Körperhaltung des alpinen Skifahrens". Das heißt, daß man nicht am besten Schwingen machen kann. Also wird man nur schlechten Schwingen machen können.
◆ Bei der "Natürliche Körperhaltung des alpinen Skifahrens" ist kein Kantenwinkel des Skis auf der Schnee. Deshalb kann man am wenigsten Widerstand gegen die Schnee fahren und eine Möglichkeit zur Beschleunigung haben. Aber gleichzeitig ist es an der schwierigsten Position zu der Skistabilisierung der Fahrtrichtung.
◆ "Natürliche Körperhaltung des alpinen Skifahrens" ist an der wichtigsten grundlichen Theorie des alpinen Wettkampfs. Weil diese Position am wenigsten Widerstand gegen die Schnee ist. Das heißt, daß diese Position eine beste Möglichkeit zur Beschleunigung bringen kann.
◆ Und wenn man mit Carving Ski fahrt, bracht man richtige optimale alpine Grundeinstellung. Weil sie als eine entscheidende Körperhaltung für bessere Schwingen ist.

キーワード（Schlüsselwort）：カービングスキー（Carving Ski），運動原理（Bewegungsprinzip），運動構造（Bewegungsstruktur），運動課題（Bewegungsaufgabe），運動モルフォロギー（Morphologie der Bewegung），方法論（Methodik），教授学（Didaktik），外向傾姿勢（alpine Grundeinstellung oder ein alpine Fahrverhalten），アルペンスキーにおける自然体（Natürliche Körperhaltung des alpinen Skifahrens）

【緒論】

1997年以降，わが国において，カービングスキー（ニューコンセプトスキー）が，急速に普及した。近年，これに伴い横ズレの少ないターン運動（カービングターン）を実践できるスキーヤーが，非常に多くなった。10年程前までは，全日本アルペンスキー選手権大会を含む国際（FIS）大会や国民体育大会等，日本を代表するハイレベルな競技会における練習バーン（エリア）等でしか，通常は観る（観察）ことができなかった，滑走性の高い，ブレーキング要素の少ないターン運動であり，一般的には質の高いターン運動と評価されているものである。そしてカービングスキーは，わが国においてその普及のみならず，アルペンスキーのターン運動の技術論へも，同時に大きな影響を与えることとなった。

そして現在も，その新しい用具：カービングスキーを使ってのターン運動技術（論）に関して，様々な観点・手法により，ターン運動の技術論的な研究が，国際的にも多方面で展開されている。

わが国においても，主に自然科学的な観点・手法のみによって考察・研究されたターン運動技術（論）が，“新しい（最新）ターン運動技術（論）”[74～80] などとして紹介・導入されてきている。そこでは，ターン運動中に“上下運動をあまり使わない（通称：ヴェンディングターン）”，滑走中の“内向姿勢と内傾姿勢”，“ターン内脚主導・内脚荷重”といった運動技術が，その中核的な運動技術論として展開されている。この中核的な運動技術に関して，技術論的な加筆・修正が行われ，更なる展開が現在もなお試みられている。

この新しい（最新とされる）運動技術（論）は，これまでのアルペンスキーにおけるターン運動技術（論）を，一新するような強いインパクトを持ち，日本国内において特に注目され，急速に普及・浸透されることとなった。

しかしカービングスキーの普及，そしてその新しいターン運動技術（論）の普及・浸透と，更なる論述展開に伴い，雪上において，これまであまり観られなかった問題が多々発生してきている。特に，「スキーのコントロール（スキー操作，スピード，…）が難しくなった」と訴えるスキーヤー（スキー学校，スキー授業の学習者含む）や，現場のスキー指導者が非常に多くなり，急斜面，コブ斜面，アイスバーン，新・深雪滑走，ロングコース滑走等，様々に変化する自然環境の中での実践的なスキー滑走（運動）に，支障（不都合）を来たすことになっている。つまり，この新しいターン運動技術（論）に関して，徐々にその問題点や矛盾点が，スポーツ運動の実践の場において，浮き彫りとなってきているのである。

また筆者が指導的な立場で，スキー指導者講習会・有資格スキー指導者研修会等に参加・指導する際，スポーツ運動技術論・スポーツ指導方法論の専門的な観点（立場）から，近年の日本の新しい（最新とされる）ターン運動技術（論）の実践性・有効性に関する見解・意見を求められることが，年々増加している。これは，指導現場における運動技術論と，指導方法論に関する理論的な諸問題（実践性の欠如，不合理性，妥当性等）が，スキー指導者，及び学習者（スキーヤー）に，明確に認識されてきている証拠と捉えることができる。

更に，ゲレンデにおける滑走中の衝突事故や障害・傷害（特に膝関節）が，増加していることも事実である[51),57)]。

このような現象・現状は，アルペンスキースポーツ運動の技能向上・技術習得，そしてアルペンスキースポーツ本来の魅力・楽しみ（方），つまりスポーツ運動そのものの普及・発展において，非常に大きなマイナス（負）の影響を与えることが，危惧されるのである。

このように近年，この新しい（最新とされる）ターン運動の中核的な運動技術（論）に関して，指導現場を含めて，理論的観点・実践的観点の双方から，様々な矛盾点・問題点・不都合な点が顕著に表れてきている。そこで現在は，技術論的な加筆や修正が後付けとして行われ，更なる論述展開が試みられている。しかしこれらは，根本的なスポーツ運動技術（論）の捉え方，つまり自然科学的な地平・手法のみによるスポーツ運動技術論の考察・研究と，その指導方法論の構築・展開に問題が潜んでいるため，根本的・具体的な解決には，到底至らないと考えられる。

なぜなら，スキーのターン運動に限らず，我々人間のスポーツ運動という現象・行為が，自然科学的な観点（数量化）からのみでの考察・研究と結果からでは，解決できない問題を多く含んでいるからである。

例えば，現実のスキー滑走運動においては，我々が直滑降する際，左右の脚（足）のスタンス（幅）を腰幅～肩幅程度にした場合と，さらに限界に近い程度に大きく開いた（大開脚）場合の安定感（身体バランス

保持のし易さ）＝滑走のし易さを比較することをあげることができる。

自然科学（物理学）的には，物体の重量が同じ場合，物体を支持する基底面積が大きければ大きい程，そしてその物体の重心がその基底面積上のより低い位置にあればある程，その物体は安定する＝バランス保持が容易いということになる。

しかし，スキーヤーの直滑降（滑走）運動の場合は，スタンスをより大きく開けば開く（基底面積を大きくすればする）程，スキーヤーの滑走運動が安定するとは限らないのが一般的であり，開き過ぎると不安定（であると感じる）となるスキーヤーが殆どである。従って人間の現実のスポーツ運動の場合，物体を対象とした物理学的な理論（結論）とは，逆の結果になることも少なくないのである。

これは，我々人間のスポーツ運動（活動）には，常に運動課題（Bewegungsaufgabe）と運動目的（Bewegungsziel）が存在し，その運動全てに意味と価値が存在しており，いかにしてその運動課題を解決・達成するのか，そしてその成果が，常に問われているからである。

また，スポーツ運動課題解決のための手段であるスポーツ運動技術の正当性（評価）に関しては，スポーツ運動の実践において，そのスポーツ運動（課題）における成功や確認された成果が，最も重要な判断基準の一つとなるからである。

そこで筆者は，人間のスポーツ運動＝行為としてのスキーヤーのターン運動技術にも有益な理論，さらにターン運動技術の指導現場に直接繋がる（＝有効である）運動技術論・指導方法論（実践的理論）構築のため，これまで，この日本の新しいとされるターン運動技術（論）に対して，自然科学的な研究地平のみではなく，運動モルフォロギー的研究法（現象科学的考察法）を基に，スポーツ教授学（Didaktik）的・スポーツ指導方法論（Methodik）的観点から，総合（学際）的・横断科学的（Querschnittswissenschaft）な考察・研究[47),51),57),61),63),65～70)] を行ってきた。

それら先行の諸研究[47),51),57),61),63),65～70)] の考察から導き出された結論は，日本の新しいターン運動技術の中核的な様々な運動技術（論）が，“実践的なターン運動技術（論）として，適していない”，といったものであった。つまり，スポーツ運動原理に基づいたスポーツの運動技術論（教授学）的な観点からは，「ターン運動の局面構造」[47)]，ターン運動の主要局面における「上下運動」[51)]，「ターンの内・外脚荷重」[57)]，「内・外向姿勢」[61)]，「ターン運動の局面構造Ⅱ」[63)]，「ターン運動技術の類縁性」[65)]，「ターンの運動構造」[66)]，「ストックワーク」[67)]，「内・外傾姿勢」[68)]，「外向傾姿勢」[69)]，「エッジング法」[70)] に関して，カービングスキー使用におけるターン運動においても，これまでのターン運動技術（論）を覆すような，顕著で決定的なスポーツ運動技術論的な変化（違い）は，確認・指摘されなかったのである。

特にターン運動中の滑走姿勢に関する筆者の先行研究[61),68),69)] においては，カービングスキーの滑走性能・特性からの観点，スポーツの運動原理（運動の合目的性，運動の経済性）からの観点，そしてターン運動の質的な観点（局面構造論，運動の伝導）から，外向姿勢[61)] と外傾姿勢[68)] が，カービングスキーを使用した今現在の実践的なターン運動においても，有益な（意味・価値のある）滑走姿勢であるといった結論（運動技術論）が導かれているのである。

また，その発展的な研究である「外向傾姿勢」に関する先行研究[69)] においては，外向姿勢と外傾姿勢とが，複合的に融合した運動姿勢（外向傾姿勢）となることで，ターン運動の運動課題解決に，更に有益な（運動）姿勢技術となることがわかった。

このように，これまでわが国において行われてこなかった，アルペンスキーの滑走姿勢に関する専門教授学（運動技術論）的な観点からの専門的考察・研究である先行の諸研究[61),68),69)] からは，これまでターン運動の基本姿勢として重要視・有益性が認められ，必要不可欠であり，習得されるべき（＝指導されるべき）運動（滑走）姿勢であるとされた外向姿勢・外傾姿勢，そしてその融合姿勢である外向傾姿勢が，現在のターン運動中の滑走姿勢においても，今なお有益であり，新しいとされる内向姿勢・内傾姿勢（内向傾姿勢）が，“実践的なターン運動技術（論）として適していない”といった結論が導き出されているのである。

【問題の所在と研究目的】

緒論の通り，筆者はこれまで，わが国において自然科学的な観点から考察・研究され導かれた“新しい（最新）とされるターン運動技術（論）”に関して，その実践的な有効性・妥当性に関して，総合的・学際的な観点からの考察・研究を行ってきた。

しかし，ターン運動における滑走姿勢（運動技術）に関する「内・外向姿勢」[61)]，「内・外傾姿勢」[68)]，「外

向傾姿勢」[69] といったこれら先行の諸研究は，ターン運動の局面構造論的な観点からは，ターン運動の終末局面における運動技術論（姿勢技術）なのである。また，連続する運動としての連続ターン運動（循環運動）の場合は，前のターン運動の終末局面と，次のターン運動の準備局面とが局面融合した，中間局面（融合局面）における運動技術論（滑走姿勢）なのである。

一般的なスポーツ運動の局面構造論において，スポーツ運動には，必ず特定の解決すべき運動課題が常に存在し，その運動課題を直接解決する最も重要な局面が主要局面である。そして，スポーツ運動課題を最も良く解決（＝質の高い運動技術の展開）するためには，最良の準備局面が前提条件となっているのである。また，連続する循環運動の場合は，その準備局面ともなる中間局面（終末局面と準備局面の最適な融合：局面融合）における質（できばえ・運動経過）が，主要局面の質を決定する最も重要な要因であることは，承知の事実である。

つまりこれまでの筆者の先行諸研究[47),51),57),61),65~70)] では，ターン運動における準備局面（又は，終末局面，中間局面）における運動（姿勢）技術に，主に焦点をあてた考察・研究であり，ターン運動の課題解決（Lösung der Bewegungsaufgabe）を直接行う最も重要な局面である“ターン運動における主要局面”と，外向傾姿勢との関係系に関する考察・研究は，行われていないのである。そのため，終末局面／中間局面で有益とされた運動（姿勢）技術の意味・価値（有益性）に関する，主要局面との関係系は，不明瞭なままとなっているのである。

スポーツ運動の準備局面は，主要局面における運動課題を最も良く解決する局面であることから，準備局面で有益とされた外向傾姿勢は，主要局面の運動課題（エッジングの切り換え）解決において，最適な準備姿勢であることが，ここで推測される。

そこで本研究では，アルペンスキーのターン運動における終末局面／中間局面において，有益な姿勢（運動技術）として導かれた外向傾姿勢と，アルペンスキーにおけるターン運動の主要局面との関係系を，スポーツ運動の局面構造論的な観点から考察し，その意味・価値を明らかにすることを目的とする。

先行の諸研究によって，ターン運動において最も有益とされた姿勢（運動技術）である外向傾姿勢が，最も良く・有益な準備局面（又は中間局面）での姿勢（運動技術）であることが本研究により明らかとなれば，外向傾姿勢が，ターン運動の機能的な有益性[61),68),69)] のみではなく，ターン運動技術の局面構造論的な観点（運動質）からも必要不可欠であることが明らかとなる。つまり，外向傾姿勢の重要性・有益性が，更に明白となるのである。

また，ターン運動における適切な外向傾姿勢が，質の高いターン運動を可能とする一要因であることが明らかとなった場合，逆説的に，ターン運動の質の良し悪しといった，ターン運動技術の運動質の評価，つまりターン運動の質を見抜くための一つの観点・視点（重要な着眼点）としても，外向傾姿勢が重要な意味・価値をもつことになるのである。

つまり，より優れた実践的・専門的指導方法論（Spezielle Methodik）構築・展開のための基礎理論（運動技術論）となりうる考察・研究としても，重要なものとなるのである。

【研究方法】

本研究は，スポーツ運動技術論（教授学）的な観点から，アルペンスキーというスポーツ運動のターン運動における主要局面と，筆者の先行諸研究[61),68),69)] で明らかにされた，準備局面・終末局面，もしくは中間局面における外向傾姿勢の有益性（意味・価値）・機能的特性との関係系を明らかにすることを目的とした，専門的教授学的（Spezielle Didaktik）な考察・研究である。

また同時に，専門的なターン運動の技術論を発展・展開させるための考察・研究であり，専門的な指導方法論構築・展開への基礎理論となりうる考察・研究でもある。

従って本研究は，必然的に学際的・横断科学的（Querschnittswissenschaft）な考察が必要となるのである。

そこで本研究においても，これまでの筆者の先行諸研究[41),51),57),61),63),65~70)] と同様，自然科学的な研究方法によって明らかにされる諸事実をも含め，人間のスポーツ運動としてのターン運動の運動構造を数量的にだけではなく，質的な側面から捉える研究方法が必要となる。そのためには，アルペンスキーのターン運動を，ゲシュタルトとして捉える研究の地平でなければ，考察は不可能である。つまり，スポーツ運動をゲシュタルトとして捉え，我々が知覚することのできる現象形態と，その構造特性に基づいて考察する，運動

モルフォロギーの研究方法（現象科学的）を主に用いる必要があるのである。

運動モルフォロギーの研究は，「スポーツ運動を目を通して外から知覚していくだけでなく，体験し“中から”知覚することによって大きく補充され，拡大」[14)P.107]された，印象分析による考察方法を用いるものである。従って，実際のターン運動の印象分析による運動観察（自己観察，他者観察）より得られた，「運動経過（Bewegungsablauf）の空時的な展開の仕方を，そのはじめから終わりまでの経過にしたがって，とくに機能的な視点から，口頭であるいは文字によって表わす」[9)P.256]運動記述（Bewegungsbeschreibubg）を，重要な手がかりとして考察する必要があるのである。

またスポーツの運動技術論に関して，特にその運動技術の質（良し悪し：運動技術の評価）を検討・展開する場合，スポーツの運動原理（Bewegungsprinzip）に基づいた有益性（意味・価値）を，考察・検討することが重要となる。それは，スポーツ運動技術の正当性・妥当性が，そのスポーツ運動の実践においてのみ認められるのであり，その成功・成果は，そのスポーツ運動技術を評価する最も重要な判断基準となるからである。

我々人間の行為としてのスポーツ運動には，それぞれの目的，つまり運動課題が常に存在し，運動課題が存在しない場合はない。従って本研究においても，アルペンスキースポーツにおける運動課題を，適確に捉えて論述展開する必要がある。

また，特定のスポーツ運動課題を直接解決する重要な局面が，スポーツ運動の局面構造論における主要局面であるため，本研究においても，アルペンスキースポーツの運動課題を適確に捉えた上，その運動課題が主要局面において，どのように解決されるのか，その準備局面（中間局面）における外向傾姿勢との関係系・影響を，スポーツ運動の原理に基づき，考察する必要があるのである。

つまり本研究では，ターン運動の準備局面（外向傾姿勢）から，主要局面における運動記述（滑走姿勢，機能的観点からの記述等）を手がかりに考察することが必要となるのである。

しかし本研究においては，不要な議論を避けるため，そして明快な論述展開のため，考察・研究対象を，以下のように限定して論述展開することとする。

ターン運動における局面構造論に関しては，筆者の先行諸研究[47),63)]で考察・研究された，アルペンスキーのターン運動における局面構造論を基に，論述展開することとする。

人間の運動姿勢に関しては，様々な関節とその可動範囲・筋肉群等が複雑に密接に関係しており，人体の機能解剖学的に厳密に記述することは，非常に困難である。従って，筆者の先行研究[69)]と同様に，本研究の対象としているターン運動における運動（滑走）姿勢，つまり外向傾姿勢を，外向姿勢と外傾姿勢，そして中間姿勢といった姿勢構成要素の融合した複合的な運動（滑走）姿勢であると定義し，論述展開することとする。

そして，アルペンスキーのターン運動において，外向傾姿勢が顕著に観察できるのは，エッジングの切り換えを伴ったターン運動，つまりシュビンゲン（Schwingen）[65)P.61]である。従って，本研究の研究対象とするターン運動技術を，「立ち上がり抜重によるパラレルターン：Parallelschwingen mit Hochgehen」（通称：ストレッチングターン）とする。「立ち上がり抜重によるパラレルターン」は，筆者の先行研究[51)]により，カービングスキーを使用したターン運動に，最も推奨されるターン運動技術である。また更に，一般的に多くのスキーヤーが，習得目標とするターン運動技術であることからも，今後，現場での指導方法論への発展・展開の可能性も含めて，研究対象のターン運動技術として最適・有益と考えられる。

ターン運動におけるストックワークと腕の位置関係に関しては，滑走運動の身体姿勢において重要な課題（テーマ）であるが，本研究においては記述・論述展開しないこととする。

【本論】

第１節：アルペンスキースポーツにおける運動課題と運動技術

前述の通り，我々人間の行為としてのスポーツ運動には，それぞれの目的，つまり運動課題が常に存在し，運動課題が存在しない場合はない。従って本研究においても，アルペンスキースポーツにおける運動課題を，ここで明確に把握することとする。

現在，様々な目的・志向で運動行為として行われているアルペンスキースポーツ運動で，その全てに共通している運動課題は，刻々と変化する様々な条件・状況（二度と同じ条件・状況のない自然環境）において，「スキーという板の上に人間が乗り，それを人間が操って傾斜のある雪の上を滑って移動する」[41)P.4]こ

とである。つまり，雪の斜面を，自己の身体を意のままに操りながら，アルペンスキーという用具をも自在に操って，（上から下へ）自由自在に滑走することである。このスポーツ運動課題を解決するために，滑走中，自由自在に滑走方向を変えることが必要となる。これがターン運動であり，このターン運動を実現するための方法，つまり様々なターン運動技術が必要となるのである。また，このターン運動技術は，一般的な運動原理に基づいた運動技術（解決方法）でなければならないことは言うまでもない。

またスポーツ運動技術の正当性は，「実践によって確認されなければならない」[14)P.267]のであり，「スポーツにおける成功や確認された成果は，あるスポーツ技術の正当さを示す唯一の判断基準とみなされる」[14)P.268]のである。つまり，スポーツ運動技術は，「常に他の諸要因との関連と影響のなかで考察され，判断されなければならない」[14)P.268]のである。

アルペンスキーというスポーツ運動においても同様に，ターン運動技術（論）に関しては，その実践において，運動課題が解決・達成されているのか否かで，その正当性・質を判断することが最も重要である。つまり，アルペンスキーにおけるターン運動技術は，千変万化する自然環境（様々に変化する諸要因：環境，滑走スピード，使用用具等……）の中で，自由自在に雪の斜面を滑り降りるという実践における成功と成果が，唯一の評価・判断基準となるのである。

従って，アルペンスキーにおける運動原理に基づいたターン運動技術とは，ターン弧の自在性（条件・状況に最適なターン弧の大きさ，深さの調節）である。つまり，“速く（Schnell)”，“確実に（Sicher)”，“コントロール（Kontrolle)”といった要素が，ターン運動技術に求められているのである。

そのため，アルペンスキーにおけるターン運動においては，その運動課題を解決するために有益と考えられる運動技術，特にターン運動の局面構造論[47),63)]による主要局面における運動技術は，必要不可欠な運動技術の一つであると捉えなければならない。その有益性とは，ターン運動における運動原理に基づいて考察される必要があることは，言うまでもない。

また本研究におけるターン運動技術は，世界的なトップ選手達のターン運動のような，個性的なターン運動のスタイル（Stil）ではなく，一般的（＝基本的）なターン運動技術のタイプ（Typ）としてターン運動を捉えて観察・考察するものである。

第２節：アルペンスキーのターン運動における局面構造（論）

筆者の先行研究[47)]より，立ち上がり抜重を使ったパラレルターン（Parallelschwingen mit Hochgehen）運動においては，以下のターン運動の局面構造が明らかとなっている。

アルペンスキーのターン運動を成立させるためには，エッジングの切り換え（Umkanten）を含んだ局面が，運動課題を直接解決する機能を持ち，全体の動きの中枢部分を意味する局面，即ち主要局面と言える。また厳密（時間・空間的）には，ターン＝滑走方向の変更が，エッジングの切り換え（エッジが雪面をグリップしていない時＝エッジングの開放時）と同時に発生しており，パラレルターンの運動構造における主要局面は，エッジングを切り換える局面を含んでいなければならないこともわかる。従って準備局面は，エッジングを切り換えるために立ち上っていく局面であり，終末局面は，スキーのエッジングが切り換わった後，ターン方向を調節していく局面ということになる〔図Ⅰ：A〕。

１回だけ，つまり右 or 左ターンのみ行われれば，ターン運動は３局面構造を示し，非循環運動である。しかしアルペンスキーのターン運動は，技術習得のための意図的な（分習法的）練習行為以外では，通常，左右連続して行われる運動であり，連続ターンの局面構造についても，ここで検討・考察することとする。

連続したパラレルターンの運動は，その第１ターンの準備局面⇒主要局面⇒終末局面とターン運動を終了させつつ，第２ターンの準備を同時に行っている。つまり，第１ターンの終末局面において同時に第２ターンの準備を行っているのである。従って第１ターンの終末局面と第２ターンの準備局面とは融合し，融合局面が成立することとなる（＝中間局面）。そして第２ターンの主要局面へと移行していき，融合局面（＝中間局面）から第３ターン運動の主要局面へと移行して行くのである。この局面の移行は，スキーヤーが意図的に，または転倒等によってターンを終了するまで続けられることになる。従って，アルペンスキーの連続したターン運動は，融合局面（中間局面）を含んだ２局面構造を示しており，循環運動〔図Ⅰ：B〕と言えるのである。

◆１ターンとして行われた非循環運動の場合〔図Ⅰ：A〕は，

・準備局面（Vorbereitungsphase）：主にエッジング

の切り換えを行う準備をする局面。
・主要局面（Hauptphase）：主にエッジングの切り換えを行う局面。
・終末局面（Endphase）：エッジングの切り換えが終了し，徐々にスキーの回旋（Drehen）・エッジング（Kanten）・荷重（Belasten）により，回転弧を調節し，運動を終了させる局面。

◆左右の連続ターンとして行われた循環運動の場合〔図Ⅰ：B〕は，
・準備局面（Vorbereitungsphase）：主にエッジングの切り換えを行う準備をする局面。
・主要局面（Hauptphase）：主にエッジングの切り換えを行う局面。
・中間局面（Zwischenphase）：エッジングの切り換えが終了し，徐々にスキーの回旋（Drehen）・エッジング（Kanten）・荷重（Belasten）により，回転弧を調節する。同時に，次のターン運動のために，主にエッジングの切り換えを行う準備をする局面。この局面では前のターン運動の終末局面と，次のターン運動の準備局面とが同時に行われ，局面融合（Bewegungsverschmelzung）が起きる。
・主要局面（Hauptphase）：主にエッジングの切り換えを行う局面。
↓
・終末局面（Endphase）：エッジングの切り換えが終了し，徐々にスキーの回旋（Drehen）・エッジング（Kanten）・荷重（Belasten）により，回転弧を調節し，運動を終了させる局面。

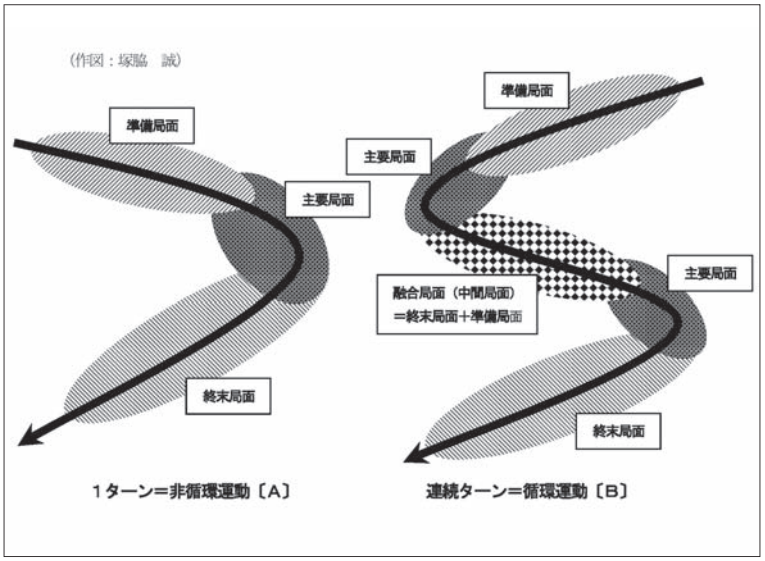
第３節：アルペンスキーにおけるターン運動の運動構造（論）

アルペンスキーにおけるターン運動の運動構造における主要構成要素に関しては，筆者の先行研究[66]より，以下の結論が導かれている。

◆カービングスキーによるターン運動の運動構造における主要構成要素は，スキーを“エッジングすること”，“回旋すること”，スキーに“荷重すること”の３要素である。これは，ノーマルスキーによるこれまでのターン運動の運動構造における主要構成要素と何ら違いは無い。

◆ターン運動の運動構造に，新しい構成要素が加わった，もしくはある構成要素が無くなった，といった構造そのものに変化が生じた場合，その解決方法として，新しいターン運動技術が発生・必要になることは考えられる。しかし，ターン運動構造の主要構成要素そのものに関して違いが無いため，その解決方法としてのターン運動技術論（先行研究[51),57),61)]）に違いが現れないのは，必然的な結論である。

◆サイドカーブ（R）が小さいカービングスキーの構造上の特徴から生じる滑走特性によって，実際のターン運動においては，３つの主要構成要素に対する人間の働きかけ（＝操作）の必要性の度合いに，違いが生じる。従って，カービングスキーによるター



〔図Ⅰ：アルペンスキーターン運動の局面構造：イメージ図[47) p.150]〕

ン運動の３つの主要構成要素の関係系には，ノーマルスキーとは，若干の違いが明らかにされた。

◆しかしここで混同してはならないのは，現実のターン運動において，３つのターン運動の主要構成要素は，最も重要な要素であり，その重要度に違いは無い。つまり“回旋する”という主要構成要素が，図の中から消えて無くなることはないのである。

◆その３つの主要構成要素に対する人間の働きかけ（＝操作）の必要性の度合い（関係系）は，〔図Ⅱ〕のような関係図になる。つまり，人間が行為としてターン運動（スポーツ運動）を行う場合，ターン運動の運動構造の主要構成要素の関係系は，その主要構成要素の位置関係を，変化させるとこで，表現が可能となる。

〔図Ⅱ〕から言えることは，カービングスキーのサイドカーブ（R）が，より小さいことによって，

・スキーが適切にエッジングされていれば，スキーが撓むことが可能となる。

・スキーを適切に荷重すると，スキーが撓む。

・スキーが撓めば，自動的方向付けられることになる。つまり自動的に回旋されたことになり，スキーヤーがスキーを回旋する必要性が減る。

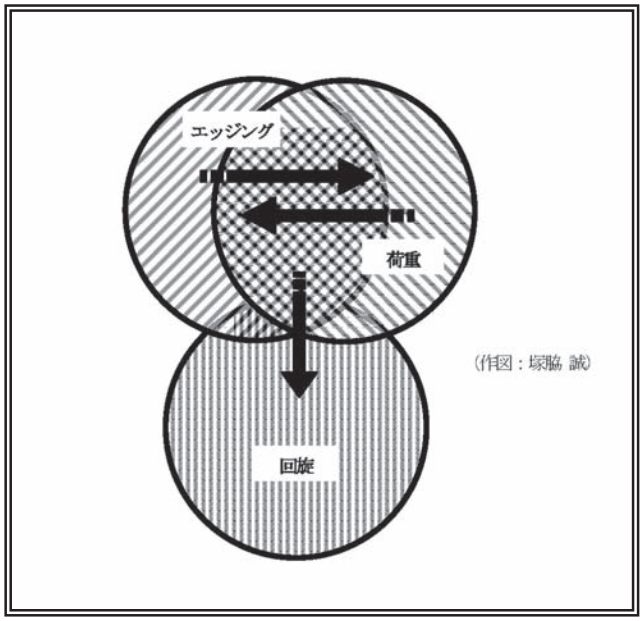
ここでは，適切なエッジング＋適切な荷重（エッジングと荷重のより密接な関係）により，スキーが撓み，自動的に方向付け（回旋）されるので，スキーヤーがスキーを回旋するという構成要素が，若干その操作の必要性の立場を，譲ったことになる。また近年，短いスキーを使用するようになり，スキーの回旋操作は，より容易くなり，ますます回旋操作の必要性が，低下してきていると考えられる。つまりエッジング要素とスキーの撓み（＝荷重要素）とが，より密接な関係（図の中心方向へリングが移動，お互いがより多く重なり合う）となり，回旋要素を表すリングが，中心より離れる（他の２つのリングと重なる部分が減る）ことになるのである。

またスキーヤーが，スキーを回旋するというターン運動構造の主要構成要素は，他の２つの構成要素のリングから離れて完全に独立すること，または図から消えて無くなる（必要なくなる）ことは，考えられない。

これは，本研究におけるターン運動とは，人間のスポーツ運動行為におけるターン運動であるからであり，アルペンスキースポーツが，千変万化する冬山の自然環境の中で，自由自在にスキーを操り，ターン運動をしながら滑走するスポーツ運動であるからである。

第４節：アルペンスキーのターン運動における外向傾姿勢

筆者の先行研究[69]において，本研究の研究対象である外向傾姿勢とは，アルペンスキーのターン運動に



〔図Ⅱ：ターン運動の運動構造における主要構成要素の関係系[66)p.55]〕

おける，“中間姿勢”，“外向姿勢”，“外傾姿勢”といった姿勢構成要素の融合した複合的な運動（滑走）姿勢である。それぞれの３つの運動（滑走）姿勢が融合することによって具現された運動姿勢（技術）：適切な外向傾姿勢において機能する，ターン運動に与える影響・機能的な特性，つまり補強・増強される機能的特性として，以下の結論が導かれている。

◆股関節の可動域を拡大可能とする運動（滑走）姿勢である。
- ・従って，エッジング角をより効率よくコントロールすることが可能となる（＝エッジング要素）。
- ・従って，滑走中の左右脚（スキー）における落差（高低差）を解決，調整可能とする（＝荷重要素）。

◆つまり外向傾姿勢が，エッジング要素と荷重要素に関して，特に有益な運動（滑走）姿勢であることから，ターン運動の運動構造論[66]の観点からも，カービングスキーのターン運動に非常に重要な運動（滑走）姿勢であることがわかる。従って外向傾姿勢は，これまで以上に重要な運動（滑走）姿勢ということになる。

◆ターン外（谷）側脚へのより確実な荷重を可能とするので，ターン運動（滑走）中の身体姿勢バランス保持[57]にも有益である。

◆外向傾姿勢によるターン運動では，ターン外（谷）側脚への荷重が可能・容易で，滑走中の前後方向の身体姿勢バランス保持が容易となる。

◆「みせかけの外向傾姿勢」である過度な外向傾姿勢は，スポーツ運動技術における“スポーツ運動の技術的な負の連鎖（Bewegungstechnische Fehlerketten）”を誘発してしまう可能性のある運動姿勢であり，注意が必要である。

◆『適切な外向傾姿勢』は，外見上観察できる“形”のみで判断されるのではなく，現実・実践のターン運動における成果と諸条件をも含めて，総合的に考察され判断されなければならい。

◆外向姿勢は，外向傾姿勢の構成要素の一つとなることによって，回旋エネルギーの伝導といった機能的特性以外に，外傾姿勢を調整（補強）する非常に重要な姿勢となる。つまりターン外脚荷重とエッジング角の調整に深く関与（大きな影響力）することになる。

以上の結論は，緒論でも述べた通り，ターン運動の準備局面／中間局面における外向傾姿勢の有益性（意味・価値）・機能的特性[69]に関して，まとめられているものである。

第５節：アルペンスキーのターン運動における運動記述

本研究において考察・研究対象としているターン運動技術は，立ち上がり抜重によるパラレルターン（Parallelschwingen mit Hochgehen：ストレッチングターン）である。従ってここでは，この運動技術に関する運動記述を，右方向へのターン運動において記述することとする。

先ず右ターンの準備局面として，最大傾斜線から滑走方向が遠ざかる“山回り”における運動記述を行う。つまりここでは，右脚が谷側（外）脚となる（左方向への）山回りが，適切な外向傾姿勢において実施される。

本研究の研究対象でもあるこの外向傾姿勢は，筆者の先行研究[69]において，アルペンスキーのターン運動における，“中間姿勢”，“外向姿勢”，“外傾姿勢”といった姿勢構成要素の融合した複合的な運動（滑走）姿勢であり，ここでは模式図で表すこととする。

身体側方（真横）からの模式図，つまり中間姿勢（身体の前後方向への傾き，前後方向バランスの保持）は，〔図Ⅲ：A，E〕で表すことができる。また一部，〔図Ⅳ：A，図Ⅴ：A〕でも表されている。

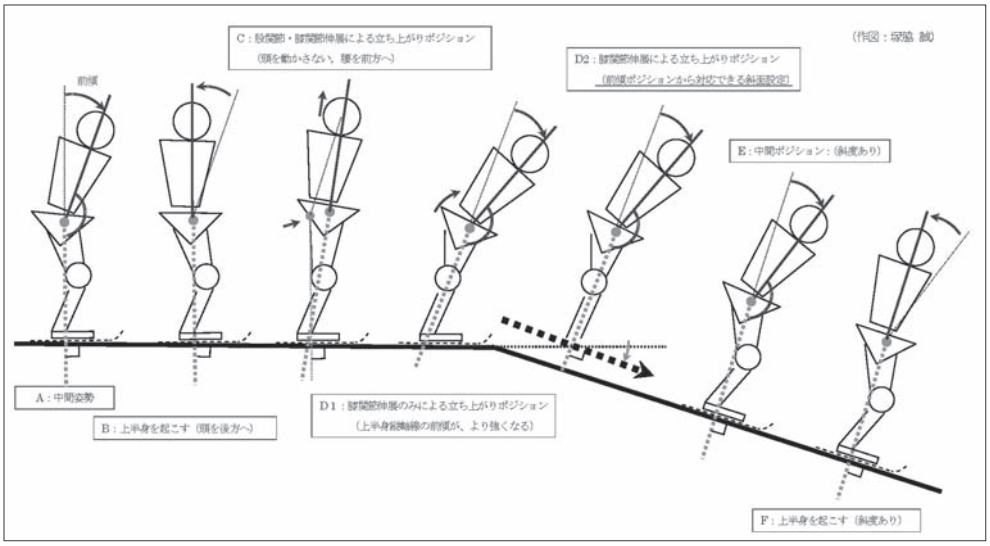
身体正面からの模式図，つまり外傾姿勢（身体の左右方向への傾き，左右方向バランスの保持）は，〔図Ⅳ：A，図Ⅴ：A，図Ⅵ：A〕で表すことができる。

また外向姿勢に関しては，模式図〔図Ⅳ：A，図Ⅴ：A〕において表わされている。

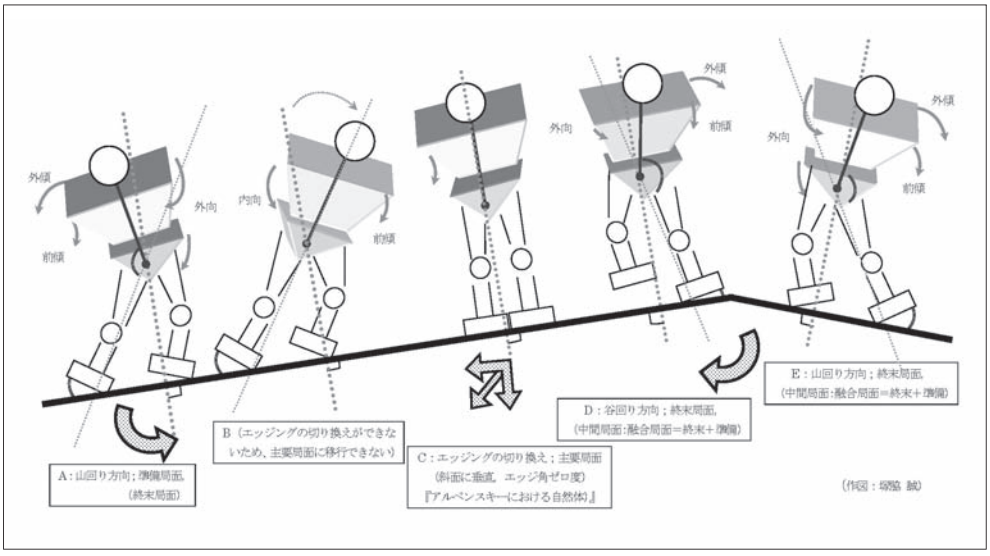
準備局面における外向傾姿勢に関する機能的特性・有益性に関しては，筆者の先行研究[69]から前述の第４節で述べた通りである。

この準備局面においては，中間姿勢により，上半身は滑走方向に前傾している〔図Ⅲ：A，E，図Ⅳ：A，図Ⅴ：A〕。そしてターン内（山，左）側の肩関節を，滑走方向前方に出すことによって，上半身を右（方向へ）回旋，つまり胸をターン外（谷／右）側に向けた外向姿勢〔図Ⅳ：A，図Ⅴ：A〕となる。そして，左右の肩を結んだ仮想の水平軸線が，滑走斜面と平行になるよう，ターン外（谷，右）側の肩関節を下げた外傾姿勢〔図Ⅳ：A，図Ⅴ：A，図Ⅵ：A〕となる。

また腰部に関しても同様に，ターン内（山，左）側の腰部（大転子）を，滑走方向前方に出すことによっ



〔図Ⅲ：身体前後・滑走方向姿勢模式図（側方より）〕



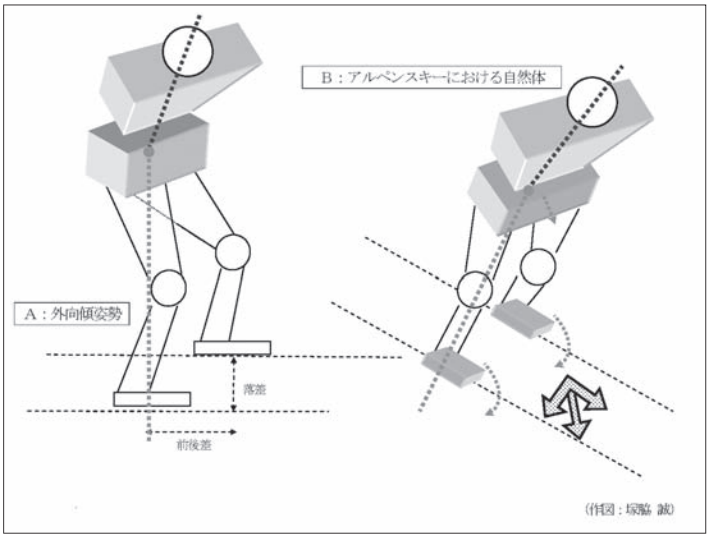
〔図Ⅳ：ターン運動の局面構造模式図（正面より）〕

て，腰部を右（方向へ）回旋，つまり臍をターン外（谷，右）側に向けた外向姿勢〔図Ⅳ：A，図Ⅴ：A〕となる。そして，左右の腰部（大転子）を結んだ仮想の水平軸線が，滑走斜面と平行になるよう，ターン外（谷，右）側の腰部（大転子）を下げた外傾姿勢〔図Ⅳ：A，図Ⅴ：A，図Ⅵ：A〕となる。

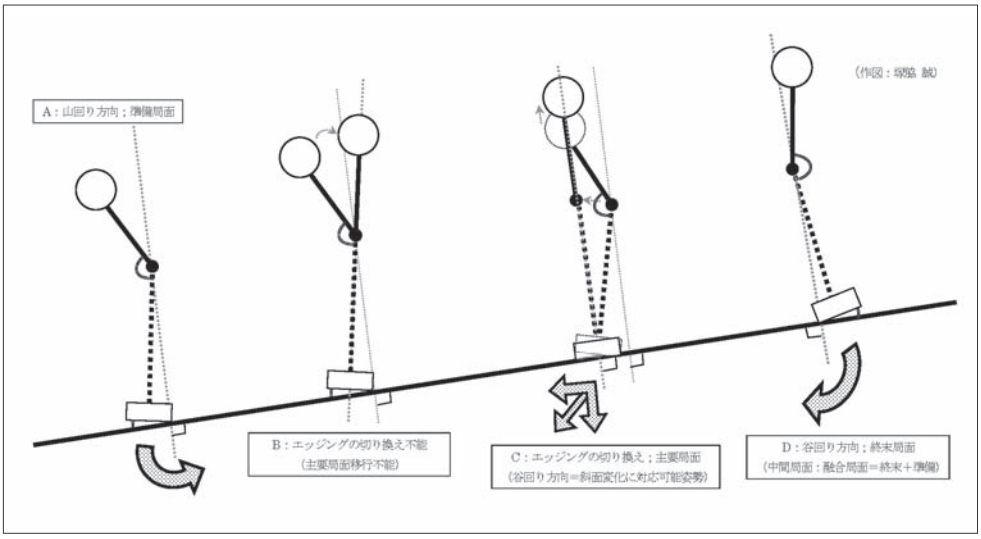
ターン運動の主要局面においては，最大傾斜線を越えて滑走方向を変更する運動課題解決のために，エッジングの切り換え（Umkanten）が行われる。エッジングの切り換えを含んだ，エッジング角の調節方法は，筆者の先行研究[70]において，股関節からのエッジング法をベース（基本形，基盤）とすることが，最も有益であると[70)P.83]導かれている。よって，本研究においては，股関節エッジング法での運動記述を展開することとする。

（左方向への）山回りにおける外向傾姿勢（準備局面）から，右斜め前方＆谷側（次のターンの中心）方向，つまり前方・横方向に立ち上がるように立ち上がる〔図Ⅳ：C，図Ⅴ：B，図Ⅵ：C〕。

この際重要なのは，〔図Ⅵ：C〕が示すように，頭



〔図Ⅴ：アルペンスキーにおける外向傾姿勢と自然体模式図〕



〔図Ⅵ：ターン運動の主要局面模式図（正面より）：身体縦軸のみ〕

部を身体の左右方向には動かさず，また同時に〔図Ⅲ：D１〕が示すように，上半身の仮想の縦軸線（頭と丹田を結んだ軸線）の前傾の傾き角度を維持したまま（変えずに），主に膝関節の伸展を駆使して，腰部（丹田）・身体重心を，滑走方向右斜め前方＆谷側方向（前方・横方向）へ移動して，エッジングを開放（外す）・調節することである。

つまりスキーが斜滑降方向に向いている山回り，つまり準備局面／中間局面から，滑走方向右斜め前方＆谷側方向へ立ち上がることによって，腰部（丹田）・身体重心は，前傾ポジションの状態で，主要局面に移行することになる。

またこのエッジングの開放・切り換えにおいて，準備局面における適切な外向傾姿勢によって，主要局面における他の２つの主要構成要素である，荷重（Belasten）と回旋（Drehen）が同時に実施[69]されている。

つまり荷重（交換）は，適切な外傾姿勢〔図Ⅵ：C，D〕と外向姿勢〔図Ⅳ C，D，E〕によって導かれ[68),69)]，回旋は，主に適切な外向姿勢〔図Ⅳ：A，C，図Ⅴ：

A，B〕によって導かれ[61),69)]ているのである。

次の右ターン終末局面（非循環運動の場合），又は左ターンへの連続ターン運動（循環運動）の場合，つまり右ターンの終末局面＋左ターンの準備局面である中間局面においては，主要局面において立ち上がった高い姿勢から，アルペンスキースキーの三大関節[69)]（足関節，膝関節，股関節）を駆使（屈曲，内外旋，内外転）しながら，徐々に中間姿勢に戻る〔図Ⅲ：E，図Ⅳ：D，E〕。

そしてターン内（山，右）側の肩関節を，滑走方向前方に出すことによって，上半身を左（方向へ）回旋，つまり胸をターン外（谷／左）側に向けた外向姿勢〔図Ⅳ：E〕となる。また，左右の肩を結んだ仮想の水平軸線が，滑走斜面と平行になるよう，ターン外（谷，左）側の肩関節を下げた外傾姿勢〔図Ⅳ：E，図Ⅵ：D〕となる。

また腰部に関しても同様に，ターン内（山，右）側の腰部（大転子）を，滑走方向前方に出すことによって，腰部を左（方向へ）回旋，つまり臍をターン外（谷，左）側に向けた外向姿勢〔図Ⅳ：E〕となる。そして，左右の腰部（大転子）を結んだ仮想の水平軸線が，滑走斜面と平行になるよう，ターン外（谷，左）側の腰部（大転子）を下げた外傾姿勢〔図Ⅳ：E，図Ⅵ：D〕となる。

以上が，右ターンにおけるターン運動の準備局面・主要局面・終末局面（連続ターンの場合は，中間局面）の運動記述である。

連続するターン運動，つまり循環運動の場合は，右ターンの終末局面と次の左ターンの準備局面が同時に構成（局面融合）され，以下同様の運動構造によって，ターン運動が左右方向へ連続していくことになる。

【考察】

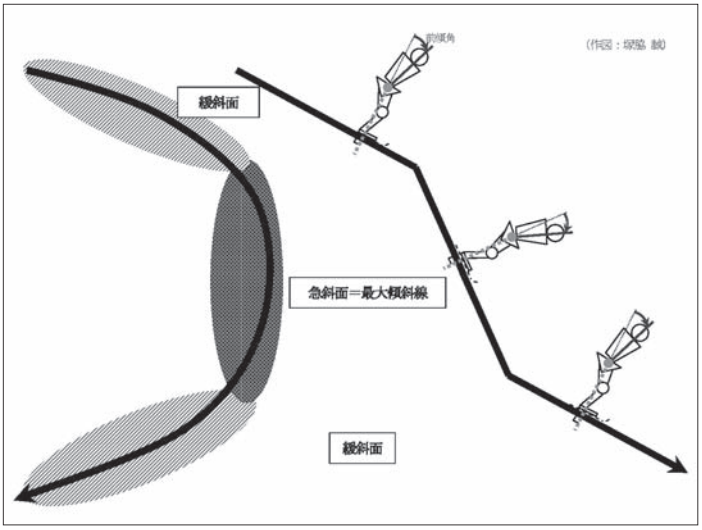
第１節：１ターンにおける（滑走）斜度の変化

アルペンスキーのターン運動において，その滑走斜面の斜度（傾斜角）は，常に刻々と変化している。しかし，ここで考察しなければならない斜度変化とは，単に急斜面や緩斜面といったものではなく，例えば同じ斜度（傾斜角，傾き）20度の斜面を，右方向への１ターンを実施する際に生じる斜度（傾斜角）変化のことである。

つまり同じ斜度20度であっても，１ターン滑走中には，緩斜面（＜20度）⇒ 急斜面（最大傾斜線）⇒ 緩斜面（＜20度）と，斜度が変化するのである。ターン運動では，スキーが最大傾斜線と平行になった瞬間に，最大斜度（この場合，傾斜角20度）となる。この斜度変化を模式図としたのが，〔図Ⅶ〕である。

またターン運動における斜面変化と，ターン運動の局面構造との関係系において考察すると，緩い斜度から最大斜度への移行過程は，谷回りであり，準備局面から主要局面である。そして，最大斜度から緩い斜度への移行過程は，山回りであり，主要局面から終末局面であるということがわかる。

アルペンスキースポーツ運動とは，筆者の先行研究[41)]の通り，スキーといった対象物の上に人間が乗り，そ



〔図Ⅶ：１ターンにおける斜度変化〕

のスキーを人間が操って傾斜のある雪の上を，上から下へ自由自在に滑走しながら移動（落下運動）する，といった特性を持つスポーツ運動である。従って，その落下運動エネルギー（滑走速度：Geschwindigkeit，加速度：Beschleunigung）を決定付ける一要因であるターン運動中の斜度変化は，ターン運動技術の質（運動技術の良し悪し）を評価・判断することにおいて，決定的な外的要因の一つなのである。

なぜなら，緩斜面は滑走スピード（速度）が遅く，又は加速し難く（加速度：小），急斜面は滑走スピード（速度）が速く，又は加速し易い（加速度：大）からである。

フェッツ（Friedrich FETZ）は，「日常生活において，運動系平衡はわずかしか要求されない。体育やスポーツの場合には，運動系平衡のより高い要求があり，高い達成へと導き，スポーツ上の技能水準は，本質的に運動系平衡によって同時に規定される」[3) P.291～295]と述べている。

これは，スポーツ運動において，自分の身体を意のままに操れる姿勢（状態）での運動，つまり身体のバランス保持ができていなければ，どれだけ優れたスポーツの運動技術・技能を修得していても，その能力を決して発揮（運動課題を解決）することができないということである。

つまり，アルペンスキースポーツ運動の場合においては，滑走運動中，自身の身体やスキーを意のままに操れる前後・左右・上下といった全ての方向に中庸な姿勢・身体ポジションであることが重要となるのである。

しかし前述の通り，アルペンスキースポーツの運動特性は，斜面を落下する滑走運動であることから，斜度（傾斜角）や雪質等の外的諸条件（要因）による速度変化（加速度）が，非常に大きな意味を持つのである。

従って，アルペンスキースポーツ運動の場合，急激な滑走速度の変化・増減（速／遅）は，非常に大きな問題となる。特に，低速から高速への急激な速度変化，つまり緩斜面から急斜面への斜度変化は，滑走方向・身体後方への身体バランス保持の乱れを誘発することが容易に考えられ，身体そしてスキーを意のままに操ること（エッジングの切り換え）＝適切なターン運動の実施が，非常に困難となる可能性が考えられる。

高速から低速への急激な速度変化，つまり急斜面から緩斜面への斜度変化の場合も同様に，滑走方向・身体前方への身体バランス保持の乱れを誘発することが容易に考えられ，身体そしてスキーを意のままに操ることが困難となる可能性が考えられる。

しかしながら，現実のターン運動において，身体バランス保持がより困難となるのは，高速から低速への速度変化の場合より，低速から高速への速度変化の場合であると考えられる。これは，ターン運動においては，緩斜面から急斜面への斜度変化であり，谷回りの経過中であり，ターン運動の主要局面に該当するのである。

前述の通り，アルペンスキーにおける左右のターン運動においては，１ターン毎に，常に斜度変化（緩⇒急⇒緩）が発生しており，より実践に有効なターン運動技術論においては，この斜度変化を無視することは，決してできないのである。

この滑走運動中の滑走方向・前後方向への身体のバランス保持に関する詳細な考察・研究は，アルペンスキースポーツ運動における身体バランスの保持と滑走速度に関する問題圏であり，最も重要な研究課題の一つである。しかし本研究が，外向傾姿勢とその主要局面における有益性の考察であるため，ここでは，１ターンの運動中に滑走斜度が常に変化し，ターン運動の実践的な技術論展開において，外的な最重要条件（現象）であることを確認するに止め，これ以上立ち入ることはしない。今後，筆者の重要な考察・研究課題としなければならいことは，言うまでもない。

しかしその要因に関する具体的な現象例として，ここでは直滑降を簡単に考察しておくこととする。直滑降は，斜面の最大傾斜線に対して，スキーが平行となり，直進方向へ滑走運動していくことである。

この際，身体重心が踵より後方に位置する後傾ポジションで滑走（直滑降）した場合，つまり低速から高速への速度変化が生じたことと同様の状況と，身体重心が踵より前方に位置する前傾姿ポジションで滑走した場合，つまり高速から低速への速度変化が生じたことと同様の状況とで，比較・考察することができる。この身体バランスを乱した直滑降での滑走運動中，右脚を持ち上げるといった，更なる運動課題を課した場合，比較的容易に運動課題を達成可能（解決）とするのは，前傾姿勢での直滑降姿勢である。つまり急斜面から緩斜面へ斜度変化があった場合と，同様の場合なのである。

これは，一般的な人間の行為としての運動現象と同

様であり，前方方向へのバランスの乱れの方が，後方方向へのバランスの乱れより，そのバランス保持の許容範囲は，はるかに大きいのである。

また人間の足の機能解剖学的な構造と，物理学的な考察からも具体例をあげることができる。人間の脚・足は，つま先方向，つまり前方方向に大きく突き出し，踵方向，つまり後方方向には，あまり突き出していない。更に人間の膝関節は，膝骸骨が前方方向に突き出す方向に屈曲するのである。

従って，脚・足のみ人間に疑似したロボットで考察すると，ロボットの重心を前方もしくは後方に移動させた場合，重心を前方に移動させた場合の方が，後方へ移動させた場合より，転倒し難い。つまり，重心を前方に移動させた場合の方が，はるかに大きな重心位置の移動が可能であり，つまり前方方向に対するバランス保持のための許容範囲が大きいのである。

前述の通り，ターン運動中滑走斜度が最大（最も急）となるのは，最大傾斜線とスキーが平行となる瞬間である。従ってこの瞬間に，滑走の前後方向・身体の前後方向に最も安定したポジション，つまり斜面変化や滑走速度変化に対応可能な，前後・左右・上下といった全ての方向に中庸（中間）なポジション〔図Ⅲ：A，E〕：滑走姿勢であることが，自身の身体・スキーを意のままに操る前提条件となり，より質の高いターン運動実現のために，最も重要となるのである。

本研究におけるアルペンスキーの滑走技術における中間姿勢とは，筆者の先行研究[63),69)]により以下のように定義することとする。つまり，スキーの三大関節である足・膝・股関節が適度に屈曲され，身体前後・左右方向へのバランスが保持されており，そこから更に各関節を大きく屈曲して低い姿勢（＝踵と臀部が近くなる）や，各関節を伸展して高い姿勢（＝踵と臀部が遠くなる）に移行できる中間の姿勢である。

また最新オーストリアスキー教程[19)]においては，「“中間姿勢”という表現は，スキー滑走における重要関節の運動準備のできた屈曲姿勢に特徴づけられる。足関節，膝関節，股関節と脊柱は，特定の滑走状況の中で，適応された状態にある。上半身は，斜度傾斜に，前傾によって適応している（筆者直訳）。」[19)P.97]とされている。

従ってここでは，前後・左右・上下といった全ての方向に中庸である中間姿勢（Mittellage）[69)]での直滑降姿勢が，その中庸な滑走姿勢，つまりアルペンスキー運動における最適な運動準備姿勢の基本の一つであることがわかる。

第２節：ターン運動における（滑走）斜度変化と身体前後方向へのバランス保持（側方観察）

ここでは，本研究において考察対象としている，立ち上がり抜重によるパラレルターンのターン運動における身体前後方向へのバランス（保持）に関して考察する。つまり，スキーヤーの側方（真横）からの考察である。

また，立ち上がり抜重によるパラレルターンの主要局面では，踵と腰が遠くなる，つまり主に股関節・膝関節が伸展された姿勢となる。

〔図Ⅲ〕は，スキーヤーを側方から観察した，身体前後方向へのバランス保持と，斜面との関係系を表した模式図である。

〔図Ⅲ：A～D１〕は，傾斜角がゼロ，つまり水平面におけるポジション（身体前後方向バランス）である。

〔図Ⅲ：A〕は，スキーの三大関節を適角にした中間姿勢（Mittellage）[63),69)]であり，前後・左右・上下といった全ての方向に安定した状態（ポジション）であるが，厳密には，身体重心が身体前方に位置するため，前傾ポジションとなる。ここで重要となるのは，仮想の上半身縦軸線と，丹田と踝を結んだ仮想の下腿縦軸線のなす角度である。つまり，股関節が適切な角度に屈曲されており，仮想の上半身縦軸線が前方方向に傾いている点である。

〔図Ⅲ：B〕は，中間姿勢から股関節のみを伸展し，結果的に上半身のみを起こした姿勢で，仮想の上半身縦軸線と仮想の下腿縦軸線のなす角度がゼロ，つまり一直線となる。この姿勢は，幾何学的には，中間姿勢〔図Ⅲ：A〕からの立ち上がり運動（高い姿勢への変化）とは言えないが，実際のスキー滑走運動においては，上半身を起こすため，頭の位置が後方へ移動し，スキーヤーは，自分自身が立ち上がったと錯覚することが多い姿勢である。また前方方向への滑走運動（移動）中となると，なおさらこの錯覚は顕著となる。

この現象（錯覚）は，ターン運動技術の習得（技能向上），つまり現場での指導方法論において，非常に大きな意味を持つ問題である。しかし本研究の研究目的とは外れるため，ここではこれ以上の考察・論術は展開しないが，この課題は，指導方法論的な研究において考察・検討されなければならない重要なものであり，筆者の今後の研究課題となることは言うまでもな

い。

〔図Ⅲ：C〕は，膝関節と股関節を伸展させ，立ち上がった姿勢である。ここでは，現在のマテリアル（スキーブーツ）の機能構造的特徴である，足関節の低屈・背屈方向への可動域の極端な制限，といった意味から，足関節角は変化させずに表している。

この場合，仮想の上半身縦軸線と仮想の下腿縦軸線のなす角度がゼロ，つまり一直線となる。

〔図Ⅲ：D１〕は，仮想の上半身縦軸線と仮想の下腿縦軸線とのなす角度を保ったまま，主に膝関節のみを伸展させ，立ち上がった姿勢である。従って，仮想の上半身縦軸線は，更に前方方向に倒れ（前傾），極端な前傾ポジションとなる（つまり，更なる急斜面への斜面変化に適応可能な姿勢となる）。

〔図Ⅲ：D２〕は，〔図Ⅲ：D１〕の姿勢において，スキーヤーがどの程度の斜面（傾斜角）において，中間～前傾ポジションで，前後方向のバランス保持が可能であるのか，仮想の下腿縦軸線を基準に想定した模式図である。斜面（傾斜）は，点線矢印で表した。つまり〔図Ⅲ：D１〕のような立ち上がり運動技術を実施した場合，スキーヤーは，身体前後方向へのバランス保持といった観点から，点線矢印の示すような斜度変化（急斜面）への適応が可能と考えられるのである。

従って〔図Ⅲ：D１〕は，緩斜面⇒急斜面といった斜面変化の発生するターン運動の準備局面から主要局面において，中間ポジション（中庸な姿勢）を具現できる運動方法（技術）と運動姿勢〔図Ⅲ：D２〕であることがわかる。

〔図Ⅲ：E〕は，点線矢印と同じ斜面（傾斜角）における中間姿勢である。〔図Ⅲ：D１，D２〕の仮想の上半身縦軸線と仮想の下腿縦軸線とのなす角度と，〔図Ⅲ：E〕の仮想の上半身縦軸線と仮想の下腿縦軸線とのなす角度は等しい。従って，ターン運動において〔図Ⅲ：D１〕のような立ち上がり運動技術においては，点線矢印のような斜面変化（急斜面）に適応した身体前後方向へのバランス保持が可能で，その後，安定した状態で膝関節を屈曲し中間姿勢〔図Ⅲ：E〕に戻ることも可能なのである。これは，ターン運動の局面構造における終末局面，又は中間局面に該当することとなる。

〔図Ⅲ：F〕は，点線矢印と同じ斜面おいて，〔図Ⅲ：B〕のように，股関節のみを伸展し，上半身のみを起こした姿勢で，仮想の上半身縦軸線と仮想の下腿縦軸線のなす角度がゼロ，つまり一直線となる。ここでは，斜面における中間姿勢〔図Ⅲ：E〕から上半身のみを起こした姿勢であり，〔図Ⅲ：D１，D２〕のような緩斜面⇒急斜面といった斜面変化へ適応できる姿勢ではない。従って，斜度変化を伴うターン運動の主要局面において，〔図Ⅲ：F〕のような姿勢で移行した場合，後傾ポジションとなり，身体を意のままに操り難いことが考えられる。

またここで，模式図〔図Ⅲ〕の考察で注意しなければならないことは，滑走速度が考慮されていないことである。静止状態での身体前後方向への中間ポジションは，現実の滑走運動中では，加速度との関係から，後傾ポジションとなることが容易に想像できる。また，ターン運動が人間の行為としてのスポーツ運動であるため，スキーヤーは，後方にバランスを崩していると認知することが多くなり，最適なターン運動技術の実施が困難となると考えられる。

前述のように，アルペンスキーのターン運動中は，緩斜面⇒急斜面への斜度変化が，ターン運動の谷回り，つまり主にターン運動の準備局面から，主要局面において発生している。そのためスキーヤーは，自身の身体やスキーを意のままに操るために，身体前後方向へのバランス保持，つまり滑走方向前方に対して安定した姿勢が，重要な課題となるのである。

本考察によって，この身体前後・滑走方向へのバランス保持のためには，〔図Ⅲ：A，もしくはE〕といった中間姿勢から，〔図Ⅲ：D１〕のような立ち上がり運動技術が重要であることがわかった。

この立ち上がった姿勢〔図Ⅲ：D１，D２〕は，その滑走時，つまり準備局面から主要局面において，斜面に対して垂直方向に立ち上がった姿勢とも捉えることができるものである。

またこの際，準備姿勢である中間姿勢〔図Ⅲ：A，E〕は，外向傾姿勢の姿勢構築・構成要素の一つであり，外向傾姿勢が，斜面に対して垂直に立ち上がる姿勢構築に，重要な準備姿勢であることがわかる。

第３節：ターン運動における身体左右方向へのバランス保持（正面観察）

ここでは，本研究において考察対象としている，立ち上がり抜重によるパラレルターンのターン運動における身体左右方向へのバランス（保持）に関して考察する。つまり，スキーヤーの正面方向からの考察である。

〔図Ⅵ〕は，スキーヤーを正面から観察した，身体の左右方向へのバランス保持と，斜面に対するエッジング角との関係系を表した模式図である。

〔図Ⅵ：A〕は，ターン運動における左方向への山回り，つまり左ターンの終末局面，又は／もしくは，右ターンの準備局面であり，主に股関節の内外転・内外旋を駆使した股関節エッジング法[70]を用いた，上半身（仮想の上半身縦軸線）をターン外（谷，右）側に倒した外傾姿勢である。また足関節の内外反が殆ど不可能といった現在のアルペンスキーブーツの機能構造的特性により，斜面に対して，エッジングされた状態であることもわかる。

〔図Ⅵ：C〕は，〔図Ⅵ：A〕における外傾姿勢から，主に股関節の内外転・内外旋を駆使し，頭の位置を左右に移動させず，上半身（仮想の上半身縦軸線）を，足部を基点とした斜面の垂直線と一致させるよう，丹田・身体重心を，谷（右）側へ，つまり側方へ移動させた模式図である。

身体は，滑走斜面に垂直線上に立ち上がった状態・姿勢となり，エッジングの切り換えの行われるターン運動の主要局面である。この際，アルペンスキーブーツの機能構造的特性により，スキーのエッジング角は，滑走斜面に対してゼロ度，つまり平行・フラット（Flach）な状態であり，スキーは開放（Auslösen）された自由（Frei）な状態となる。

よってスキーの滑走方向は，物理学的な重力作用により，谷側（右）方向に変更（落下運動）されていくことになる。

〔図Ⅵ：A〕に外向姿勢が加わった外向傾姿勢〔図Ⅳ：A〕の場合，筆者の先行研究[61]より，〔図Ⅳ：C，図Ⅵ：C〕においては，蓄積された予備緊張，つまり右方向への回旋力が開放されることとなり，更に容易にスキーの滑走方向は，谷側（右）方向に変更（回旋）されていくことになる〔図Ⅴ：B〕。

またこの〔図Ⅳ：C，図Ⅵ：C〕においては，その滑走時，つまり準備局面から主要局面において，斜面に対して垂直に立ち上がった姿勢とも捉えることができる。そしてこの際，準備姿勢である外傾姿勢と外向姿勢は，外向傾姿勢の姿勢構築・構成要素であり，外向傾姿勢が，斜面に対して垂直に立ち上がる姿勢構築に，重要な準備姿勢であることがわかる。

従って準備局面における外向傾姿勢は，斜面に対して垂直方向に立ち上がり，質の高いエッジングの切り換えと，スキーの滑走方向の調整（回旋），つまり主要局面を具現するために，最適で重要な準備姿勢ということがわかるのである。

〔図Ⅵ：D〕は，主に（膝関節の伸展と）股関節の内外転・内外旋を駆使し，滑走斜面に垂直線上に立ち上がった姿勢〔図Ⅵ：C〕から，主に股関節の内外転・内外旋を駆使し，ターン外（左）側へ上半身縦軸線を倒し，外傾姿勢をつくりはじめ，つまり股関節エッジング法を用いてエッジングを切り換え，谷回り・右ターンの終末局面へと移行している。

しかし〔図Ⅳ：B，図Ⅵ：B〕は，〔図Ⅳ：A，図Ⅵ：A〕の外傾姿勢から，主に股関節の内外転・内外旋を駆使し，頭の位置を山（左）側へ移動させ，上半身縦軸線と下腿縦軸線が一直線となった姿勢であり，内傾姿勢とも表現できる。この姿勢のままの状態では，エッジングの開放・切り換えは困難であり，勿論主要局面への移行ができず，通常は，山回り方向へ滑走し続けることになり，ターン運動は実践されない。

この状態から，股関節エッジング法で最大傾斜線を越えての滑走方向の変更，つまりエッジングを切り換えてターン運動へ導くためには，一度身体全体を谷（右）側，つまり反対側に倒し，〔図Ⅳ：C，図Ⅵ：C〕の姿勢をつくり，エッジングの切り換えを行っていく方法と，内傾姿勢から直接的に，より大きな股関節エッジング法で，エッジングを切り換えていく方法が考えられる。又は，膝関節エッジング法・身体全体エッジング法[70]を駆使する方法（運動技術）も考えられる。

しかし何れの方法（運動技術）においても，適切な準備局面，優れた局面融合・中間局面（準備局面＋終末局面）が観察できない。従って，連続するターン運動（循環運動）としての評価すらできず，スポーツ運動の運動原理，そして局面構造論的観点からは，質の高いターン運動技術とは，到底評価できないターン運動（技術）となる。

第４節：準備局面における外向傾姿勢の主要局面への影響（意味・価値，有益性）

本論：第５節の運動記述より，ターン運動の準備局面における適切な外向傾姿勢によって，以下のことが考察される。

エッジングの切り換え（解放）を，身体の側方から考察した場合，主に股関節の内外転・内外旋と膝関節の伸展を駆使し，股関節の伸展は極力少なくした立ち上がりの運動技術によって，上半身は，前傾姿勢を保

つ〔図Ⅲ：D２〕ことができ，滑走（前後）方向における身体バランスの乱れ（後傾姿勢）を回避することができる〔図Ⅳ：C，図Ⅴ：B〕。つまり，滑走速度を考慮しなかった場合，滑走方向，もしくは身体前後方向に対して，安定した中間～前傾ポジションでのエッジングの切り換え，つまり質の高い主要局面を実践することが可能となるのである。

このように，ターン運動の準備局面における適切な外向傾姿勢は，エッジングの切り換えが行われる主要局面において，腰部（丹田）・身体重心位置を，結果的に足下を基準に，滑走斜面に対する垂直線上に位置させる〔図Ⅳ：C，図Ⅴ：B，図Ⅵ：C〕ための重要な準備姿勢であることがわかる。

また〔図Ⅴ：B〕の姿勢は，エッジング角は無く（ゼロ度），開放されており，スキーの滑走方向が最大傾斜線と平行ではない（斜め方向ではある）が，運動姿勢としては，中間ポジションと同様の姿勢となる。この中間ポジションの姿勢は，身体の前後・左右（・上下），如何なる方向へも運動を起こす（開始する）ことの可能な，アルペンスキースポーツにおいて，最も優れたバリエーション（応用力）に富んだ姿勢，つまり基本の姿勢でもあり，最も優れた運動の準備姿勢なのである〔図Ⅳ：C，図Ⅴ：B，図Ⅵ：C〕。この姿勢を実現させるための準備姿勢が，準備局面における外向傾姿勢なのである。

そして，〔図Ⅳ：C，図Ⅴ：B，図Ⅵ：C〕のようにエッジングが開放された後，最大傾斜線を越えて右方向へ滑走（ターンの調節）するために，腰部（丹田）・身体重心を右斜め前方（右ターン中心方向）に移動させてエッジングを調節（切り換え：股関節エッジング法）し，右ターンの外向傾姿勢を徐々につくり，右ターンの谷回り（終末局面／中間局面）へと移行していくのである〔図Ⅳ：D，図Ⅵ：D〕。また，滑走方向が最大傾斜線を越えて，山回りの状態が，模式図〔図Ⅳ：E〕である。

勿論この際，身体全体・膝関節エッジング法[70]によっても，ターン運動を具現することは可能であるが，その多くの場合，外向傾姿勢が具現されず，つまり右ターンの終末局面へと移行されるが，同時に左ターンへの最適な準備局面とはならない。従ってこれまで筆者の先行諸研究[47),63)]から，アルペンスキースポーツの連続ターン運動（循環運動）の場合，質の高いターン運動技術とは，評価できないのである。

準備局面における適切な外向傾姿勢，つまり滑走方向前方＆次のターン内側（側）方向への上半身の傾け（前方側方屈曲：Vorseitbeuge[69)P.35,71),72)]）姿勢は，エッジングの切り換え（主要局面）において，滑走方向・身体の前後方向に対する中間ポジション，つまり身体重心を，足下を基準に，その場の滑走斜面の垂直線上に移動させ，エッジングの切り換えを，最も良く解決することを可能にしている，最も適した準備姿勢であることがわかる。

もし，ターン運動の準備局面における外向傾姿勢が不十分（不足）であった場合，先行諸研究[61),68),69)]における有益性が最適に機能しないばかりか，結果的に主要局面において，後傾ポジションでのターン運動の主要局面へと移行することとなり，質の高いターン運動の具現は，身体前後方向へのバランス保持の観点から困難と考えられる。つまり，ターン運動の質の低下という結果をもたらすのである。

そして逆に，ターン運動の準備局面における外向傾姿勢が強すぎる，つまり，みせかけの外向傾姿勢[69)]であった場合は，先行研究[61),68),69)]における有益性が最適に機能しないばかりか，結果的に主要局面において，前傾が強過ぎ，そして強い内向姿勢でのポジションでのターン運動となり，質の高いターン運動は困難と考えられる。更にこの場合，適切な外向傾姿勢と比較して，エッジングの切り換えのために，より大きく・遠くへ腰部（丹田）・身体重心を移動させなければならず，エッジングの切り換えに，多くの時間と力を不要に必要とすることになる。又は，膝関節エッジング法等，他の運動技術を，追加動員しなければならない。

よって，スポーツ運動原理の経済性の観点からも，質の高いターン運動を具現することが困難と考えられるのであり，ターン運動の質の低下という結果をもたらすのである。

従って，準備局面における最適な外向傾姿勢が，ターン運動時の最大傾斜線通過時に，自身の身体やスキーを意のままに操る，前後・左右（・上下）に中庸な姿勢である中間ポジションを実現するために，最も有益な準備姿勢であることがわかる。

第５節：アルペンスキースポーツにおける自然体

これまでの本研究の考察（第１節～第４節）から，スキーヤーの足下を基準として，滑走斜面に対する垂直線上に身体重心があり，アルペンスキー運動における中間姿勢[69)P.34]では，スキーの滑走方向が最大傾斜線

と平行ではない（斜め方向ではある）あらゆる方向に対しても，運動姿勢としては，中間の姿勢となる。この中間の姿勢は，身体の前後・左右・上下，如何なる方向へも運動を起こす（開始する）ことの可能な，アルペンスキースポーツにおいて，最も優れたバリエーション（応用力）に富んだ姿勢＝基本の姿勢であり，最も優れた運動の準備姿勢でもある。

従って本研究において，この最も優れた運動準備姿勢〔図Ⅳ：C，図Ⅴ：B，図Ⅵ：C〕を，『アルペンスキーにおける自然体』と命名することとする。

この自然体は，“どちらにも偏らない中庸的”，つまり“最も基本的で，即座に様々に変容可能である”，“何時でも全ての方向に運動始動が可能で，攻めも守りもできる”，従って“対象物であるスキー操作を含め，自身の身体を意のままに操ることが可能である”，といった意味・価値を含む運動姿勢と捉えるものである。勿論，斜面を滑走運動（移動）するといった特性をもったスポーツ運動の基本的な姿勢であることから，動的な姿勢であり，静止した状態での姿勢ではない。より具体的な滑走姿勢としては，あらゆる滑走方向における中間姿勢での滑降，言い換えれば，あらゆる滑走方向への直滑降姿勢とも表現できるのである。

また『アルペンスキーにおける自然体』は，本論：第５節の運動記述の通り，スキーの向き・滑走方向を問わず,エッジングがなされておらず解放(Auslösung:エッジング角がゼロ度）されており，スキーヤーの重心位置も，足下を基準に，その滑走斜面からの垂直線上にある姿勢であり，如何なる変容・何時でもあらゆる方向への運動始動が可能である基本となる姿勢であるが，滑走運動中のスキーヤーにとっては，同時にスキーの滑走方向が，最も不安定な滑走状態でもある。

そしてまた，その時点，その場所において，物理学的に外的な諸抵抗（摩擦抵抗等）が最も少ない状況・状態であることが言える。従って，高い所から低い所への落下運動であるアルペンスキーの滑走運動において，物理学的に，様々なブレーキング・減速要素から極力開放された状態であり，また同時に加速の可能性の最も高い状態であることが言えるのである。

これは，滑走所要時間の計測，つまり最も速く滑走することが最優先課題とされるアルペンスキースポーツ競技において，この『アルペンスキーにおける自然体』が，非常に重要なキーワード（姿勢，運動技術）であることも言えるのである。

従って，アルペンスキースポーツの競技能力向上を目指したターン運動技術構築のために，この自然体が非常に大きな意味・価値を持つことになるのである。

第６節：カービングスキーのターン運動技術と外向傾姿勢との関係系（運動構造論的観点から）

筆者の先行諸研究[61),66),68),69)]と，アルペンスキーのターン運動の構造論的観点から，カービングスキーを使ったターン運動においても，ターン運動における三大主要構成要素に変化は無く，またその主要構成要素を最も良く解決することの可能な姿勢が，適切な外向傾姿勢であることが，既に明らかとなっている。

また本研究考察においては，主要局面（エッジングの切り換え）を最も良く解決するための運動の準備姿勢としても，適切な外向傾姿勢が最も有益な運動姿勢であることが考察された。つまり外向傾姿勢は，荷重，エッジング，回旋といったターン運動における機能的特性以外に，アルペンスキースポーツのターン運動中における自然体の最適な準備姿勢でもあることがわかったのである。

従って，カービングスキーを使ったターン運動の質の向上目的のためにも，最も重要な運動準備姿勢の一つが，適切な外向傾姿勢であることが言えるのである。

【結論】

本研究は，先行の諸研究[61),68),69)]で明らかにされた，外向傾姿勢による有益性・機能的な特性を，スポーツ運動の質に関する観点の一つである，スポーツ運動の局面構造論から考察することにより，外向傾姿勢とターン運動の主要局面における影響・関係系が明らかにされ，より総合的・実践的に外向傾姿勢の意味・価値を把握するものとなった。

更に本研究は，ターン運動の質の向上といった観点から，ターン運動技術指導の現場において，指導・習得されなければならない，より重要なターン運動技術（姿勢）の一つを提供・示唆するスポーツ運動技術論であり，その成果は，筆者の最終目的である，現場のスキー運動技術指導に直接役立つことを主眼とした実践的指導方法論研究の基礎理論として，重要な意味を持つものである。

また，アルペンスキースポーツの競技能力向上を目的とした，ターン運動技術（論）構築のための基礎理論としても，大変重要な研究である。

本研究・考察により，アルペンスキーのターン運動

における適切な外向傾姿勢と主要局面との関係系（意味・価値，有益性）の詳細は，以下のようにまとめることができる。

◆アルペンスキーにおけるターンにおいては，その1ターン毎に，緩斜面 ⇒ 急斜面 ⇒ 緩斜面といった斜面変化が生じる。

◆ターン運動の局面構造とその斜面変化との関係は，緩斜面 ⇒ 急斜面 ⇒ 緩斜面 …＝ 準備局面 ⇒ 主要局面 ⇒ 終末局面／中間局面 …となる。

◆人間のスポーツ運動行為としてのアルペンスキーの滑走運動においては，自身の身体やスキーを意のままに操ることの可能な，前後・左右・上下といった全ての方向に中庸な滑走姿勢・身体の中間ポジションが重要となる。

◆そして，この中庸な滑走姿勢とは，如何なる方向へも運動を起こす（開始する）ことの可能な姿勢であり，アルペンスキースポーツにおいて，最も優れたバリエーション（応用力）に富んだ姿勢，つまり基本の姿勢でもあり，最も優れた運動への準備姿勢でもある。

◆この中庸な滑走姿勢は，ターン運動の主要局面において，またその瞬間において，滑走斜面上の足下を基準とし，滑走斜面に対する垂直線上に身体重心が位置した姿勢である。

◆上半身をターン方向の斜め前方 & 側方へ倒す，準備局面／終末局面（中間局面）における適切な外向傾姿勢は，スキーが山回り（つまり徐々に斜度が緩くなる）から，最大傾斜線と平行になっていく経過，つまり斜度が徐々に急なる際，スキーヤーの身体重心位置を，足下を基準に，滑走斜面に対する垂直線上に移動させることを可能とする最適な運動の準備姿勢である。

◆従って，準備局面／終末局面（中間局面）における適切な外向傾姿勢は，主要局面において，最も安定した運動姿勢（中庸な滑走姿勢）を実現する準備の姿勢でもある。つまり適切な外向傾姿勢により，主要局面においては，最も自身の身体，そしてスキーを操り易い姿勢でターン運動を具現することが可能となるのである。

◆また，この中庸な滑走姿勢は，同時にエッジングが開放されており，前述の通り，滑走斜面上の足下からの滑走斜面の垂直線上に身体重心が位置している姿勢である。本研究では，この姿勢を『アルペンスキーにおける自然体』と命名する。

◆『アルペンスキーにおける自然体』は，“どちらにも偏らない中庸的”，つまり“最も基本的で，即座に様々に変容可能である”，“何時でも全ての方向に運動始動が可能で，攻めも守りもできる”，従って“対象物であるスキー操作を含め，自身の身体を意のままに操ることが可能である”，といった概念（意味・価値）を含むスポーツ運動姿勢の一つである。

◆そして，斜面を滑走運動するといった特性をもったスポーツ運動の基本的な姿勢であることから，『アルペンスキーにおける自然体』は，動的な姿勢であり，静止した状態での姿勢ではない。

◆また『アルペンスキーにおける自然体』は，あらゆる滑走方向における中間姿勢での滑降であるため，言い換えれば，あらゆる滑走方向への直滑降姿勢とも表現・表記が可能である。

◆前述の通り，アルペンスキーのターン運動において，『アルペンスキーにおける自然体』を準備する最適な姿勢が，準備局面／中間局面における外向傾姿勢である。

◆みせかけの外向傾姿勢を含む，不適切な外向傾姿勢は，『アルペンスキーにおける自然体』を適切に準備する姿勢ではなく，結果的に質の高いターン運動の実践が困難となる。

◆『アルペンスキーにおける自然体』は，エッジング（スキー）が開放された状態であり，最も雪面との摩擦抵抗の少ない滑走状態であるが，同時にスキーの滑走方向が最も不安定な滑走状態でもある。

◆『アルペンスキーにおける自然体』は，摩擦抵抗が最も少ないことから，ブレーキング・減速要素が最も少なく，ターン運動の滑走速度を競うアルペンスキー競技において，競技能力を決定付ける最も重要なターン運動技術論のための基礎理論の一つであり，最も重要な運動姿勢の一つと捉えることができる。

◆カービングスキーを使ったターン運動の質の向上・質の適切な評価といった観点からも，最も重要な準備姿勢の一つが，適切な外向傾姿勢であることが言える。

【将来への展望・課題】

第1節：指導方法論への展開

本研究では，アルペンスキースポーツにおいて，自身の身体，そしてスキーを操るための基本的な姿勢で

ある『アルペンスキーにおける自然体』のターン運動における準備姿勢が，外向傾姿勢であることが明らかとなり，外向傾姿勢の重要性が，ターン運動の局面構造論的な観点からも，総合的・実践的に証明された。従って，この最も重要とされるターン運動における外向傾姿勢を，何時，どこで，誰に，どのように指導していくのか？　といった，より実践的な指導方法論的な考察・研究が，今後重要であると言える。

そして外向傾姿勢は，ターン運動の質を決定付ける運動姿勢・一要因であることから，現場の運動技術指導において，指導者が，練習・トレーニングの具体的な目標を定める重要な着眼点（欠点の把握）の一つなのである。

また，プルークボーゲンを対象とした，本研究と同様の考察・研究を実施した後，プルークボーゲンにおける外向傾姿勢の必要性の可否に関する問題も含めて，指導方法論的な考察・研究も期待できる。

アルペンスキースポーツ競技においては，『アルペンスキーにおける自然体』は，その競技能力を決定付ける重要な要素であることが，本研究で指摘されている。従って，この運動姿勢（技術）習得に関する指導方法論的な考察・研究が重要であることは，言うまでもない。

更に本研究の考察過程では，中間姿勢から股関節のみを伸展し，結果的に上半身のみを起こした姿勢で，仮想の上半身縦軸線と仮想の下腿縦軸線のなす角度がゼロとした姿勢運動について考察された。この姿勢は，幾何学的にも，中間姿勢からの立ち上がり運動（高い姿勢への変化）とは言えないが，実際のスキー滑走運動においては，上半身を起こすため，頭の位置が後方へ移動し，スキーヤーは，自分自身が立ち上がったと錯覚することが多い姿勢である。また前方方向への滑走運動（移動）中となると，なおさらこの錯覚は顕著となる。今後，指導方法論的な研究において考察・検討されなければならない重要な研究課題と考えられる。

第２節：今後の研究課題

本研究では，ターン運動技術の一つである，立ち上がり抜重によるパラレルターンを研究対象として，考察・論述展開した。しかし，立ち上がり抜重によるパラレルターン以外，例えばシュテムターン（Stemmschwingen）などのターン運動技術においても，本研究と同様の結論が導かれるのか，考察・研究が必要と考えられる。

また，パラレルターンの運動技術は，エッジングの切り換え局面を持ったターン運動技術＝シュビンゲン（Schwingen）であるが，エッジングの切り換え局面を持たないターン運動技術であるプルークボーゲン（Pflugbogen）においても，前述（第１節）の通り考察・研究が必要と考えられる。

ターン運動におけるストックワークと腕の位置に関しては，本研究のより明快な論述展開ため，研究の対象から外されている。しかしながらストックワークと腕の位置に関しては，筆者の先行研究[67]の通り，特に主要局面において，ターン運動の質を左右する重要な運動技術の一つであるため，今後の総合的な考察・研究が重要であることは，言うまでもない。

滑走速度と滑走運動中の前後方向への身体バランス保持に関する詳細な考察・研究は，本研究において深入りしなかったが，アルペンスキースポーツ運動において，最も重要な研究課題の一つである。アルペンスキーの競技力向上のためのスポーツ運動技術論・指導方法論（コーチング）を専門研究領域とする筆者にとって，特に重要な考察・研究課題となることは，言うまでもない。

本研究のような実践的なスポーツ運動技術論的観点からの考察・研究は，これまでもそうであったように，より実践に即した今後のマテリアル（用具）開発にも，有益な情報を与えることに繋がる有意義なものでもある。

また筆者の最終的な研究目的である，スキー運動技術指導の現場において，直接役立つことを主眼とした実践的な考察・研究は，アルペンスキースポーツの更なる普及・発展のためにも，今後も展開・構築を続ける必要があると考える。

【引用・参考文献】

１）朝比奈 一男・水野 忠文・岸野 雄三 編著：スポーツの科学的原理，大修館書店，1983

２）FETZ Friedrich：ALLGEMEINE METHODIK DER LEIBESÜBUNGEN，Österreichischer Bundesverlag für Unterricht，Wissenschaft und Kunst，Wien 1964
：体育の一般方法学 体育指導の基礎として（安部 和雄 訳），プレスギムナスチカ ほるぷ出版，1982

３）FETZ Friedrich：Bewegungslehre der Leibesübungen １．Auflage，Limpert Verlag，1979
：体育運動学（金子 明友，朝岡 正雄 共訳），不昧堂出版，1979

4）GÖHNER Ulrich：Einführung in die Bewegungslehre des Sports Teil 1：Die sportlichen Bewegungen
SPORT UND SPORTUNTERLICHT BAND 4, HOFMANN－VERLAG 1992
：スポーツ運動学入門 ―スポーツの正しい動きとは何か―（佐野 淳／朝岡 正雄 監訳），不昧堂出版，2003
5）HOPPICHLER Franz：BEWEGUNGS－und UNTERRICHTSLEHRE Skriptum der Staatl. Skilehrerausbildung und aller Österreichischen Landesskilehrerausbildungen 1. Auflage，Arbeitsgruppe der Österr. Skilehrerausbildungen Zell am See，1985
6）HOPPICHLER Franz：Ski mit uns DIE ÖSTERREICHSCHE SKISCHULE，Otto Müller Verlag Salzburg 1985
7）HOPPICHLER Franz：DIE ÖSTERREICHISCHE SKISCHULE，EDITION HERANT－Verlag Sportmagazin，1994
8）Internationaler Ski Verband（FIS）：Spezifikation der Wettkampfausrüstung und Kommerzielle Markenzeichen Ausgabe 2007（gürtig ab Saison 2007/08）
9）金子 明友・朝岡 正雄 編著：運動学講義，大修館書店，1990
10）金子 公宥：スポーツ・バイオメカニクス入門，杏林書院，1987
11）岸野 雄三・松田 岩男・宇土 正雄 編：序説運動学，大修館書店，1985
12）児玉 栄一：国際スキー教師連盟（ISIA）主催「カービングスキーセミナー」報告
カービングスキーに見るスキーブームの新たな予測と検討 SIA ニュース89 1996
13）KRESTAN Wolfgang：Staatliche Skilehrerausbildung Lehrbehelf Pädagogik Didaktik Methodik，Bundesanstalt für Leibeserziehung Innsbruck，1986
14）MEINEL Kurt：BEWEGUNGSLEHRE － VERSUCH EINER DER SPORTLICHEN BEWEGUNG UNTER PÄDAGOGISCHEM ASPEKT，BERLIN，1960
（マイネル，金子 明友 訳）『スポーツ運動学』大修館書店，1981年
15）Müller E：Biomechanische Analyse alpiner Skilauftechniken，Innsbruck 1986
16）日本スポーツモルフォロギー学会：スポーツモルフォロギー研究①，（株）桐朋，1988
17）Österreichischer Skilehrerverband－Lehrteam：CARVING FÜHRERSCHEIN
Österreichischer Skilehrerverband 1996/97
：カービング運転免許証（塚脇 誠 訳），株）アシックスウィーンター事業部 報告書 添付 1997
18）Österreichischer Skischulverband：AUSBILDUNGSPROGRAMM für Skilehrer（innen）Ausbildungen
ÖSTERREICHISCHER SKILEHRPLAN ÖSSV Ausbildungsprogramm 2003
19）Österreichischer Skischulverband：SNOWSPORT AUSTRIA DIE ÖSTERREICHISCHE SKISCHULE VERLAG BRÜDER HOLLINEK 2007
20）ROMAGNA Paul：BEWEGUNGSLEHRE，Staatl.Dipl. Sl.Ausbildung 1.Semester 98/99
Allgemeine BEWEGUNGSLEHRE Spezielle BEWEGUNGSLEHRE SKI CLASSIC AUSTRIA DIE ÖSTERREICHISCHEN SKISCHULEN
21）ROMAGNA Paul：UNTERRICHTSLEHRE，Staatl. Dipl.Sl.Ausbildung 1.Semester 98/99
SKI CLASSIC AUSTRIA DIE ÖSTERREICHISCHEN SKISCHULEN
22）RÖTIG Peter，SPORTWISSENSCHAFTLICHES LEKTION，Schorndorf，1977，（レーティッヒ，岸野雄三 日本語版監修『スポーツ科学辞典』プレスギムナスチカ ほるぷ出版，1982（昭和57）年）.
23）SCHALLER Rudwig，SCHILAUF IN ÖSTERREICH，STEIGER VERLAG，INNSBRUCK，1982.
24）清水 史朗・長谷川 健二：アルペンスキーロボットの開発―股関節の内転と外転による連続自動回転モデル―日本スキー学会誌 Vol. 9 No. 1（P.261～266），1999
25）清水 史朗・長谷川 健二：アルペンスキーロボットの開発―支え棒付き１本スキーによる連続・自動・横ズレの回転モデル，日本スキー学会誌 Vol. 9 No. 2（P. 185～190），1999
26）清水 史朗：スノースポーツロボットの開発と指導への応用「カービングターンモデル」，
SIA PUBLIC RELATION PAPER SIA NEWS Vol.129（P.13），2005
27）清水 史朗：スノースポーツロボットの開発と指導への応用「カービングによる連続自動ターンモデル」，
SIA PUBLIC RELATION PAPER SIA NEWS Vol.130（P.10），2005
28）清水 史朗：スノースポーツロボットの開発と指導への応用「カービングによる支え棒付き１本スキーター

ンモデル」，SIA PUBLIC RELATION PAPER SIA NEWS Vol.131（P.12），2005
29）清水 史朗：スノースポーツロボットの開発と指導への応用「２本スキー横ずれターンモデル」，
SIA PUBLIC RELATION PAPER SIA NEWS Vol.132（P.11），2006
30）清水 史朗：スノースポーツロボットの開発と指導への応用「１本スキー横ずれターンモデル」，
SIA PUBLIC RELATION PAPER SIA NEWS Vol.133（P.13），2006
31）清水 史朗：スノースポーツロボットの開発と指導への応用「股関節の回旋モデル」，
SIA PUBLIC RELATION PAPER SIA NEWS Vol.134（P.5），2006
32）清水 史朗：スノースポーツロボットの開発と指導への応用「股関節の連続自動ターンモデル」，
SIA PUBLIC RELATION PAPER SIA NEWS Vol.135（P.12），2006
33）清水 史朗：スノースポーツロボットの開発と指導への応用「スキー指導への応用」，
SIA PUBLIC RELATION PAPER SIA NEWS Vol.136（P.12），2007
34）社）日本職業スキー教師協会編：SIA スキー教程 SIA Official Method，実業之日本社，1996
35）社）日本職業スキー教師協会編：The Ski Book SIA オフィシャルメソッド，山と渓谷社，2003
36）社）日本職業スキー教師協会 監修：最新オーストリアスキー教程 日本語版，実業之日本社，2007
（翻訳：児玉榮一，穴田慎一，河西豊光，川田彰一，塚脇誠）
37）TSUKAWAKI Makoto：Österreichische staatliche Trainerausbildung（Grundkurs）
“Protkoll der allgemeinen Methodik”，1990
38）TSUKAWAKI Makoto：Österreichische staatliche Ski－Trainerausbildung（Spezialkurs）
“Protkoll der praktischen，methodischen Übungen ”，1992
39）TSUKAWAKI Makoto：Österreichische staatliche Skilehrerausbildung
“Protkoll der praktischen methodischen Übungen”，1992
40）TSUKAWAKI Makoto：Österreichische staatliche Skilehrerausbildung
“Protkoll der Bewegungs－und Unterrichtslehre”，1992
41）塚脇　誠：アルペンスキーにおけるバランス能力の指導方法論的研究，
平成８年度 日本女子体育大学 大学院 修士論文，1997
42）塚脇　誠：オーストリアスキーメソッドの指導方法論的一考察，
日本スキー学会誌 Vol. 8 No. 1（P.109～120），1998
43）塚脇　誠：日本におけるカービングスキーの指導方法論的一考察，
日本スキー学会誌 Vol. 8 No. 1（P.121～132），1998
44）TSUKAWAKI Makoto：The Teaching Methodological Study of Balance Ability for Alpine Skiing，International Meeting of Sports Science Commemorating the 1998Winter Olympics in Nagano
－Proceedings－，（P.145～151），1998
45）塚脇　誠：縦のゲレンデスペースを使用したアルペンスキー指導法，
日本スキー学会誌 Vol. 9 No. 2（P.199～210），1999
46）塚脇　誠：縦のゲレンデスペースを使用したアルペンスキー指導法の指導方法論的一考察，
日本スキー学会誌 Vol.10 No. 1（P.209～220），2000
47）塚脇　誠：アルペンスキーにおけるターン運動の局面構造，
日本スキー学会誌 Vol.11 No. 1（P.141～152），2001
48）塚脇　誠（監修・構成・解説）：“スキーボディの構築計画”2002 Skier No. 1（P.59～70），山と渓谷社，2001
49）塚脇　誠：“スキー技術指導法”，社）日本職業スキー教師連盟 2001年度 ステージⅡ
基礎理論 集合講習会 補助テキスト，社）日本職業スキー教師連盟，2001
50）塚脇　誠（解説・通訳・テクニカルアドバイザー）：“ATOMIC PERFECT BOOK”（P.115～146），“マテリアルの進化が滑りを換えた Alpine”（P.172～175）2003 Skier コンペマテリアル Book：山と渓谷社
51）塚脇　誠：カービングスキー技術論Ⅰ（障害・傷害とターン運動技術）
日本スキー学会誌 Vol.12 No. 1 July（P.241～252），2002
52）塚脇　誠：“スキー技術指導法／スキー運動学”，社）日本職業スキー教師連盟
2002年度 ステージⅡ 基礎理論 集合講習会 補助テキスト，社）日本職業スキー教師連盟，2002
53）塚脇　誠：“スキー指導者論／スキー指導方法論”，社）日本職業スキー教師連盟

2002年度 ステージⅢ 基礎理論 集合講習会 補助テキスト，社）日本職業スキー教師連盟，2002
54）塚脇　誠（構成・解説）：“スキーがうまくなる！運動＆栄養計画；シーズントレーニング１週間”，
2003 Skier スキーテクニック Vol. 1 P.66～73，山と渓谷社，2003
55）塚脇　誠：“スキー技術の見せ方のコツ”，
2003 Skier スキーテクニック Vol. 1 P.131，山と渓谷社，2003
56）塚脇　誠：“ベーシックは不変（市村政美＆塚脇誠対談）”，
2003 Skier スキーテクニック Vol. 2 P.59，山と渓谷社，2003
57）塚脇　誠：カービングスキー技術論Ⅱ ≪アルペンスキーのターン運動における内脚に関する一考察≫
日本スキー学会誌　スキー研究 Vol.13 No. 1（P.87～98），2003
58）塚脇　誠：2004年度“ティーチングセミナー初級”テキスト，神奈川県スキー指導員会 2004
59）塚脇　誠：2004年度 SIA 集合講習会・基礎理論補助テキスト
『ステージⅡ：スキー運動学（スキー技術指導法）』，社）日本職業スキー教師協会 2004
60）塚脇　誠：2004年度 SIA 集合講習会・基礎理論補助テキスト
『ステージⅢ：スキー指導方法論（スキー指導者論）』社）日本職業スキー教師協会 2004
61）塚脇　誠：カービングスキー技術論Ⅲ≪アルペンスキーのターン運動における内外向姿勢に関する一考察≫
2004年度 国際武道大学紀要第20号（原著論文）P. 1 ～14
62）塚脇　誠：2005年度“ティーチングセミナー中級”テキスト，神奈川県スキー指導員会 2005
63）塚脇　誠：アルペンスキーにおけるターン運動の局面構造Ⅱ ≪プルークボーゲン≫
2005年度 国際武道大学紀要第21号（原著論文）P.21～32
64）塚脇　誠：2006年度“ティーチングセミナー上級”テキスト，神奈川県スキー指導員会 2006
65）塚脇　誠：アルペンスキーにおけるターン運動技術の類縁性に関する一考察
2006年度 国際武道大学紀要 第22号（原著論文）P.57～75
66）塚脇　誠：カービングスキー技術論Ⅳ≪アルペンスキーにおけるターン運動の運動構造に関する一考察≫
2007国際武道大学研究紀要 No.23（P.41～60）
67）塚脇　誠：カービングスキー技術論Ⅴ≪アルペンスキーにおけるストックワークとターン運動に関する一考察≫ 2008国際武道大学研究紀要 No.24（P.43～60）
68）塚脇　誠：カービングスキー技術論Ⅵ ≪アルペンスキーのターン運動における内・外傾姿勢に関する一考察≫ 2009国際武道大学研究紀要 No.25（P.9～30）
69）塚脇　誠：カービングスキー技術論Ⅶ ≪アルペンスキーのターン運動における外向傾姿勢に関する教授学的一考察≫ 2010国際武道大学研究紀要 No.26（P.27～48）
70）塚脇　誠：アルペンスキーの滑走運動におけるエッジングに関する教授学（技術論）的一考察 東京国際大学論叢 商学部編 第83号 2011年（P.67～88）
71）WALLNER Hermann：CARVEN Skilauf perfekt Offizielles Lehrbuch der österreichischen Skiinstruktoren，３. Auflage VERLAG BRÜDER HOLLINEK Purkersdorf 2004
72）WALLNER Hermann：richtig CARVEN Offizielles Lehrbuch der österreichischen Skiinstruktoren，
１. Auflage 2008 Die Deutsche Bibliothek－CIP－Einheitsaufnahme
73）吉田茂・三木四郎：教師のための運動学，大修館書店，1996
74）財）全日本スキー連盟：日本スキー教程，スキージャーナル，1994
75）財）全日本スキー連盟：日本スキー教程・指導教本副読本
［カービングスキーのスキー指導］，スキージャーナル，1997
76）財）全日本スキー連盟：日本スキー教程［指導実技編］，スキージャーナル，1999
77）財）全日本スキー連盟：日本スキー教程［指導理論編］，スキージャーナル，2000
78）財）全日本スキー連盟：教育本部オフィシャルブック 2001，スキージャーナル，2000
79）財）全日本スキー連盟：教育本部オフィシャルブック 2002，スキージャーナル，2001
80）財）全日本スキー連盟：日本スキー教程［技術と指導］，スキージャーナル，2003

（2011年12月13日　受理）

国武大紀要 (Int. Budo Univ. Journ.)
第27号：37－43（2011）

研究報告

中学校・高等学校の保健教育における「自己」概念の検討

高木　誠一

A study of the concept of “self” in health education in junior and senior high schools

Seiichi TAKAGI

Abstract

The purpose of this paper is to answer the question whether the concept of “self” in health education in junior and senior high schools corresponds to the issues for the formation of human beings in modern society or not. The approach employed is the text analysis of the government course guidelines and the textbooks.

It is concluded that there are two viewpoints which should be added to the concept of “self” in health education in junior high schools. First, children should locate “self” in the social context. Second, they should understand “self” from the viewpoint of social science. About the concept of “self” in health education in senior high schools, children should understand the social context they are located in, from the social and historical point of view, and get aware of social justice.

In other words, the concept of “self” should be connected more tightly to the society, to correspond to the issues for the formation of human beings in modern society.

Key words：social context，socialization，self

1. はじめに

現代社会における子どもの人間形成は，現在，どのようにとらえることができるのだろうか。子どもの人間形成には，「発達・社会化・教育」の側面があるが，その中の教育の側面における代表的な認識の提示に教育政策に関する文書があげられる。

平成20年３月に公示された「学習指導要領」の改訂の基本的な考え方を示すため，中央教育審議会は平成20年１月に「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」を答申した。特にこの中で，注目すべき概念に「主要能力（キーコンピテンシー）」がある。この答申は，「経済協力開発機構（OECD）は，1997年から2003年にかけて，多くの国々の認知科学や評価の専門家，教育関係者などの協力を得て，『知識基盤社会』の時代を担う子どもたちに必要な能力を，『主要能力（キーコンピテンシー）』として定義付け，国際的に比較する調査を開始している。このような動きを受け，各国においては，学校の教育課程の国際的な通用性がこれまで以上に強く意識されるようになっているが，『生きる力』は，その内容のみならず，社会において子どもたちに必要となる力をまず明確にし，そこから教育の在り方を改善するという考え方において，この主要能力（キーコンピテンシー）という考え方を先取りしていたと言ってもよい」（中央教育審議会，2008，pp.9-10）とし，また，「『知識基盤社会』の時代を担う子どもたちに求められているのは，『生きる力』である。OECDが，各国の15歳の子どもたちを対象にPISA調査を実施するのも，次代を担う子どもたちの主要能力（キー

コンピテンシー）が，一人一人の子どもの自己実現の基盤となるだけではなく，社会全体の発展の原動力になっているとの認識があるからである」（中央教育審議会，2008，p.11）というように「主要能力（キーコンピテンシー）」と「生きる力」を関連づけている。つまり，平成20年３月に公示された学習指導要領の基本的な考え方の理論的背景には，「主要能力（キーコンピテンシー）」といった「コンピテンス（能力）」についての新しい考え方があり，社会の変化への対応能力を「教育」として意図的に計画的に育成することを明示している。

この主要能力（キーコンピテンシー）の原型にあたるOECDのDeSeCo（Definition and Selection of Competencies）のコンピテンス概念は，「心理社会上の前提条件が流動する状況で，固有の文脈に対して，その複雑な需要にうまく対応する能力」（ライチェン・サルガニク，2006，p.65）と定義される。この定義に含まれる「文脈」という用語についてこの定義の開発に当たったライチェン，ドミニク・S.とサルガニク，ローラ・H.は，「行為は常に，社会的もしくは社会文化的な環境の中で起こるものであり，ある意味で，それは社会の多様な領域で構成されている。一連の構造化された社会的地位の各構成部分は，一定の社会的利害と挑戦の組み合わせの中で動的に組織される。こうした領域において，効果的なふるまいと行為の判断基準や需要が具体化され，それ自身として表明され，個々人はそれらに対応した行動をとる」（ライチェン・サルガニク，2006，p.68）と述べている。つまり，コンピテンス（能力）は社会的な文脈に依存して顕在化するものであり，コンピテンス（能力）は社会的に構成されるものであるという考え方が示されている。

子どもの人間形成における発達の過程は，一種の自然現象であり，環境に対する「個体内部からの自己調整」（住田・高島，2011，p.3）と定義することができる。生物学的にみた発達は，身体的な成長であり，心理学的にみた発達は，心理的な成熟を意味する。一方，子どもの人間形成における社会化の過程は，「緊張の調整過程」（清矢，1994，p.146）であり，その過程とは，社会的相互行為そのものであり，「人間の社会生活の中で様々に営まれる，実際的な問題関心が，子どもの広い意味での成長過程に関して，生み出され，取り扱われ，解決されていく，その過程そのもの」（清矢，1994，pp.144-145）でもある。子どもの発達過程における社会化の契機は，社会的な望ましさに向けて，身体・精神を，水路づけする教育現象の一種といえる。なぜこうした教育現象が生じるのか。子どもと相対する大人の実際的問題関心（例えば，食べるということ，排泄するということ，会話をするということ）が，社会的であり，それゆえ大人の実際的問題関心に基づく子どもへの働きかけが，社会化という作用となるのである。そこでは大人という存在が，社会的に存在しており，その働きかけが社会現象となっている。さらに，その社会化という作用への子どもの反作用が，自己社会化とも呼びうる社会的次元を獲得し，社会現象と化している。こうした作用と反作用の様相は，すでに自然現象とは言えず，社会現象が，社会現象を生み出す様相といえる。別の言葉でとらえれば，子どものなかに社会的事実が生成され，蓄積される社会的過程とも言えるのである。

現代社会における子どもの人間形成，特に教育の側面の核心部分には，「社会的文脈」という考え方が存在した。本稿の目的は，「主要能力（キーコンピテンシー）」といったコンピテンス（能力）の新しい考え方が提出される時代背景の中で，具体的な教育課程（カリキュラム）が，いかに構成されているのかを考察することにある。その具体的な教育課程（カリキュラム）として，本稿は，中学校保健体育（保健分野）および高等学校保健体育（科目保健）における「自己」概念を取り上げる。その理由は，直接的に，かつ正面から，子どもの人間形成における発達と社会化の焦点となる「自己」概念を，教育課程（カリキュラム）として取り上げているからである。果たして，中学校保健体育（保健分野）および高等学校保健体育（科目保健）における「自己」概念は，現代社会における子どもの人間形成の課題に応答するものになっているのだろうか。

２．中学校保健体育（保健分野）における「自己」概念

現行中学校学習指導要領（平成10年12月）の保健体育（保健分野）の目標は，「個人生活における健康・安全に関する理解を通して，生涯を通じて自らの健康を適切に管理し，改善していく資質や能力を育てる」（文部科学省，2005a，p.77）としている。そして，内容として「（１）心身の機能の発達と心の健康について理解できるようにする」のなかに「ウ　知的機能，情意機能，社会性などの精神機能は，生活経験などの影響を受けて発達すること。また，思春期において

は，自己の認識が深まり，自己形成がなされること」「エ　心の健康を保つには，欲求やストレスに適切に対処するとともに，心身の調和を保つことが大切であること。また，欲求やストレスへの対処の仕方に応じて，精神的，身体的に様々な影響が生じることがあること」とある。また，「３　内容の取り扱い」として「（４）内容の（１）のエについては，体育分野の内容の「A 体つくり運動」の（１）のアの指導との関連を図って指導するものとする」としている。当該部分に関して，新中学校学習指導要領（平成20年３月告示）の保健体育（保健分野）の目標と内容（１）と「ウ」，「３　内容の取り扱い（４）」に文言の変化はなく，「エ」が，「エ　精神と身体は，相互に影響を与え，かかわっていること。欲求やストレスは，心身に影響を与えることがあること。また，心の健康を保つには，欲求やストレスに適切に対処する必要があること」（文部科学省，2010，p.95）に改訂されている。また「第３　指導計画の作成と内容の取扱い」において，「（３）第１章総則の第１の２及び第３章道徳の第１に示す道徳教育の目標に基づき，道徳の時間などとの関連を考慮しながら，第３章道徳の第２に示す内容について，保健体育科の特質に応じて適切な指導をすること」（文部科学省，2010，p.97）が付加されている。

現行中学校学習指導要領（平成10年12月）解説保健体育編では，目標に関して，「個人生活を中心として科学的な理解を図ることを示したものである」「健康・安全についての科学的な理解を通して，現在及び将来の生活において健康・安全の課題に直面した場合に，的確な思考・判断及び意志決定を行い，自らの健康の管理や生活行動及び環境の改善を適切に実践できるような資質や能力，即ち実践力を育成することを目指している」（文部科学省，2005b，p.87）と述べ，内容に関しては，「ウ精神機能の発達と自己形成」のなかを「（ア）知的機能，情意機能，社会性の発達」と「（イ）自己形成」に分け，「（ア）知的機能，情意機能，社会性の発達」に関しては，「心は，知的機能，情意機能，社会性等の精神機能の総体としてとらえられ，それらは生活経験や学習などの影響を受けながら，大脳の発達とともに発達することを理解できるようにする。その際，知的機能については認知，記憶，言語，判断など，情意機能については感情や意志などがあり，それらは生活経験や学習などにより発達すること。また，社会性については，家族や友人関係などを取り上げ，それらの依存性は生活経験や学習などの影響を受けながら変化し，自立しようとする傾向が強くなることを理解できるようにする」としている。また，「（イ）自己形成」に関しては，「自己形成については，中学生期になると，自己を客観的に見つめたり，他人の立場や考え方を理解できるようになるとともに，物の考え方や興味・関心を広げ，次第に自己を認識し自分なりの価値観をもてるようになるなど自己の形成がなされることを理解できるようにする。また，自己は，様々な経験から学び，悩んだり試行錯誤を繰り返しながら社会性の発達とともに確立していくこと及びそれらの発達には個人差があることにも触れるようにする」としている。当該部分に関して，新中学校学習指導要領解説保健体育編（平成20年９月）では，特に内容「ウ」の「（ア）知的機能，情意機能，社会性の発達」の解説文において，「生活経験や学習」という文言の部分において「人や社会との様々なかかわりなどの生活経験や学習」（文部科学省，2008，p.150）と詳細な記述に改訂されている点が注目される。

現行中学校学習指導要領（平成10年12月告示）を受けて教科書『新編新しい保健体育』（東京書籍）は，「精神の発達と自己形成」に関して，「心の発達と自分らしさ」という標題のもと，「知的機能の発達」「情意機能の発達」「人とのかかわりと自分らしさ」について記述されている。特に「人とのかかわりと自分らしさ」については，「中学生の時期には生活の場が広がり，人と接する機会も増加するので，社会性が大きく発達します。社会性の発達には個人差がありますが，家族や友人関係などさまざまな人間関係を経験するうちに，自分から見た自分の姿（自己像）や人から見た自分に気づくようになります。」（新編新しい保健体育編集委員会・東京書籍株式会社編集部編，2006a，p.17）と記述されている。またベーシックワードとして「社会性」が取り上げられ，「人とのつきあいかたや社会のルールなど，社会生活を送るために必要となる態度や行動のしかたのこと」（新編新しい保健体育編集委員会・東京書籍株式会社編集部編，2006a，p.16）と説明され，『新編新しい保健体育中学校全教師用指導書指導編（朱書編）』には，「社会で求められるマナーや態度について考えさせてみる」（新編新しい保健体育編集委員会・東京書籍株式会社編集部編，2006a，p.16）との指導上の留意点が述べられている。さらに『新編新しい保健体育中学校全教師用指導書　保健　指導計画・指導資料編』では，本時のねらいとして「①知的機能の発達と，脳とのかかわりについて理解できる。

②感情の豊かさは，どのように発達するのか考えることができる。③情意機能と社会性は，どのように発達するのか考えることができる」（新編新しい保健体育編集委員会・東京書籍株式会社編集部編，2006b，p.34）を示し，内容の解説として，「知的機能とは何か」「知的機能の発達」「知能の発達における個人差」「記憶」「情意機能とは何か」「情意機能の発達」「怒りの発達」「愛情の発達」「喜びの発達」「社会性とは」「友達関係の成立」「社会的ルールの認識」「４つの窓」が取り上げられ，特に「４つの窓」は，「自分が知っている自分」「自分が知らない自分」「他人が知っている自分」「他人が知らない自分」という４象限で自分を考えるという，自分についての考察を可能とする枠組が提供され，自己開示や他人からのフィードバックの重要性が示されている。

さて，以上のように，中学校保健体育（保健分野）における「自己」概念がどのように取り扱われているのかをみてきたが，現代社会における子どもの人間形成の課題という観点からみて，付加すべき論点が存在しているように思われる。個人的成長という「発達」の側面と社会的役割の取得という「社会化」の側面という「自己」概念に関する二側面の構図は，人格の完成と国家及び社会の形成者という教育基本法にまで遡れる構図であり，本単元の学習指導要領およびその具現化である教科書に，その構図のまま像を結ぶことになるはずである。しかしながら，そうした構図が十分に反映し尽くされていないからである。それは，「個人生活」「生活経験」を，人間関係だけには収まらない社会的利害の交錯への気づきの萌芽として提示しきれていないのである。なぜある家庭や地域社会は経済的に豊かであり，ある家庭や地域社会は経済的に貧しいのか。ある家庭や地域社会に生まれたという偶然性を引き受けることの責任とは何なのか。自分の姿（自己像）の考察には，こうした社会的利害の交錯や社会的文脈のなかに自己を位置づけることが，大人になっていく過程には欠かせない。生活それ自体に含まれるこうした社会の構造的側面への気づきの萌芽が含まれていて良いのではないだろうか。さらに，「社会性」を「人とのつきあいかたや社会のルールなど，社会生活を送るために必要となる態度や行動のしかたのこと」との定義に加えて，「社会的文脈を理解し，新たな社会的文脈を生み出すこと」といった一歩踏み込んだ定義のあり方もあるのではないだろうか。つまり，「自己」概念の「科学的理解」に社会科学的理解が付与される余地があるように思われるのである。

３．高等学校保健体育（科目保健）における「自己」概念

現行高等学校学習指導要領（平成11年３月告示）の保健体育（科目保健）の目標は，「個人及び社会生活における健康・安全について理解を深めるようにし，生涯を通じて自らの健康を適切に管理し，改善していく資質や能力を育てる」（文部科学省，2004a，p.101）としている。そして，内容として「（１）現代社会と健康　我が国の疾病構造や社会の変化に対応して，健康を保持増進するためには，ヘルスプロモーションの考え方を生かし，人々が適切な生活行動を選択し実践すること及び環境を改善していく努力が重要であることを理解できるようにする」のなかに「ウ精神の健康人間の欲求と適応機制には，様々な種類があること。精神と身体には，密接な関連があること。また，精神の健康を保持増進するには，欲求やストレスに適切に対処するとともに，自己実現を図るよう努力していくことが重要であること」とある。また，「３　内容の取り扱い」として「（２）内容の（１）のウについては，大脳の機能，神経系及び内分泌系の機能について必要に応じ関連付けて扱う程度とする。また，『体育』における体ほぐしの運動との関連を図るよう配慮するものとする」としている。当該部分に関して，新高等学校学習指導要領（平成21年３月告示）の保健体育（科目保健）の目標と内容（１）「ウ」，上記した「３　内容の取り扱い（２）」に，句読点や項目番号等を除いて文言の大きな変化はないが，内容（１）に関して「我が国の疾病構造や社会の変化に対応して，健康を保持増進するためには，個人の行動選択やそれを支える社会環境づくりなどが大切であるというヘルスプロモーションの考え方を生かし，人々が自らの健康を適切に管理すること及び環境を改善していくことが重要であることを理解できるようにする」（文部科学省，2009a，p.95）と改訂され，ヘルスプロモーションに関する説明が付加されている。

現行高等学校学習指導要領解説保健体育編体育編では，保健体育（科目保健）の目標に関して，「個人生活のみならず社会生活とのかかわりを含めて総合的に理解することを示したものである」「自我の確立とともに個人にかかわる事柄のみでなく社会的な事象に対する興味・関心が広がり，自ら考え判断する能力なども身に付きつつあるという発達の段階を考慮し，個人生活

や社会生活における健康・安全に関する事柄に興味・関心をもち，科学的に思考・判断し，総合的にとらえることができるようにすることを目指したものである」「個人生活及び社会生活における健康・安全についての総合的な理解を深める中で，現在及び将来の生活において健康・安全の課題に直面した場合に，的確な思考・判断に基づいて適切な意志決定を行い，自らの健康の管理や健康的な生活行動の選択及び健康的な社会環境づくりが実践できるような資質や能力，即ち実践力の基礎を育成することを目指している」（文部科学省，2005c，pp.81-83）と述べている。内容に関しては，「ウ精神の健康」のなかを「（ア）欲求と適応機制，（イ）心身の相関，（ウ）ストレスへの対処，（エ）自己実現」の４つに分けて解説されている。当該部分に関して，新高等学校学習指導要領解説保健体育編・体育編（平成21年12月）では，特に内容「ウ」の「（ウ）ストレスへの対処」に関する解説において，「その際，ストレスの原因となっている事柄に対処すること，ストレスの原因についての自分自身の受け止め方を見直すこと，心身に起こった反応については体ほぐしの運動等のリラクセーションの方法で緩和することに触れるようにする。また，それらについては，周りから支援を受けることやコミュニケーションの方法を身に付けることが有効な場合があることに触れるようにする。なお，事故災害後には，ストレスにより障害が発生することもあることにも触れるようにする」（文部科学省，2009b，p.115）と述べ，場合分けをした上で詳細に解説する書き方に改訂されている。

現行高等学校学習指導要領（平成11年３月告示）を受けて教科書『最新保健体育』（大修館書店）は，「精神の健康」に関して，「心の健康のために」という標題のもと，「ストレスには，さまざまな対処方法がある」「自己実現は，心の健康につながる」について記述されている。前者の「ストレスには，さまざまな対処方法がある」に関しては「①原因の克服や回避，②状況判断やリラクセーション，③カウンセラーや専門家への相談」が小項目としてあげられ，後者の「自己実現は，心の健康につながる」に関しては，「①自己実現とは，②自己実現と心の健康」が小項目としてあげられ，特に「②自己実現と心の健康」については，「自己実現への道のりは，まず自分が何を求め，どのような生活をめざしているのかなど，自分自身を見つめ直すことから始まります。それを踏まえて自分なりの目標をかかげ，達成に向けて行動し，結果を評価するという過程を繰り返しながら，目標に近づいていきます。こうした過程を通して，私たちは達成感や充実感，『はりあい』や『生きがい』を感じながら生活することができ，それが心の健康につながっていくのです」（大修館書店編集部編，2009a，p.133）と記述されている。『最新保健体育・指導ノート　保健編①』には「学習の目標」として，「健康な心を維持し，自分らしい生き方を手に入れるために，ストレスへの対処と自己実現を学ぶ。ストレスへの対処は，自分の生活で活用できてはじめて意味をなすため，ストレスの起こるしくみやストレス対処のタイプを理解し，自分にあった対処法をみつけることが目標である。自己実現については，今後の人生において，自己実現を考えていけるきっかけを与えるという位置づけでもよい」（大修館書店編集部編，2009a，p.132）としている。また「自分らしさ」についての解説は，「自分らしさは，何か特別なことで表現するものではなく，２つの側面がある。１つは，時間的な流れのなかでつくられた自分。赤ちゃんの自分，幼児期の自分，小学生の自分，中学生の自分…という時間的な流れのなかでつながった，いまの高校生の自分である。これまでの時間的な流れやつながりを統合した結果として現在の自分がいるととらえ，いまの自分を生きることが大事である。もう１つは，空間的な広がりをのなかでつくられた自分。親の子ども，高校生，野球部のメンバー，コンビニのアルバイターというようにいろいろな顔をもっているが，そのすべてが自分であり，それを受け入れて，いまの自分を生きることが大事である」（大修館書店編集部編，2009a，p.133）としている。さらに『最新保健体育教授用参考資料』では，ストレスへの対処，カウンセリングの専門性やその効果，エリクソンのアイデンティティの概念，達成動機等がより詳細に記述されている。

さて，以上のように，高等学校保健体育（科目保健）における「自己」概念がどのように取り扱われているのかをみてきたが，高等学校保健体育（科目保健）における「自己」概念の取り扱いは，中学校保健体育（保健分野）における「自己」概念の取り扱いと同様に，現代社会における子どもの人間形成の課題という観点からみて，付加すべき論点が存在しているように思われる。現行および新高等学校学習指導要領解説保健体育編体育編では，科目保健の目標に関して，「社会生活とのかかわり」「社会的な事象に対する興味・関心」「社会生活における健康・安全」「健康的な社会

環境づくり」との記述にみられるように，「社会」との関連性について繰り返し述べられている。しかしながらその目標を実現すべき内容の一つである「精神の健康」の記述において，「社会」との関連性が明確に示されてはいない。確かに「精神の健康」にとってストレスへの対処方法を学ぶことは極めて重要なことである。だが，例えば，ストレスの原因が，社会生活とかかわる社会構造的な事象（特に経済的な事象）である場合，「克服や回避」は困難であり，「気分転換」や「リラクセーション」は必要なことではあるが，そうした困難さそのものに対する社会科学的理解を深めることによって，重要な社会的気づきに導くことが大切なのではないだろうか。『最新保健体育・指導ノート　保健編①』の「自分らしさ」についての解説は，明らかに社会的な関係と呼びうる「親の子ども，高校生，野球部のメンバー，コンビニのアルバイター」を「空間的な広がり」と呼んでいる。これは「時間的な流れ」との対比で用いた表現と推測できるが，「社会的な関係」を積極的に意識づけようとする教育的意図は希薄であるように思われる。例えば，社会的な関係の一つである「社会的ジレンマ」（代表的なものに「囚人のジレンマ」がある）に，時間的な流れ（長期的視野）が加わることで，その関係性の様相が非協力的な関係から協力的な関係へと一変することを考慮すれば，「自分らしさ」は，時間の流れと社会的な関係のなかで，相互作用的な構成的概念（過去・現在・未来×社会的関係）であることを示すことができるのである。

「状況判断」についていえば，「自分がおかれている状況に対する見方や考え方を変えるのも方法の１つです。たとえば，何か失敗をしたときに，『自分はだめだ』『まったくだめだった』などと思って，落ち込むことはありませんか。しかし，その状況を，冷静に，また論理的・客観的に見直してみると，確かに失敗した部分もあったかもしれませんが，成功した部分もあったのではないでしょうか」（大修館書店編集部編，2009a，p.132）との記述がある。個人的・心理的な観点から「その状況を，冷静に，また論理的・客観的に見直してみる」ことの有効性を説いており，自らの失敗への対処としては，正にその通りである。だが，ストレスの原因が本人に帰責できない社会生活とかかわる社会構造的な事象である場合，ここには社会的な不条理が存在しているのであり，むしろこうした社会生活に根ざす「状況判断」は，社会的・歴史的観点から「その状況を，冷静に，また論理的・客観的に見直してみる」ことが有効なのではないだろうか。社会的・歴史的観点から「その状況を，冷静に，また論理的・客観的に見直してみる」ことによって，自らが置かれた社会的文脈を理解し，社会的正義や社会的公正といった重要な社会的気づきに学習者を導き，そのこと自体が深いレベルで学習者の思慮深さを生み出し，健康概念における社会との関連性も踏まえた，精神の健康につながるのではないだろうか。

４．おわりに

中学校保健体育（保健分野）および高等学校保健体育（科目保健）は，他の教科と同様，生徒の発達を踏まえ，人格の完成と国家及び社会の形成者の育成という教育的意図に基づいて，生徒を自立・自律に向けて社会化するという作用を持っている。「自己」概念に関して，中学校保健体育（保健分野）においては「自己形成」，高等学校保健体育（科目保健）においては「自己実現」が鍵概念として登場する。「自己」概念は，子どもの発達・社会化・教育の焦点である。中学校保健体育（保健分野）および高等学校保健体育（科目保健）における「自己」概念は，現代社会における子どもの人間形成の課題に応答するという観点からは，補うべき論点がいくつかあることを指摘した。それは，中学校保健体育（保健分野）における「自己」概念については，社会的文脈のなかに自己を位置づけること，「自己」概念を社会科学的に理解すること，の２点が補うべき論点であり，また高等学校保健体育（科目保健）における「自己」概念については，社会的・歴史的観点から，自らが置かれた社会的文脈を理解し，社会的正義や社会的公正といった重要な社会的気づきを持つこと，の１点が補うべき論点である。つまり，中学校・高等学校の保健教育における「自己」概念は，現代社会における子どもの人間形成の課題に応答するため，「社会」との関連をより一層強めるべきなのである。現代社会における子どものコンピテンス（能力）は，社会的な文脈に依存して顕在化するものであり，コンピテンス（能力）は社会的に構成されるものであるがゆえに，現代社会を生きる子どもは，社会的文脈を理解し，社会的文脈を生き抜くことが求められている。

「自己」概念を社会的・歴史的観点から位置づける場合，その概念の中核に「個人の尊厳」や「人権の尊重」の概念が存在する。なぜ自分自身が「尊厳」をもち，「尊重」されるべき存在なのかを理解することを，生徒

自身が「自己形成」や「自己実現」について考えていく際の出発点に据えることによって，心理的な「自己」の理解に加えて，社会的な「自己」の理解につながる道筋が見えてくるのではないだろうか。そのためには，本単元における「社会的」という論点をより強化するために，例えば新中学校学習指導要領（平成20年３月告示）の中学校社会（公民的分野）における「１目標個人の尊厳と人権の尊重の意義」「２内容（１）私たちと現代社会　イ　現代社会をとらえる見方や考え方　人間は本来社会的存在であることに着目させ，社会生活における物事の決定の仕方，きまりの意義について考えさせ，現代社会をとらえる見方や考え方の基礎として，対立と合意，効率と公正などについて理解させる。その際，個人の尊厳と両性の本質的平等，契約の重要性やそれを守ることの意義及び個人の責任などに気付かせる」（文部科学省，2010，pp.41-42）との関連づけを見いだしていくことが今後の課題であると思われる。

さらに新高等学校学習指導要領（平成21年３月告示）の公民（科目現代社会）の「２内容（２）現代社会と人間としての在り方生き方　ア　青年期と自己の形成生涯における青年期の意義を理解させ，自己実現と職業生活，社会参加，伝統や文化に触れながら自己形成の課題を考察させ，現代社会における青年の生き方について自覚を深めさせる」（文部科学省，2009a，p.47）は，「自己形成」と「自己実現」という鍵概念が共有されており，「自己」概念を結節点として，保健の観点と現代社会の観点の相補的な関連づけを見いだしていくことが今後の課題であると思われる。

〈引用・参考文献〉

中央教育審議会，2008,「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」。
文部科学省，2004,『高等学校学習指導要領（平成11年３月）』改訂版，国立印刷局。
文部科学省，2005a,『中学校学習指導要領（平成10年12月）』改訂版２刷，国立印刷局。
文部科学省，2005b,『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説　保健体育編』一部補訂３刷，東山書房。
文部科学省，2005c,『高等学校学習指導要領解説　保健体育編・体育編　平成11年12月　平成16年５月一部補訂』一部補訂２刷，東山書房。
文部科学省，2008,『中学校学習指導要領解説　保健体育編　平成20年９月』初版，東山書房。
文部科学省，2009a,『高等学校学習指導要領　平成21年３月告示』初版，東山書房。
文部科学省，2009b,『高等学校学習指導要領解説　保健体育編・体育編　平成21年12月』初版，東山書房。
文部科学省，2010,『中学校学習指導要領　平成20年３月告示』３刷，東山書房。
ライチェン，ドミニク・S.・サルガニク，ローラ・H. 編著，立田　慶裕監訳，2006,『キー・コンピテンシー―国際標準の学力をめざして』明石書店。
清矢良崇，1994年,『人間形成のエスノメソドロジー―社会化過程の理論と実証』東洋館出版社。
新編新しい保健体育編集委員会・東京書籍株式会社編集部編，2006a,『新編新しい保健体育中学校全教師用指導書指導編（朱書編）』東京書籍。
新編新しい保健体育編集委員会・東京書籍株式会社編集部編，2006b,『新編新しい保健体育中学校全教師用指導書　保健　指導計画・指導資料編』東京書籍。
住田正樹・高島秀樹編著，2011,『子どもの発達社会学―教育社会学入門』北樹出版。
大修館書店編集部編，2009a,『最新保健体育・指導ノート保健編①』３刷，大修館書店。
大修館書店編集部編，2009b,『最新保健体育教授用参考資料』３刷，大修館書店。

（2011年12月13日　受理）

国武大紀要 (Int. Budo Univ. Journ.)
第27号：45－53（2011）

研究報告

科学的・換喩的ホームズと多義的・神秘的ブラウン神父
―私たちはなぜ探偵小説が好きなのか―

望月好恵

Scientific and Clear Holmes and Mysterious and Ambiguous Father Brown
―Why do we Love Detective Stories?―

Yoshie MOCHIZUKI

Abstract

In the later Victorian era, people loved Sherlock Holmes, who solves any case with his sharp brain which reads every detail. In that period, the later 19th century, modern science made rapid progress. Holmes investigates crimes with modern scientific methods. He finds small marks which anyone else cannot notice, reads them rationally and identifies the criminal. He never misses truths. The author of Holmes series, Arthur Conan Doyle, knew well that readers expected that.

Today is also the era of detective stories. We really enjoy Holmes' descendants' exciting actions and readings like Victorian people did.

Father Brown, who was created by G. K. Chesterton, followed Holmes in detectives' history, however, is very different from Holmes. Sometimes he doesn't catch a criminal straightforward. He reads situations in many ways and occasionally he even releases a criminal.

The word "mystery" has two meanings. One is detective stories and the other is mystery which is related to mysticism. When we focus on its double meanings, it is very interesting that a Catholic priest plays a role of a detective and it seems that modern people need a detective who tries to detect mystery of our lives.

キーワード：探偵小説，detective，ホームズ，ブラウン神父，科学的，換喩，ミステリー，神秘的，多義的，動機不明の殺人

1．はじめに

探偵小説は，エドガー・アラン・ポーのデュパンを主人公とする『モルグ街の殺人』（1842年）とコナン・ドイルのシャーロック・ホームズシリーズがその本格的な始まりだと言われている。19世紀末から，人々は彼らの活躍に心躍らせた。[*1]

現代においても，シャーロック・ホームズばりの探偵役は人気である。視聴率が下がればすぐ打ち切りとなる米国のドラマシリーズの中でも，小さな証拠に科学的分析を加えて犯罪を解決するヒーロー，ヒロインの活躍するドラマは，安定した人気を確保する。日本でも個性派の探偵が次から次に生み出されている。[*2]ミステリー（推理もの）の形式を採用すれば本が売れる。ミステリー流行りの時代である。

探偵は英語で detective。detective の動詞 detect の意味は，オックスフォード英英辞典には，to discover or notice sth, especially sth that is not easy to see, hear,

etc:（何ものかを，特に，見たり聞いたりすることが容易ではないものを，発見する，あるいはそれに気づくこと）とあり，*OED* には，to uncover（おおいを取ること）とある。探偵は謎解きを披露しながら，犯人が巧妙に隠していることを明らかにしていく。

しかし，現在，ミステリーが読まれるのは，謎解きの面白さに惹かれて，という理由を越えた何かがあるように思われる。

すでに謎解きの基本パターンは出尽くしている。現在のミステリーは，謎解きそのものが勝負なのではなくて，むしろ，探偵の個性や，犯罪の時代性や，登場人物たちの隠し事等のほうが，読者を惹きつける魅力になっているように思われる。

現代の読者はミステリーに何を求めているのだろうか。想像をめぐらせてみたい。

2．探偵 detective のはじまり

一般的に，英国推理小説はシャーロック・ホームズを生み出したコナン・ドイル（1859–1930）に始まると言われている。しかし，「探偵・刑事」の意味で detective の語を最初に用いたのはチャールズ・ディケンズである。

detective という単語から，探偵とは何かをまず確認しておこう。

世界最大の英語辞書 *OED*（*Oxford English Dictionary*）を見てみよう。あらゆる英単語のあらゆる用法の初出年が載っている。当該の単語に新しい意味が加わるたびに，その単語が初めてその新しい意味で使われた例文を年号と一緒に載せている。*OED* には detective について次のような記載がある。

A. *adj*. Having the character or function of detecting; serving to detect; emplyed for the purpose of detection. ...（用例は削除）

B. *sb*. One whose occupation it is to discover matters artfully concealed; particularly（and in the original application as short for *detective policeman*, or the like）a member of the police force employed to investigate specific cases, or to watch particular suspected individuals or classes of offenders. *private detective*, one not belonging to the police force, ...（語彙の説明は以下を削除）

1850 DICKENS in *Household Words* 13 July 368/ Ⅰ To each division of the Force is attached two officers, who are denominated ‘detectives’. *Ibid*. 396/ Ⅰ The two Detectives of the X division. **1852** —— *Bleak Ho*. ｘｘｖ. 251 Detective Mr. Bucket. **1856** ...（用例は以下を削除）

Ａの形容詞用法とＢの名詞用法がある。ここには転載しなかったが，形容詞用法の初出は1843年。Ｂの名詞の用例を見ると，1850年，ディケンズが自ら主催する *Household Words* という雑誌に掲載した文章に初めて detective が登場する。その用例から，警察署に勤める警官で detective と称される警官が出現したことが分かる。Ｂの語彙を見れば，「巧みに隠された事柄を発見することがその職業となっている人。特に（もともとの用法においては detective policeman などそれに類する言葉の短縮形として）特殊な事件を捜査するため，または特定の容疑者個人・容疑者グループを監視するために採用された，警察署の一員」とある。そしてそのすぐ後に，警察署に所属しない探偵を private detective と呼ぶことも記載されている。「それに類する言葉（the like）」とは，次の1852年の用例の出典，ディケンズの *Bleak House*『荒涼館』に出てくる detective officer という言葉などのことであろう。*OED* に記載された Detective Mr. Bucket は，*Bleak House* の登場人物「バケット警部」であり，小説世界に初めて登場した探偵警官である。ディケンズはスコットランド・ヤード（ロンドン警視庁）の警官たちの仕事を実際に取材していて，バケット警部は実在の探偵警官がモデルとなっていると言われている。

3．時代背景，犯罪の後期ヴィクトリア朝時代

では，探偵という職業が生まれ，探偵小説が人気を集め始めた19世紀後半とは，どのような時代だったのか。

探偵小説は，犯罪小説でもある。ホームズ・シリーズの第一作『緋色の研究』が世に出たのは1887年。後期ヴィクトリア朝時代に当たる。ヴィクトリア朝時代は華やかさと暗さが強烈なコントラストをなす時代だ。1851年に水晶宮が建造され，万国博覧会が開かれ，英国の豊かさが見せびらかされる一方，当時のロンドンは貧困と暴力と犯罪に満ちていた。1888年の切り裂きジャックの事件を初め，人々を恐怖に陥れる犯罪が起きていた。人々は恐ろしい犯罪を解決してくれる名探偵を熱望しただろう。

19世紀後半は急速に科学が発達した時代でもある。

犯罪捜査にも科学的分析による手法が次々に取り入れられるようになっていた。『緋色の研究』の中でホームズは血痕検査法を発見している。実際に血痕の検査法が発見されるのは，『緋色の研究』が発表された13年後の1900年である。コナン・ドイルは医学を修めていた。彼自身が科学者だから当時の科学がどの程度進歩しているのかをつかんでいたのだろうし，さらに，作家として成功するような人物にはよく見られることだが，時代を読む能力が備わっていて，犯罪学の進歩を敏感に読み，血痕検査法出現のタイミングを測ることができたのだろう。

コナン・ドイルは時代を読んでいた。コリン・ウィルソンは『超読書体験』の中で次のように述べている。

……　ホームズ本人にしても，ただの架空のキャラクターではない。彼は，ヴィクトリア朝後期を生きる人々の心の奥底にあった願いに応えていたのである。すなわち，世界は大丈夫なのだと請合ってくれる力を求める気持ち，理性の力を信じたいという思い，そして精神的疎外という新たな病によって生み出された混沌を克服する力を求める心に，ホームズは応えていたのだ。

このような願いは，一八九〇年に劣らず，今日でも強い。ここに，ホームズが現代でも新鮮さを決して失わない理由があるのではないだろうか。[*3]

シンプルな言葉にしてしまうのは気が引けるが，そのほうが納得できるように思われる。要するに，時代が悪いのだ。コリン・ウィルソンが言うように，当時の人々の，世界は大丈夫なのだと請合ってくれる力を求める気持ちは，現代の私たちの気持ちでもある。経済の動きは先が見えない。天災，人災が重なる。「世も末だ」という不安が人々を覆う。そういう時代，犯罪は増える。それも，「動機不明の殺人」と分類されるような説明のつかない犯罪が増えるのだ。

ヴィクトリア朝時代の人々と重なる気分を現代人も持っている。現代人も，シャーロック・ホームズを髣髴させるような探偵の登場する人気ドラマシリーズを見るからである。彼らはホームズの末裔だ。

次節ではホームズがヴィクトリア朝時代の人々の望みに具体的にどうやって応えたのか，次々節では，現代のホームズの末裔たちはどう私たちを引きつけるのかをみてみたい。

4．科学・合理・換喩の探偵ホームズ，読者の期待に応える

ホームズシリーズでは，よく冒頭で，ホームズが人を観察して得られた情報を披露して，観察された本人やワトソンを驚かせるシーンがある。例えば「孤独な自転車乗り」では，若い女性がホームズを訪ねてくる。ホームズは彼女の靴の底の擦れ方から「自転車に乗る」と，指先を見て「タイピストかもしれない」と，しかし，精神的深みのある顔つきから「音楽家である」と，そして，日に焼けた顔から「郊外に住んでいる」と推理する。すべて正解である。

これが探偵ホームズの顕著な特徴である。普通の人間が気づきもしない些細な物事から，非常に多くの情報を引き出す。当時流行の観相学や骨相学の知見，化学実験の成果等を利用して，出てきた証拠を科学的・合理的に分析し，原因・結果の順に一直線に並べる。ホームズは冷静で，揺るがない知性の人，科学・合理の探偵である。

ホームズのこのような態度を臨床心理学者である川嵜克哲氏は『夢の分析　生成する〈私〉の根源』の中で，次のように解説する。

このように，ごくささいな手がかりから背景に隠された事実を推測していく「換喩」的な視点は，探偵のシャーロック・ホームズの推理や美術史家モレッリが案出した古典絵画の作者鑑定法にも共通していると歴史学者ギンズブルグ[14]（原典の注）は指摘している。

よく知られているように，シャーロック・ホームズは依頼人のちょっとしたしぐさからその人の職業や来歴を言い当てたり，事件の現場のかすかな手がかりから犯行の状況や犯人を推理していく。……（筆者による中略）……　これらはたしかに，すでにみてきたように夢や症状という徴候に対する精神分析的な認識の仕方とパラレルであり，それらを基礎づけているのは「換喩」的な視点である。[*4]

「換喩」は「隠喩」に対する言葉である。川嵜氏はフロイトとユングの夢分析を比較して，次のように分析する。

ユングが事象の形態的な相似や，そのシンボリカルな意味を重ね合わせていく「隠喩」的な特徴をもっているのに対して，フロイトの場合は，微かで細かな差異に注目して，その「違い」は本来的ななにかが置き

換えられたものなのかという具合に，微小な痕跡から線状的に元の本体に向かっていく「換喩」的な特徴をもっているといえるだろう。[*5]

ホームズは，犯罪の現場に残された微小な痕跡から，元の本体，すなわち，犯人に向かっていく。フロイトと同様に，「換喩」的な特徴をもっているということだ。ホームズに限らない。ミステリー（謎解き）はすべて「換喩」的な特徴をもっている。さらに，それはミステリーに限らない。そのまま近代科学の態度と重なるのである。

だからホームズも化学実験や顕微鏡をはじめとする科学的手段を使って犯人を特定していくのだ。誤ることなく，一直線に。細かな痕跡から多大な情報を読み取り，本体を暴いていく。人並みはずれた頭脳で。

コリン・ウィルソンは指摘する。ホームズを生み出したコナン・ドイルは，これこそまさに読者が求めているものであることを見抜いていた，と。

多くの読者にとって，ホームズが推理学の真髄を披露するこうした一連の冒頭シーンこそ，実は作品のもっとも面白い部分だ。要は，読者の，絶対的な頭脳に対する憧れ，を満足させてくれればよいのである。この設定に読者が絶対に飽きないと見抜いていたドイルは，繰り返しこういう状況を使っている。[*6]

正解には主人公の探偵だけが辿り着ける。それも100％の正答率で。それは，現実的にはあり得ないことだが，読者にとってはそうでなければならないのだ。そうであって初めて，ホームズは読者の期待に応えられるのだ。

読者は「絶対的な頭脳」を求めているのだから。

5．ホームズの末裔，現代人の期待に応える

前節でみたようなホームズの特徴を備えた，ホームズの末裔と呼べる現代の探偵を二人挙げてみよう。

一人目は，米国の放送局FOXで放映されたドラマ『ライ・トゥー・ミー』（*LIE TO ME*）（2009年１月～2011年１月，全３シーズン，48話）の主人公ライトマン博士。実在の人物，ポール・エクマン（Paul Ekman）というカリフォルニア大学サンフランシスコ医学校の心理学教授がモデルである。彼は容疑者や証人の微表情を読み取って，相手が嘘をついていないかどうかを見抜く。それだけでなく，細かな感情まで言い当てる。ライトマン博士はFBI等から犯罪捜査の協力を要請され，表情から心理を読んで犯人を特定していく。[*7]

二人目は，同じくFOXで放映中の『ボーンズ』（*BONES*）（2005年９月～，現在シーズン７放映中）の主人公ボーンズことテンペランス・ブレナン。法人類学者。「ボーンズ（骨）」とは，テンペランスの相棒，FBI捜査官のブースがつけたテンペランスのニックネームだ。彼女は死体の骨から性別・年齢・体型・人種・病歴，その他諸々の情報を読み取る。

ライトマン博士もボーンズも，シャーロック・ホームズの末裔だ。ライトマン博士は心理学者，ボーンズは法人類学者だが，二人とも，職業探偵もはるかに及ばないような活躍ぶりで必ず犯人を捕まえてくれる。

ホームズの時代より科学が進歩している分，科学捜査は格段に複雑になり専門化している。ライトマン博士もボーンズも周囲のスタッフと協力して対象を分析する。団体戦の様相を呈する。例えば，『ボーンズ』では，骨，肉，付着物，CGによる生前の姿の復元，等をそれぞれの分野の専門家が担う。謎解きはホームズの時代よりも，科学的分析の部分が大きくなっていて，「今はそんなことまでわかるのだ」と視聴者を感心させる。

筆者はミステリーファンではないが，ここ数年，疲れて鬱々とした気分のときに，ホームズ，ライトマン博士，ボーンズのドラマをDVDで見る。見ている間と，見終わった後の１時間くらいは気分が晴れる。これは筆者に限ったことではないように思われる。なぜなら，ホームズシリーズの書籍やDVDはアマゾンに溢れるばかりに用意されているし，『ライ・トゥー・ミー』と『ボーンズ』は日本でも放映される人気ドラマになっているからだ。DVDボックスも日本仕様が販売されている。『ライ・トゥー・ミー』は2010年５月に打ち切りが決定したが，『ボーンズ』はシーズン７に突入しており，あの『ER』に追いつきかねない勢いだ。

探偵の「読み」がいつも正しいというのも，少し距離をとって眺めてみれば，非現実的な話である。しかし，ライトマン博士が常に一つだけの正しい「読み」をした，という結論に至らなければ，視聴者は満足しない。表情も心理も刻々と変化していくものだから，正確に読むのは極めて困難だ。現実には，正解率が80％でしたとか，今回は迷宮入りでした，という展開が当然ありうるのだが，ドラマでは，それはタブーであ

る。現代の私たちも，後期ヴィクトリア朝時代のホームズファンたちと同様に，「絶対的頭脳」を求めているからである。製作者はそのことを知り抜いている。

ボーンズも同じである。彼女が犯罪の現場や方法を解読するシーンは，視聴者が一番魅力を感じる部分である。こんな小さな破片からこんな重大なことがわかるよ，という，一応，科学的な種明かしが披露される所である。一応，とするのは，例えば，あまりにタイミングよく靴底に珍しい植物の胞子が発見されたり，周りのスタッフがテンペランスの脳に電気が走るようなヒントの言葉を偶然発したりと，現実世界でもありうる事だが，毎週それはないだろう，と言いたくなるような，いかにもドラマだから許される展開の下で，一義的な読解がなされるからである。

しかし，一直線に解決に向かってすべての証拠が並べられ，説明されなければ，視聴者のカタルシスはないのだ。煮え切らない日常で，せっかく見るドラマの中でも動機があいまい・多義的で，犯人を捕まえることもできないような犯罪が描かれたら，誰がそんなものを見たいだろうか。小説や映画やドラマは，何かしら夢を見せてくれて，しばしの間現実を忘れさせてくれるものでなければ，時間をかけて見る意味はないと，多くの人が思っているのだ。

6．多義性の探偵ブラウン神父，神父だから悪事に明るい

ホームズ・シリーズに続く探偵小説はいくつかあるが，ホームズとはある意味，対照的な探偵がいる。G. K. チェスタトン（1874–1936）の生み出したブラウン神父である。

ブラウン神父のシリーズは，1911年の『ブラウン神父の童心』から1935年の『ブラウン神父の醜聞』まで，全五冊。『ブラウン神父の童心』に収録されている「青い十字架」では，パリ警察の主任であり，世界にその名を轟かせた名探偵ヴァランタンが，初めて見かけたブラウン神父を次のように描写している。ヴァランタンは，汽車に乗る。彼が探している犯罪界の大立物は乗っていないか見回してみると，

……それに，これもエセックスの一寒村から上京するきわめてちびなローマ・カトリックの神父さんが一人といったところだった。この最後の人物にいたっては，ヴァランタンもすっかりさじを投げ，あやうく吹きだすところだった。この小男の神父さんは，東部地方の鈍物のまぎれもなき典型で，その顔は，ノーフォークの団子そっくりにまんまるで，間が抜けており，眼は北海のごとくにうつろで，持ち物である幾つかの茶色の紙包みをまとめておくこともできぬ御仁だった。まるで穴から追い出されたもぐら同然の，こんな世間知らずのまごつき屋が大勢あちこちの沈滞しきった田舎から聖体大会に吸収されているにちがいないのである。[*8]

これが実は，名探偵ヴァランタンを驚嘆させ，後に彼を追い詰める本物の名探偵，ブラウン神父である。ホームズ，ライトマン博士，ボーンズは，その雰囲気がとにかく「恰好良い」のに対して，ブラウン神父は「間抜けっぽくて恰好悪い」。この対照性は，チェスタトンの意図するところであった。チェスタトンには，ブラウン神父シリーズ以外にも，『奇商クラブ』や『ポンド氏の逆説』などの探偵小説がある。このチェスタトンの探偵小説グループについて，高山宏氏の『殺す・集める・読む　推理小説特殊講義』には次のような指摘がある。

それはコナン・ドイルのシャーロック・ホームズ・シリーズの半分ほどと時期を同じくするグループであって，しかも後から来たものの特権としてホームズについての皮肉いっぱいのメタ批評をたっぷり含み，ドイルの限界を越えようとした「やぶれさる探偵」（ステファーノ・ターニ）の試みである。ブラウン神父にしてもポンド氏にしても，ドイル / ホームズがついに越えられなかったところを越えるために造形された新しいタイプの探偵像の典型と言える。[*9]

ホームズは恰好良く，ブラウン神父は恰好悪く，ホームズは対象を客観化し科学的に分析し，ブラウン神父はそういう態度を「犯罪学が科学だというのはどういうことですか。それは人間を内側からでなく外側から吟味することです，でかい昆虫か何ぞのように。……そういうことをいくらやっても，罪を犯す人間の正体は遠のくいっぽう，ついには先史時代の怪獣のようなものになってしまう。[*10]」と批判する。

ブラウン神父は，犯人を特定したとき，他の人たちに気づかれないように，その犯人に罪を告白する手紙を書く時間を稼いでやったりする。探偵小説・ミステリーでは，犯人が逮捕されて一話が完結するのが常識だろうが，ブラウン神父は犯人を逃し，逃げた犯人が

後に神父と行動を共にする私立探偵になることもある。

罪は罪だが，犯人の言い分にも思いをめぐらすと，いつもいつも「悪人をまた一人捕まえて，今回もめでたしめでたし」とばかりはいかなくなる。ブラウン神父は，犯罪が起きた状況を多義的に読むことができるのである。証言を多義的に読んで，証言者の一義的解釈を正したりもする。

『ブラウン神父の不信』に収録されている「犬のお告げ」は，証言者が現実の認識を誤っていたことから犯人探しが暗礁に乗り上げる。それをブラウン神父は現場に足を運ぶこともせずに解決する。ブラウン神父には，他の現象をすべて考慮に入れてつなげると，殺人現場と証言者たちが通った道が実際はごく近かったことを言い当てる。証言一つとっても，複雑な要素が絡まりあっていることが分かる。証言者は無意識に嘘を言っていないか，記憶違いがないか，今みたような，現場の位置関係に思い込みがないか，などなど，疑いだしたらきりがない。このような「読み」の多義性，危うさ，いかがわしさとは，同じものが，見る立場，視点，視覚によっていろいろ別のものに見えてくるといった類の問題で，現象学の領域に踏み込んだ問題となる。[*11]

本来，言葉をはじめとする記号は，多義的なものである。人為的に定められた交通標識や暗号は別として，記号とその意味するものが一対一の固定化した対応関係を維持し続けることはむしろ稀である。

このような言葉の多義性を排除して，言葉と意味を一対一対応にしようとする態度がある。それは，同じ言葉を聞いたとき，人によって解釈の相違があることを嫌悪し，言葉を極めて合理的・論理的なものにしようとする態度である。具体的には，『英仏普遍言語計画―デカルト，ライプニッツにはじまる』に示されているような，人工言語を創造し普及しようという動きである。 17世紀の英国で見られた普遍言語運動は，1660年に創設された王立協会（the Royal Society of London）の創立メンバーであるジョン・ウィルキンズによって推進された。[*12] 普遍言語そのものは定着しなかったが，ウィルキンズには王立協会の後ろ盾があったために，ライプニッツら比べれば運動を盛り上げることができたのである。

本稿で取り上げている探偵たちも，上の二つの態度どちらを取るかで，分類することができる。事象の読み方にあいまいさがなく，常に明快な推理をして犯人を特定するホームズは，記号と解釈を一対一で結びつけるという点では，論理的・一義的言語世界の存在である。ホームズやライトマン博士やボーンズには，多面的な現実という現象学が入り込む余地は大きくない。証拠や証言は過不足なく提示され，それをうまく一直線につなげれば犯罪解決に行き着く，という構成になっている。同じものでも，見る位置，視点，先入観などが違えば違ったように見えるという前提をまず押し出せば，「すべてを読み解く絶対的な脳」など存在しないことになる。

ブラウン神父は多義性をまとった探偵に分類できる。恰好悪いけれど，推理はお見事。なぜそんなに悪事に通じているかといえば，カトリックの神父であるから，悪人の懺悔をさんざん聞いているからである。「神父だから悪事に明るい」のがブラウン神父なのだ。その存在そのものが逆説的で多義的で面白い。

7．一義的に読んで命を落とす探偵

言葉を一義的に読んだばかりに命を落とす探偵がいる。ヒッチコック監督の映画『サイコ』に登場する私立探偵，アーボガストである。『サイコ』のストーリーをたどってみよう。

マリオンという女性が借金を背負った恋人のために，会社のお金を持ち逃げする。ノーマンという若い男性が経営するモーテルに宿泊し，ノーマンの母親とおぼしき人物に殺害される。マリオンの会社から連絡を受けた姉のライラは，探偵アーボガストにマリオンの捜索を依頼する。アーボガストはノーマンのモーテルに辿り着き，ノーマンの話に不信を抱く。アーボガストは公衆電話でライラにノーマンとノーマンの病気の母親のことを告げ，「母親が何か知っているかもしれない，戻って母親の話を聞く」と言って電話を切る。その後ライラにアーボガストから連絡が来ない。ライラとマリオンの恋人はアーボガストの身を案じ，ノーマンのモーテルを訪ねていく。

さて，ここで問題にしたいのは，アーボガストが不用意にノーマンの家に上がりこんでノーマンの母親らしき人物に殺されるという点である。アーボガストはノーマンから，「家には自分と『病気の母親』しかいない」と聞いている。ノーマンが言う「病気の母親」とは，実は，「（精神を）病んだ（ノーマン自身が変装した）母親」なのである。しかし，アーボガストは，ノーマンの様子にもモーテルとノーマンの自宅にも何か怪しげなものを感じていながら，「病気の母親」と

いう言葉を，「身体が病んで弱くなっている母親」と一義的に解釈したのである。だから，見ず知らずの人間が家に無断で入り込んだからといって，咎められたり暴力的に騒がれたりする可能性はないだろう，と踏んだのである。その結果は，『ヒッチコック×ジジェク』の中の論文，「あの人の蔑むようなまなざしの中に，私の破滅が書かれているのが見える」で論じられている，殺人の予感を与えるように撮られたアーボガストの家への侵入と殺人のシーンである。

……そして数秒後，アーボガストが階段をのぼっていく間に，二階のドアの隙間がクローズアップで映り，われわれの予感はさらに確証される。その後に，有名な頭上からのショットが続き，まるで観客に心の準備をさせるかのように，場面全体の明確な――いわば幾何学的な――平面図が与えられる。そして『母』のような人物があらわれ，アーボガストを刺し殺す。この殺人場面の教訓は，われわれは予期したことがそっくり実現されるのを目撃したときには，どんなに激しいショックにも耐えられるということである。[*13]

頭上からのショットが続き，アーボガストの行動をずっと俯瞰している視聴者は，次第に「病気の母親」を多義的に捕らえなおすようになっていく。何か不気味な存在が待ち構えてることが予感できるからである。しかし，アーボガストには，殺される瞬間まで，「病気の母親」は一義的に読まれたままなのである。

G. K. チェスタトンのパラドキシカルな言説に満ちたポンド氏ならば，「相手が病気の母親だったので，探偵は簡単に殺された」と叙述するところだろう。ポンド氏もブラウン神父同様，多義性の探偵に分類できる。

一方，アーボガストが帰ってこないことに嫌な予感を持ったライラは，自分もノーマンのモーテルに乗り込んでいくことにする。マリオンの恋人に向かって，「相手は病気の母親よ。私一人で扱えるわ」と強がってみせるが，恐怖の表情が容易に読み取れる。事態が深刻化していくにつれて，ライラは「病気の母親」にアーボガストが読んだ以上の意味を持たせていたのである。

『サイコ』は動機がよくわからない殺人を描いた代表例でもある。母親の衣装を着けたノーマンが警察に逮捕され，彼／彼女の話を精神分析医が解釈してみせるが，それこそ，一義的な読解に過ぎないのだ。ヒッチコック監督は，一応納まるように説明を与えておいたが，それでも疑いは残るだろ，後は視聴者が考えてくれ，と問題提起する形で作品を終わらせている。

ホームズシリーズやボーンズシリーズなどでは，現象の読み方こそ探偵の腕の見せ所であり，犯罪の動機自体は，財産とか嫉妬とか怨恨とか，比較的わかりやすい場合が多い。それとは対照的に，『サイコ』は動機こそ一番の謎であり，解かれるべきものであるのに，「やぶれさる探偵」の系譜のように，解ききれずに終わるのである。そして，そのような多義的な構えをもつ作品の中では，一義的に読もうとする探偵は，命を落とすのである。

8．結語に代えて，「ミステリー」の「神秘」について

私たちは確かに，ホームズをはじめとする「すべてを読み解く絶対的な脳」を持った探偵を求めている。そういう探偵は，日常の鬱々とした気分をすっきりさせてくれるから。しかし，現実には動機のよく分からない犯罪があり，それは不気味で，人々を恐れさせ，不安がらせる。動機が解明されなければ，同じような犯罪は防ぎようもない。人間の精神に何が起こっているのか。

遠藤周作氏の『真昼の悪魔』では，犯罪を犯している女医が神父に相談する場面がある。神父が，悪魔は目に見えない埃のようなものだ，と語ったことについて尋ねたいというのだ。

「ではその埃のたまった心の持主はどうなるのでしょうか」
「どうなると，おっしゃると」
神父は女医の質問がよく理解できなかったらしく，首をかしげた。
「悪魔という目立たぬ埃がいつの間にか溜まった人間はどこでわかるのでしょうか」
「それははっきりとわかります。例えばその人間は神はもちろん人を愛する気持ちも失うからです」
「人を愛する？」
「人を愛する気持ちがなくなるからです。人を愛さぬものは神を愛しません。それから……」
「それから」
「人を愛する気持ちを失いますから，何事にも無感動になります。自分の罪に対しても」[*14]

神父は，動機のよく分からない犯罪を説明する言葉を持っている。多くの現代人にとっては，その説明を全面的に受け入れることは難しい。しかし，「人を愛する気持ちを失う」とか，「何事にも無感動になる」といった部分は，納得できる部分がある。過去に世間を騒がせた無差別通り魔殺人事件の犯人たちは，捕えられてその顔がテレビに映し出されると，ほとんどの場合，無感動の顔，つまり表情のない顔をしている。心の中で何を考えているのかわからない。その謎が不気味だ。

ミステリーmysteryという言葉は*OED*ではまず大きく二つに分類されている。神学的な意味と，非神学的な意味である。「ミステリー，推理もの，謎解き」などは，非神学的な場合。神学的な場合は，*OED*の冒頭の説明のみを抜き出すと，「宗教的秘儀（最も有名なのは，エレウシスでデーメーテールが行ったもの）のこと。秘儀を伝授された者だけが立ち会うことが許された。それらの者は秘儀がいかなるものかを決して口外しないことを神に誓うことを求められた」とある。宗教的秘儀は，普通の人間は立ち会えない，その内容は外部の者に一切もらされない，という点で，巧妙に隠されたものである。巧妙に隠されたものの覆いを取って明るみに出すのがdetectであったのだが，ホームズタイプの探偵detectiveは，宗教的秘儀を明るみに出すような神秘的なことはしない。

高山宏氏が「ミステリー」という語に言及している部分を引いて，現代の私たちが探偵小説に求めているものではなく，求めていくべきものを探るヒントとしたい。

自らの身体を通して世界とつながる感覚はかつて大文字で「神秘（ミステリウム）」と称された。それが一人の探偵 / 読者が解くべきただの「謎（ミステリー）」と堕していく経過が克明にたどれる推理（ミステリー）小説こそ〈近代〉人の魂の遍歴史なのである。逆に「謎」との繋がりを残している聖職者が同時に探偵でもあるという物語が連綿として絶えることがないというのも，なにやらその辺の事情と関係がありそうで，興味尽きない。[*15]

ブラウン神父にしろ，『真昼の悪魔』の神父にしろ，悪とは常につきあっている。人々の懺悔を聞くからだ。その歴史が，西洋社会での精神分析学の発展へとつながっていく。愛と悪の両方を人間の中に見つけ，人間の多面性を日常的に見ている神父が探偵役を担ったとき，言葉や記号を多義的に読むのは彼らの職業柄でもあるのだ。さらに彼らは，神を信じ，神秘に繋がっているのである。

人を愛する気持ちを失いそうになったり，何事にも無感動になりそうになったら，感動を取り戻す，人を愛する気持ちを取り戻す必要がある。それは，この世界の中で，自分は他の存在と繋がって，関わって生きているという実感を持つことでもある。そういえば，detectには「…の存在を感知する」という意味もある。ひょっとしたら，現代を生きる私たちが求めるべき探偵は，現代人が「自分は世界と繋がっている」と実感したいときに道を示してくれる探偵なのかもしれない。豊穣の女神，デーメーテールがエレウシスにとこしえの実りを約束するために行い，エレウシスの王妃や王女に伝授した秘儀はどんなものだったのか，そのような生の神秘の存在を感知し（detect）てくれる探偵（detective）なのかもしれない。

註

＊1　ホームズシリーズは，第一作『緋色の研究』（1887年），第二作『四つの署名』（1890年）と発表されたが，すぐに多くの読者を得たわけではなかった。第三作の『ボヘミアの醜聞』（1891年）が『ストランド誌』に掲載されてから，人気が出るようになる。それ以降もホームズシリーズは『ストランド誌』で連載され，熱狂的な支持を獲得していく。

＊2　2011年12月3日の朝日新聞be on Saturdayの「フロントランナー」の欄で，ミステリー作家，東川篤哉氏が取り上げられている。タイトルは「ユーモアで創る『探偵の時代』」となっていて，記事の第一段落は「キャラクターの際だつ『探偵の時代』がきている。小説に要介護探偵，アニメにニート探偵，テレビドラマに専業主婦探偵……。今年は探偵たちが続けて登場した。そんな流行の火付け役が，小説『謎解きはディナーのあとで』の毒舌の執事探偵だろう。」となっている。小説でも漫画でもアニメでもテレビドラマでも，ミステリーというジャンルが欠かせなくなっている。

＊3　『超読書体験』，p.80.

＊4　『夢の分析　生成する〈私〉の根源』，p.58.

＊5　ibid. P.56.

＊6　『超読書体験』，p.58.

＊7　ライトマン博士のモデルになったポール・エクマン

教授は,『顔は口ほどに嘘をつく』に表情読み取りテストを載せている。それらの表情は，実際にドラマの中でライトマン博士が読む微細な表情とは違い，喜怒哀楽に多少のバリエーションを加えた程度のわかりやすいものである。エクマン教授は *LIE TO ME* の DVD の特典映像の中で，ライトマン博士が相手の心理を見抜くとき，確信をもっていることを指摘している。実際には，表情は，それほど一義的に読めるものではないよ，と言う見解を暗示するような言い方で。さらにエクマン教授は，製作スタッフが非常に「科学的」であることを目指していたことも印象深げに語っている。表情の読み取りなどは,「眉唾もの」と不信感を持たれかねない。テレビドラマという広く一般の人を対象に放送することが前提のジャンルでは，自然に受け入れられるように，常に「科学的」と謳わなければならなかったのだろう。

＊8　『ブラウン神父の童心』，p.11.

＊9　『殺す・集める・読む　推理小説特殊講義』，p.177.

＊10　『ブラウン神父の秘密』，p.18.

＊11　例えば，人間が見ている世界を他の生物たちはどのように見ているのか。同じ部屋でも，犬だったらこう見えている，ハエの眼にはこう写っている，と具体的に絵にして見せてくれるのが，ユクスキュルの『生物から見た世界』である。それぞれの生き物は，自らの生存に適したように外界を切り取って認知する。我々人間は，つい，自分の目に見えているもの，視覚で認識している世界が唯一の世界と思いがちだが，もし，人間よりも高度に進化した生物が地球上に生まれたら，その新生物には人間が視覚で認知できないものを認知できる可能性が高いのだ。そう考えると，現象を誰の視覚に合わせて説明するか，という言い方も可能になるだろう。

＊12　王立協会が設立される前の17世紀ヨーロッパは，30年戦争や疫病の流行などで大混乱だった。一方で，科学革命も進行していた。当時の知識人たちは，統合と秩序を求め，共通の言語，つまり普遍言語を夢見た。それを通じて，あいまい性のない厳密で正確な知識を得，それらを自由に交換し，人々の知性を増進することをも図ろうとしたのである。

＊13　『ヒッチコック×ジジェク』，p.303.

＊14　『真昼の悪魔』，pp.120, 121.

＊15　『殺す・集める・読む　推理小説特殊講義』，p.192.

引用文献

Charles Dickens, *Bleak House*, Wordsworth Editions Ltd; New Edition, London, 1997.

コリン・ウィルソン（柴田元幸監訳）『超読書体験』学研 M 文庫，2000.

川嵜克哲『夢の分析　生成する〈私〉の根源』講談社選書メチエ，2005年 .

ポール・エクマン（菅靖彦訳）『顔は口ほどに嘘をつく』河出書房新社 , 2006.

G. K. チェスタトン（中村保男訳）『ブラウン神父の童心』創元推理文庫，1982.

高山宏『殺す・集める・読む　推理小説特殊講義』東京創元社，2002.

G. K. チェスタトン（中村保男訳）『ブラウン神父の秘密』創元推理文庫，1982.

ユクスキュル，クサート（日高敏隆・羽田節子訳）『生物から見た世界』岩波文庫，2005.

ジェイムズ　ノウルソン（浜口稔訳）『英仏普遍言語計画―デカルト，ライプニッツにはじまる』工作舎，1993.

スラヴォイ・ジジェク編（鈴木晶，内田樹訳）『ヒッチコック×ジジェク』河出書房新社，2005.

遠藤周作『真昼の悪魔』新潮文庫，1984.

（2011年12月13日　受理）

国武大紀要 (Int. Budo Univ. Journ.)
第27号：55－61（2011）

資　料

高校生に対する剣道の意識調査
―若潮杯争奪武道大会（剣道の部）を対象に―

岩切公治

Survey on Kendo Among High-School Students
―at the Wakashio Budo Cup (Category of Kendo)―

Kimiharu IWAKIRI

Abstract

I surveyed the high-school students with top level Kendo histories who had participated in the Wakashio Budo Cup about their opinions on Kendo.

The result shows that the students view Kendo in two ways: one is as a sport and the other is as Budo. Now high-school students are thought to be more likely to view Kendo as a sport. And it is considered that less experienced students tend to view Kendo as a sport, while the students with more years of experience come to regard Kendo as Budo.

The fact remains that some negative answers are seen in the survey although it shows more positive responses. So the challenge will now be to examine and analyze each factor respectively in the negative answers.

キーワード：剣道　高校生　意識調査

Ⅰ．はじめに

国際武道大学では，毎年12月26日・27日の２日間にわたり，若潮杯争奪武道大会を開催している。

この大会は武道の普及・振興のために，日本武道館と共催で開催されているものであり，全国の高校生を対象とし，１日目は剣道の部，２日目は柔道の部・なぎなたの部が行われている。

１日目の剣道の部に出場しているのは，全国高校選抜大会や全国高校総体に出場している，全国トップレベルの競技実績を有する高等学校である。

今回は大会が行われている３種目のうち，剣道の部に出場した高等学校の高校生を対象に剣道に対する実態について意識調査を行った。

剣道の意識調査[2)3)4)5)6)7)8)9)]については数多く挙げられるが，高校生を対象として，剣道をどう捉えるかを全国規模で調査したものでは，全国教育系大学剣道連盟研究部会が行ったものが挙げられる[1)]。

しかし，その調査が行われたのが1993年であり，十数年前のことである。

そこで今回は，若潮杯争奪武道大会に出場した，全国トップレベルの剣道競技力を有する高校生を対象とし，剣道をどのように捉えているのか意識調査行い，基礎的資料を得ることを目的とした。

この調査を行うことにより，現在の高校生の現状を把握することはもちろんであるが，過去の調査と比較検討し，現在の剣道の問題点を探ることが出来ると考える。またそれを踏まえることが，今後大学での剣道

指導法等々の再考にもつながると考えられる。

Ⅱ．研究方法

若潮杯争奪武道大会（剣道の部）に出場した，全国トップクラスの高校生に対して，剣道の実態について意識調査を行った。

1．調査項目
（1）身長・体重・段位
（2）1週間の稽古日数
（3）1日の稽古時間
（4）剣道開始年齢
（5）剣道を始めた動機
（6）経験年数
（7）高校進学の動機
（8）剣道について

（8）については，「まったくそう思わない～とてもそう思う」の6者択一形式（これらは間隔尺度で構成されたものである）で回答してもらう調査用紙を作成。

尚，「まったくそう思わない・そう思わない・あまりそう思わない」を「思わない」と否定的回答とし，「ややそう思う・そう思う・とてもそう思う」については肯定的回答とし「思う」とした。

2．調査対象
若潮杯争奪武道大会（剣道の部）に出場した高等学校の高校生，1年生から2年生。
280名（男子164名・女子116名）

3．調査時期
2007年12月

4．分析方法
調査の集計処理は，今回は一般的傾向をみるために単純集計及びクロス集計を用いて分析を行った。

Ⅲ．結　果

1．身長・体重・段位については，表1の通りであり，身長については男女ともに30cm，体重については男子が50kg，女子は30kg近い差があった。

また取得段位については，二段取得が全体の74.6%と高い数値を示している。

表1

全体	身長(cm)	体重(kg)	段位	人数
min	148	43	初段	9人
max	190	98	二段	209人
ave	166.6	61.59	三段	63人
男子	身長(cm)	体重(kg)	段位	人数
min	157	50	初段	1人
max	190	98	二段	126人
ave	171.1	66.2	三段	36人
女子	身長(cm)	体重(kg)	段位	人数
min	148	43	初段	6人
max	179	73	二段	83人
ave	159.8	54.6	三段	27人

2．1週間の稽古日数について（図1）

稽古日数は5日から7日であり，全体平均は6.84日であった。また最少が5日で3.2%と最も少なく，最長は7日で84.9%という結果であった。男女間では，男子が7日86.6%で女子は82.6%であった。

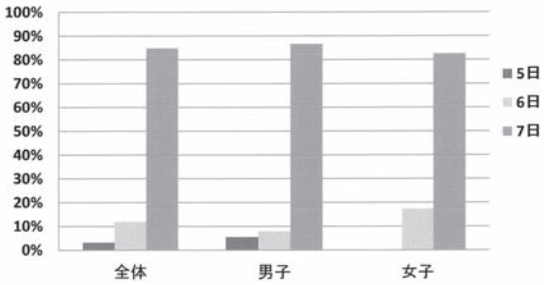


図1　1週間の稽古日数

3．1日の稽古時間について（図2）

全体でみると，最短が2時間で8.9%であり，最長は4時間30分で0.7%であった。最も多かったのは，3時間で51.5%であり，次いで2時間30分の27.9%で

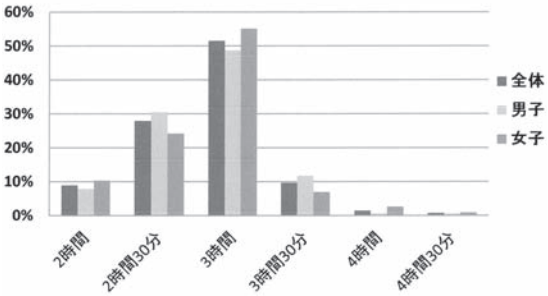


図2　1日の稽古時間

あった。全体平均は2.84時間であり，男子については2.8時間であり，女子は2.2時間であった。

４．剣道開始年齢について（図３）

最も早く開始した年齢は，男女ともに３歳であり，最も遅く開始した者についても男女ともに14歳であった。平均は全体で7.7歳であり，男子7.4歳・女子8.1歳であった。最も多くが開始した年齢については，６歳が20.7％で，次いで７歳の17.8％であった。男女間でも同じで，６歳に開始した男子は21％で，女子は20.7％であった。女子については12歳から13歳に開始した者が17.2％の数値を示している。

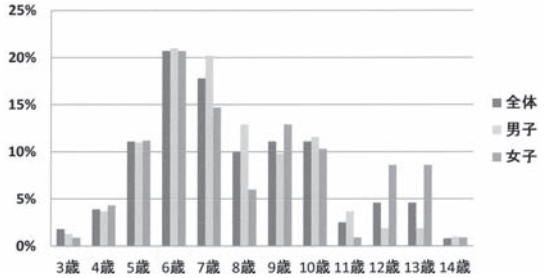


図３　剣道開始年齢

５．剣道を始めた動機について（図４）

複数回答ではあるが，全体では親の勧めが最も多く25.2％であり，次に兄弟がやっていたが23.4％，自分で決めたが23.1％の順であった。

男子では１位が親の進め26.9％，２位が自分で決めた23.7％であった。女子では１位兄弟がやっている30.0％であり，２位が親の進め23.4％の順であった。

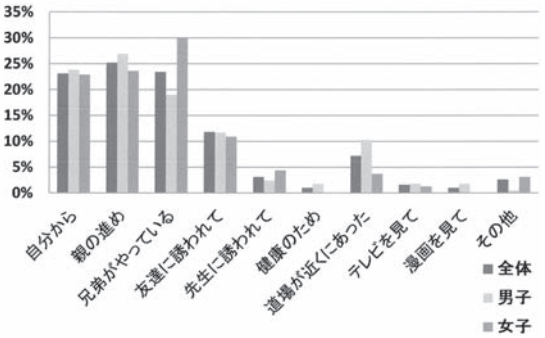


図４　剣道を始めた動機

６．剣道経験年数については（図５）

10年が最も多く，20.7％であり，次いで11年の14.6％であった。男女ともに同じ結果であり，１位が10年で，２位が11年であった。経験年数の平均は全体で8.81歳であり，男子は9.11歳で女子が8.48歳であった。

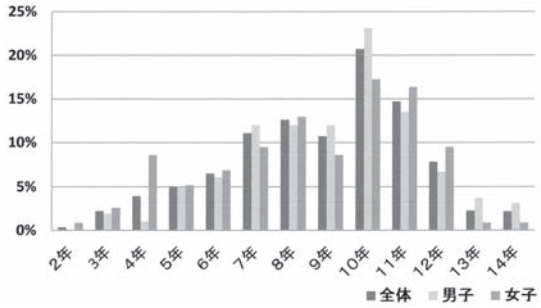


図５　剣道経験年数

７．高校進学の動機について（図６・図７）

全体では，１位が自分で決めた32.4％と最も多く，次いで剣道が強い14.3％，良い指導者がいる10.9％であった。男女間，あるいは経験年数から見ても同じ回答であったが，女子の場合は，良い指導者がいると良い先輩がいるがともに３位で9.7％であった。

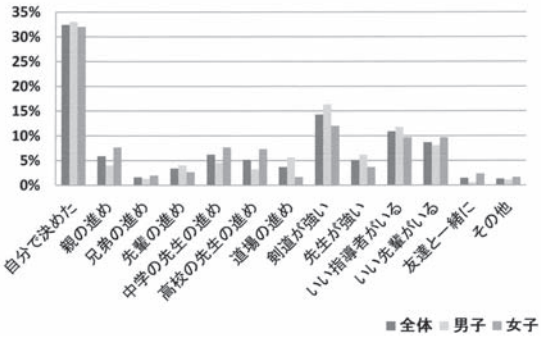


図６　高校進学の動機

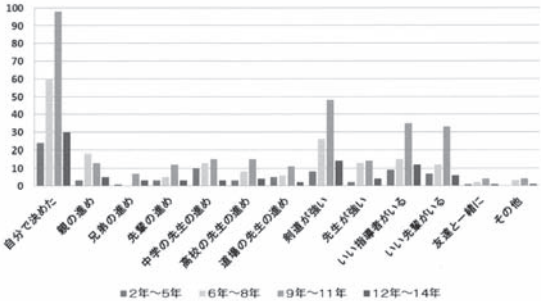


図７　経験年数と高校進学の動機

８．剣道について

（１）剣道はおもしろい（図８）

はじめに剣道はおもしろいですかと質問をしたとこ

ろ，全体の84.6%がおもしろいと肯定的回答であり，男子は84.1%，女子では85.4%が肯定的回答であった。

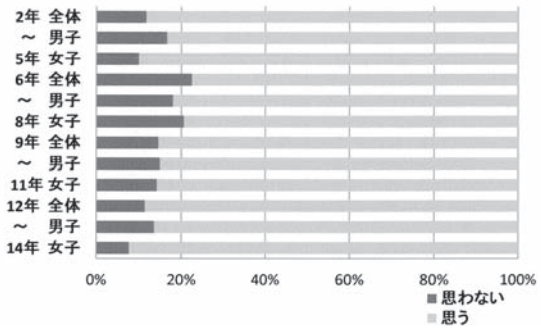


図８　剣道はおもしろい

（２）剣道は厳しい（図９）

次に剣道は厳しいですかの質問に対して97.9%が厳しいと肯定的回答をした。男子については98.2%であり，女子については97.4%であった。

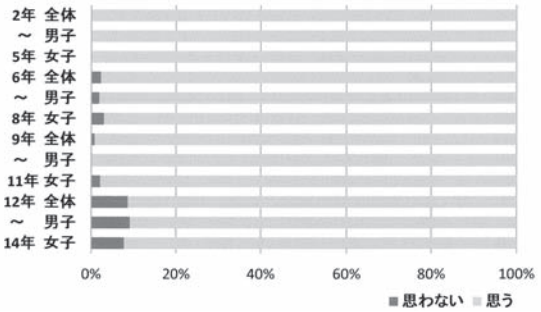


図９　剣道は厳しい

（３）剣道は生涯を通して出来る（図10）

剣道は生涯を通してできるかと質問したところ，出来ると肯定的回答したものが，全体では91.9%であり，男子では95.8%，女子では91.9%であった。

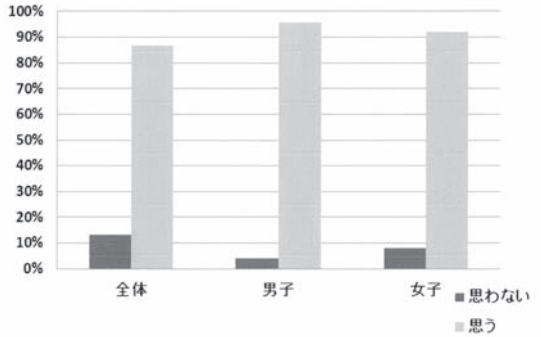


図10　剣道は生涯を通してできる

（４）老若男女でできる（図11）

老若男女でできるかの質問に対しては，全体では96.8%ができると回答し，男子では96.9%であり，女子では96.6%であった。

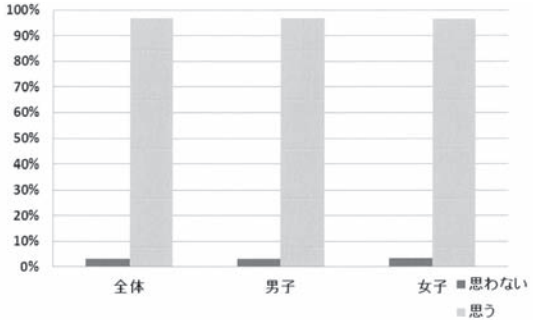


図11　剣道は老若男女で出来る

（５）剣道は人間形成につながる（図12）

剣道は人間形成につながるかについては，全体では97.1%がつながると肯定的回答であった。男子については97.6%であり，女子については96.7%という結果であった。

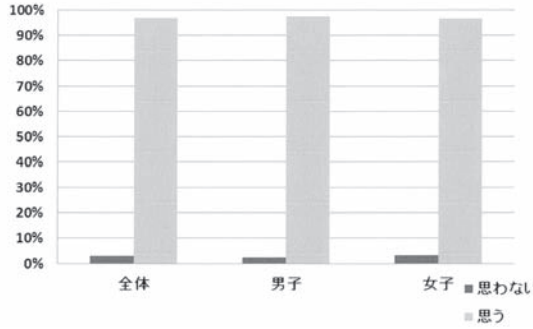


図12　剣道は人間形成につながる

（６）剣道は武道である（図13）

次に剣道は武道であると質問をしたところ，全体で

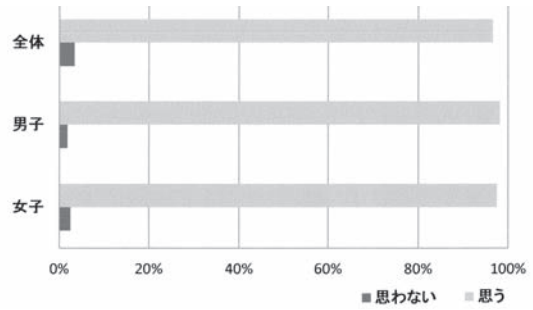


図13　剣道は武道である

は97.5％，男子では98.2％，女子では96.6％が武道であると回答をした。

また，経験年数別（図14）に結果をみたところ，２年から５年では全体の91.2％が武道であると回答し，男子では100％・女子では85.0％であった。次に６年から８年では，全体で97.7％・男子97.5％・女子97.1％であった。９年から11年では全体98.5％・男子97.5％・女子100％であった。最後に12年から14年については，全体・男子・女子ともに100％が武道であると回答している。

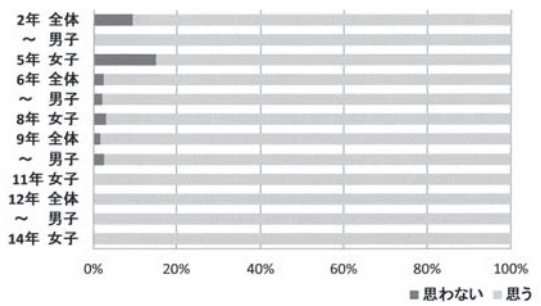


図14　剣道は武道である

（７）剣道はスポーツである（図15）

剣道はスポーツであると質問をしたところ，全体の58.2％がスポーツであると回答し，男子では53.7％，女子では62.9％であった。

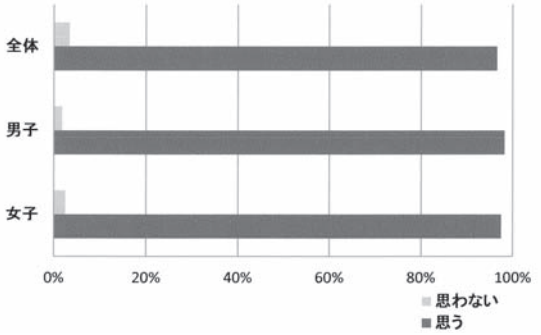


図15　剣道はスポーツである

また，経験年数別（図16）に剣道はスポーツであるについて比較してみると，経験年数が２年から５年においては，全体で73.5％がスポーツであると回答し，男子で66.7％，女子では75.0％であった。次に経験年数６年から８年においては，スポーツであると回答が，全体で64.0％であり，男子54.0％，女子76.5％であった。次に９年から11年に関して見てみると，全体の53.8％がスポーツであると回答し，男子では53.8％，女子では53.1％であった。最後に経験年数が12年から14年においては，スポーツであるとの回答が45.7％であり，男子で45.5％，女子で46.2％という結果であった。

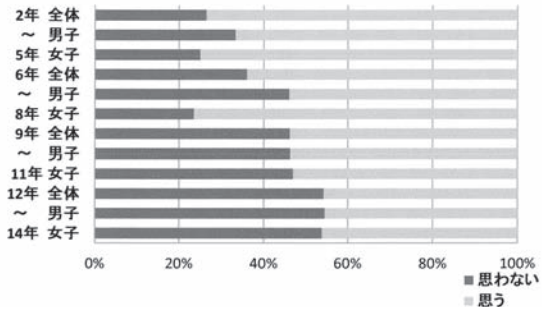


図16　剣道はスポーツである

Ⅳ　考　察

これまでの剣道の実態に対する意識調査の結果から，次のことが考えられる。

剣道の開始年齢は，６歳から７歳に開始した者が，全体の38.6％と最も多かった。このことから剣道を始める時期としては，小学校１～２年生に開始する者が多いことがうかがえる。また女子については，全体の17.2％が12歳から13歳から始めることから，中学校の部活動から開始しているものと考えられる。

次に剣道を始めた動機については，本人の意思もあるが，始めるきっかけは，親・兄弟など他者からの影響も強いことがうかがえる。

また親の勧めが多いことに関して，私自身が少年剣道指導に携わっている立場から考えると，剣道に対して期待していることは，礼儀作法や挨拶などの「躾教育」にあるように思われる。しかし「躾教育」以外にも，剣道に対して現在の親が何を求めているか，明確にする必要があると考える。

高校進学の動機については，最終的には自分で決めるものの，剣道が強い・先生が強い・いい先輩がいる等の数値が高いことから，他者からの影響が強いことがうかがえる。

また，高校進学については，小学校から中学校のように義務教育でそのまま進学するのではなく，部活動も進路決定の一要因になっていることがうかがえる。

次に剣道はおもしろいですかの質問に対しては，全体の84.6％が思うと肯定的回答であったが，15.4％が

否定的回答をしている。また剣道は厳しいですかの問いに対しても，97.9％が思うと回答している。

全国トップレベルの競技力を有する高校生の中に，おもしろくないと否定的回答が２割弱いることや，厳しいと感じているものが多くいることは，今後の剣道指導の課題になると考えられる。なぜなら，剣道離れや途中リタイヤの一因になっているとも考えられるからである。

今回の結果を受けて，おもしろくない，あるいは厳しいととらえられる要因が何なのかを再調査する必要があると考えている。

次に剣道は生涯出来る・老若男女ができると質問した。これら剣道の特性については，「剣道は，競技年齢が高まっても楽しく続けることが出来る。…他の競技と比較してみるとき，老いも若きも男も女も同じ競技規則でこれほど長く続けられるものはない。剣道を成り立たせている要素を心技体と考えるとき，体力の低下を技法・心法で補うことが可能であるからこそこの特性が生まれてくる。これは，剣道のもつ最も優れた特性であろう。」[9]
と述べられている。

この特性について高校生の多くが肯定的回答をしていることから考えれば，このことが十分に認識されていると思われる。しかし，少数ながらも思わないと否定的回答をしている者がいることは，今後の課題となるところであり，何に対して否定的なのか調査する必要がある。

また，剣道は人間形成につながるかの質問に対してであるが，全日本剣道連盟は剣道の目標として，「剣道の理念」―「剣道は剣の理法の修錬による人間形成の道である」[10] と掲げている。

これが剣道修錬するものの目標として求められるものであるが，全体で97.6％が思うと肯定していることから，高校生の中では十分認識されていると考えられる。

次に剣道は武道である，また剣道はスポーツであるの質問について，全国レベルの大会に出場する高校生全体の97.5％が，武道であると肯定しつつも，58.2％がスポーツであると回答している。

このことから高校生の中では，武道とスポーツの認識が混在していると考えられる。これについて，

『日本語の文法的には，（１）「剣道はスポーツの一種である。」に肯定的に答えたならば，（２）「剣道はスポーツではなく，日本独特の武道である。」は否定的に答えるべきである。…中略…このことは回答者の矛盾ではなく，現在行っている剣道の中にスポーツとしての考え方と武道としての主張がともに存在を認められていると判断しなければならない。』[11]
とあるが，今回の調査でも同様の結果であった。また，男子より女子の方がスポーツとして捉える傾向にあるという結果についても同様であった。

次に剣道は武道である・スポーツであるを経験年数別に比較してみると，経験年数が２年から５年においては，剣道は武道であると全体の91.2％が肯定しているものの，スポーツであると回答したものが73.5％いた。次に，経験年数が６年から８年においては，武道であるが97.7％で，スポーツであるは64％であった。次に経験年数が９年から11年においては，武道であるが98.5％，スポーツであるが53.8％であった。最後に経験年数が12年から14年に関しては，武道であるが100％であり，スポーツであるは45.7％であった。

経験年数別に比較してみても，高校生の中には，剣道に対してスポーツとしての捉え方と武道として捉え方の２つが存在している。そして現在の高校生は，剣道をスポーツとして捉える傾向にあると考えられる。

ただし，経験年数が短いほど剣道をスポーツとして捉える傾向にあり，逆に経験年数が長くなると，剣道を武道として捉えるようになると考えられる。

Ⅴ．おわりに

今回，若潮杯争奪武道大会に出場した，全国トップレベルの競技力を有する高校生を対象として，剣道の実態について意識調査を行った。

その結果から，高校生の剣道に対する捉え方は，スポーツとして・武道としての２つが存在している。現在の高校生は，剣道をスポーツとして捉える傾向にあると考えられる。ただし，経験年数が短いほど，剣道をスポーツとして捉える傾向にあり，逆に経験年数が長くなると，剣道を武道として捉えるようになると考えられる。

今後の課題については，剣道の意識調査を行ってきたが，それぞれの項目に対して肯定的回答が高い数値を示しているものの，否定的回答があるのも事実である。この否定的回答に対して，その要因を１つ１つ掘り下げて，分析していくことが必要である。

本学は武道指導者の養成を１つの目的とする大学でもある。剣道１つを取り上げてみても，剣道を正しく受け継ぎ，正しく伝えていける人材を育てていくこと

が重要な課題であると考える。そのためにも現在の高校生の実態をしっかりと把握した上で，指導法等々についても十分な検討が必要であると考えている。

参考・引用文献

1）全国教育系大学剣道連盟研究部会「青少年の剣道に対する意識　―高校生・大学生を対象として―」吉田印刷株式会社1993年

2）浅見裕ほか「青少年に対する意識について（1）―剣道経験の差による意識の違い―」武道学研究第27巻別冊 p17　1994年

3）草間益良夫ほか「現代青少年の剣道観についての研究」武道学研究第27巻第2号 p8～p17　1994年

4）浅見裕ほか「剣道指導者の剣道に関する意識について―剣道の価値観を中心に―」武道学研究第31巻　別冊 p54　1998年

5）木原資裕「剣道のイメージについて」武道学研究第17巻　第1号　p4～p5　1985年

6）木原資裕「剣道のイメージについて（その2）」武道学研究第20巻　第2号　p97～p98　1987年

7）全日本剣道連盟科学委員会研究調査部会「小・中学生の剣道観」全日本剣道連盟　1996年

8）浅見裕ほか「武道（剣道）の普及・継続に関する要因の調査研究　―少年剣道を支援する大人の意識について―」平成9年度～平成10年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究報告書　1999年

9）剣道　社会体育教本「改訂版」 全日本剣道連盟 p27 2008年

10）全日本剣道連盟「剣道三十年史」サトウ印書館　P55～p57　1982年

11）全国教育系大学剣道連盟研究部会「青少年の剣道に対する意識　―高校生・大学生を対象として―」吉田印刷株式会社 p30　1993年

（2011年12月13日　受理）

教育研究活動報告

大学教育研究プロジェクト研究成果報告書

大学教育研究プロジェクトは，本学の教育研究活動を活発化させるために2007年度から始まったが，2010年度から第二期に入った。本学の教育研究の柱となる「１．武道，２．競技力の向上，３．学校教育，４．スポーツの振興」（１．武道は研究所プロジェクトで対応）に沿った３ヵ年のもの６件と単年度の一般公募４件が研究支援委員会で審議の上，選定された。この内，最初の１件は2011年度に科学研究費補助金基盤研究（B）に採択された。2011年７月に学内プロジェクト研究発表会で研究の中間経過を発表し，研究所掲示板にポスター発表をしている。

研究報告書は研究完了年度の翌年度に本紀要に掲載することになっているので，３ヵ年のものはなく，単年度で研究完了した一般公募研究３件の報告書を掲載することにする（勝浦市との提携事業の１件は予算請求がなく，実技指導だったため，ここには掲載していない）。

2010年度大学教育研究プロジェクト一覧

No	研究課題名	分　類	研究代表者
1	スポーツ医科学サポートを通じたトレーナー育成システムの構築に関する研究	競技力の向上	山本　利春
2	学校水泳教育の位置づけに関する実態調査と将来展望	学校体育	土居陽治郎
3	幼少年のライフスタイル改善と体力向上に関わる近隣地域との共同調査介入研究	学校体育	小磯　　透
4	地域における健康・体力づくりの企画と実践・成果	スポーツの振興	谷口　有子
5	公共スポーツ施設の指定管理者制度に対応できる体育系学部教育内容の開発 ～千葉県内施設管理者企業との連携を中心に～	スポーツの振興	鈴木　知幸
6	大学教育プログラムを活用した青年海外協力隊との連携事業について	スポーツの振興	木村　寿一
7	スポーツにおける薬物乱用者に対するインターネットを用いた副作用相談（国内版，英語版）	一般公募	高橋　正人
8	体育・スポーツ系大学（学部）における初年次教育の実践を通した学士課程教育カリキュラム構築に関する研究	一般公募	松井完太郎
9	勝浦市（周辺地域も含む）におけるバレーボールの振興計画について	一般公募	徳永　文利
10	体つくり運動への応用を意図したコミュニケーション・ワークプログラムの開発とその検証	一般公募	中西　　純

授業研究報告書

大学の教育研究を活発化させるために授業研究は最重要な課題である。本年度初めてとなるが，国際スポーツ文化学科の「スポーツ文化ゼミナール」の授業報告の投稿があった。初年次教育の新しい手法を開発する試みであり，学科所属の多数の教員が関わり，学生にディベートさせるという先行的な授業である。初年次教育の充実はこれからのカリキュラム改革の柱の一つである。この授業研究の内容が活用されることを期待している。

大学教育研究プロジェクト研究成果報告書

【プロジェクト名】
体育・スポーツ系大学（学部）における初年次教育の実践を通した学士課程教育カリキュラム構築に関する研究

【プロジェクトの分類】
一般公募

【研究期間】
2010年４月～2011年３月

【プロジェクト代表者氏名・所属部局・職名】
松井完太郎・国際スポーツ文化学科・教授

【共同研究者・所属】
土居　陽治郎・国際スポーツ文化学科
木村　寿一・国際スポーツ文化学科
佐藤　正伸・国際スポーツ文化学科

【キーワード】
初年次教育　カリキュラム　学士課程教育　キャリア教育

【研究成果の概要】
本研究では、体育・スポーツ系大学（学部）における初年次教育内容や全国の大学の現状を調査し、今後の体育・スポーツ系大学（学部）カリキュラム構築の方向性についての基礎資料を得ることを目的とした。調査結果から、初年次教育の重要性は十分に視野に入れなければならないが、対象とする学生の学びたい内容とも整合性のある取り組みが必要であることが示された。体育・スポーツ系大学（学部）の場合では、初年次教育とキャリア教育との連動化は非常に重要であることが明らかとなった。

【プロジェクト予算額・執行額】

	予算額	執行額
2010年度	456,900円	92,620円
合　　計	456,900円	92,620円

64　国武大紀要 (Int. Budo Univ. Journ.)
第27号：64－68（2011）

大学教育研究プロジェクト研究成果報告書

体育・スポーツ系大学（学部）における初年次教育の実践を通した学士課程教育カリキュラム構築に関する研究

松井完太郎，土居陽治郎，木村寿一，佐藤正伸

A Research on Practice-based Faculty Curriculum for the First-year Experience of a Department of Physical Education

Kantaro MATSUI，Youjirou DOI，Toshikazu KIMURA and Masanobu SATOH

1　はじめに

現在，社会の大学教育改革路線（例えば，中教審答申学士課程教育の再構築など）と同調するように，多くの体育・スポーツ系大学（学部）における教養教育や大学１年生向けのいわゆる「初年次教育」への傾斜が顕著になってきている。専門領域の充実や多様性よりも，学士レベルの汎用な共通性が重要視されてきた現われでもある。本研究では，そうした体育・スポーツ系大学（学部）における初年次教育内容に注目し，高校までの教育内容と体育学を基盤とする学士課程教育との接続についての検討および試行的な教育実践を通し，今後の体育・スポーツ系大学（学部）カリキュラム構築の方向性についての基礎資料を得ることを目的とした。

また，本研究に先行して取り組んでいる国際武道大学（以後，本学という）における初年次教育充実化[1]のための開発や先行事例の積み上げも平行して，研究目的として扱った。

2　方法

2.1　大学教育調査

基本的にはつぎの２つの方法で調査や資料を入手した。

- 全国体育大学協議会（以後，体大協とする）に加盟している主要大学の初年次教育への取り組み状況を書く大学のシラバスや大学案内などをもとに調査するとともに，いくつかの大学関係者からの聞き取り調査を行った。
- 2009年度に，全国の国公私立大学の全学部を対象に初年次教育調査を実施した河合塾の調査結果報告[2]などの文献調査を行った。

2.2　本学での初年次教育内容の充実化

先行研究[1]で紹介した内容の充実化のための環境整備としては，大学版 NIE（Newspaper In Education）教材の開発であったが，それ以外の充実化に向けた可能性開拓として，初年次教育を導入している国際スポーツ文化学科学生たちへのアンケート調査を実施した。

3　結果と考察

3.1　初年次教育の実態について

2010年度の体大協に加盟している主要大学の初年次教育への取り組み状況について，表１に示した。初年次教育への取り組みはごく最近のことであり，カリキュラムに位置づけての実施となると，大学においてはある程度の組織対応（カリキュラム変更等）を経なければならないことから，学部教育単位で導入している大学が半数を占めていることは比較的この問題に対しては敏感に作用していることがうかがえる。

表１　全国体育大学協議会加盟主要大学の初年次教育への取り組み状況

大学名	学部名	学科名	初年次教育科目名	備考
仙台大学	体育学部		導入演習	
国士舘大学	体育学部			他学部には有
順天堂大学	スポーツ健康科学部			
国際武道大学	体育学部	国際スポーツ文化学科	国際スポーツ文化入門	
			スポーツ文化ゼミナール	
日本体育大学	体育学部		基礎教養ゼミナール（自校史･スタディースキルを含む）	
			海浜実習（フレッシュマン教育）	
日本女子体育大学	体育学部		教養演習	
			女性と仕事	
東京女子体育大学	体育学部			
早稲田大学	スポーツ科学部		スポーツ教養演習	
東海大学	体育学部	体育学科	保健理論の基礎	競技スポーツ学科にはなし
			体育理論の基礎	
			体育・スポーツの見方	
		武道学科	プレゼミナール	
		スポーツ・レジャーマネジメント学科	マネジメントゼミナールⅠ	
桐蔭横浜大学	スポーツ健康政策学部			
中京大学	体育学部			
天理大学	体育学部		基礎ゼミナール	全学部共通
中京女子大学	健康科学部			
びわこ成蹊スポーツ大学	スポーツ学部		フレッシュマンキャンプ	
大阪体育大学	体育学部			
福岡大学	スポーツ科学部		フレッシュマンセミナーⅠ	
			フレッシュマンセミナーⅡ	

体育・スポーツ系大学（学部）において，比較的早期にこうした初年次教育に着手したのが日本女子体育大学である。1999年度に短大を廃止する大学改組を展開する際に，それまでの専門教育重視路線からの転換を図り，幅広い教養教育の充実と合わせてキャリア支援体制の強化策を講じたが，その一環で初年次教育の導入を図っている。「教養演習」という初年次科目は必修科目で，全教員による個別ゼミナール方式での授業を展開しており，大学での学習意義や基礎的学力向上などを狙いにしている。そのほか，初年次教育の位置づけで，「女性と仕事」といったキャリア教育も必修化するなど，現時点で多くの大学が取り組み始めた教育内容を先取りした形で実施しているのが特徴である（表２）。

日本女子体育大学の場合，大学改組という大学組織にとって大きなハードルが大学教育改革への本格的取り組みにつながったのは言うまでもない。その結果，キャリア支援体制も体大協の他大学に比べて非常に充実しており，現在でもマスコミ含め，社会の各方面からの取材も多い。体大協加盟の各大学の就職担当者たちからも一目置かれた立場であることには変わりがない。筆者らも当該大学キャリアセンター事務長（安田伊佐男氏）を取材したが，「キャリアセンターとしての様々な取り組みを可能にしているのも，大学カリキ

表２　日本女子体育大学における教養科目

教養科目群				
必須科目	選択科目			
日本国憲法	基礎ドイツ語	英語 EAP	社会のしくみとキャリア形成	英語 EPP
国語表現	基礎ドイツ語	英語 EGC	西洋音楽	コンピュータ実践演習
英語	世界の民族音楽	応用ドイツ語	フランス語入門	カウンセリング論
英語表現	日常生活の社会学	現代の倫理	中国語入門	スポーツとドイツ語
英語	人間心理の理解	レクリエーションミュージック・合奏	ハングル入門	教養としての日本文学
英語表現	ボランティア活動論	日常生活の法律	知の哲学	ヨーロッパの文学と文化
教養演習	栄養学入門	教養としての経済学	美の理論	国際関係と政治
情報処理	生理・生化学入門	数と論理	ジェンダー論	人間生活と地球環境
女性と仕事	英語 EAP	女性と運動	データ分析と統計学	人間の観察
国語表現	英語 EGC	野外教育論	教養総合科目	メディアテクノロジー

ュラムという大学教育の一貫した方向性がその基盤にあります。それまでは履歴書の書き方などを就職課でカバーしていましたが，初年次教育の『教養演習』などでも自己紹介文を書くというテーマでそうしたことに取り組んでいたり，そこで自身の将来像について先生方と話をする機会を持っていることなど，大学が一体となっていることが重要です。」というコメントにあるように，初年次教育を展開している効果を実感していた。

この日本女子体育大学は，初年次教育やキャリア支援を充実化させるだけの教養教育の充実化をカリキュラムの中核に据えた意義は大きいものと思われる。いわば，「入口」「出口」を結びつける明確なデザインを描いたことを意味する。表２に示したような，単科の体育・スポーツ系大学としては極めて異例とも思える教養教育科目の充実が重要であることを物語っている。

その他の大学では，体育・スポーツ系大学（学部）らしく，野外実習的なものを初年次教育に位置づけているところもあり，大学の特徴をよく表している。しかしながら，全体的には単発的な位置づけでの初年次教育という状況が強く，カリキュラム全体を俯瞰しての構築というわけではないようである。

進学予備校大手の河合塾が2010年に著した『初年次教育でなぜ学生が成長するのか：全国大学調査からみえてきたこと』（東信堂）によると，初年次教育を次の３つの視点から評価している。

- 視点Ａ　学生の態度変容を促すプログラム
- 視点Ｂ　学生が一人で成長していく自律・自立化を促す取り組み
- 視点Ｃ　全学生に一定水準以上の初年次教育を担保する仕掛け

この中では，評価の高かった事例として，視点Ａの観点からは，複数の正解があるようなテーマで教員たちと一緒に考え，理解を深めていく過程で，高校までの単一的な思考過程との違いを実体験させるような取り組みがあげられている。これは2010年度に，ＮＨＫが放映して大きな話題を与えた『ハーバード白熱教室』のような対話型授業に近いものである。

視点Ｃの観点からは，初年次教育ゼミを同じ曜日・時限に設定し，終了後，毎回教員が集まって反省と次回の準備やすり合わせが展開されている大学事例が報告されている。ただし，視点Ｂの「自律・自立化促進」は遅れ気味で，教育サービスの充実を強調する大学が抱える課題であると指摘している。

この調査では，初年次教育に熱心な大学ほど学生も教員もその成果を実感し，さらなる改革にも意欲的であるとしている。また同時に，学生の態度変容を促す教育は，大学教員にとっては負担も大きく，かつそうしたスキルも容易に修得できていないことから，どの大学もその困難さを訴えていて，試行錯誤の連続であることも述べられている。しかし，そうした困難さに立ち向かっていく熱心な教員の存在そのものが学生の態度変容を促すことにつながり，そのことで教員自ら

も意識改革が進んでいるという好循環の存在を訴求している。

これらの調査結果から，現在の大学教育における初年次教育の意義やその効果の大きさについては理解することができたが，そうした環境を構築するための組織的教育改革の取り組みが不可欠であることも明らかとなった。特に，初年次教育とキャリア支援教育とは同時的な改革促進が必要である。しかし，体育・スポーツ系大学（学部）の多くは，カリキュラムの基本骨格が保健体育教員養成という位置づけであることから，カリキュラムを通じた多様なキャリア形成を志向しにくい現状をいかに改善できるかという課題が浮き彫りになった次第である。

3.2　本学での初年次教育内容の充実化

2011年度国際スポーツ文化学科１年生に対して，大学授業や教育内容として充実化を望む内容についてのアンケート調査を表３に示す。

入学直後の１年生であっても，学びたい内容で圧倒的多数から支持されているものは大学卒業後の進路選択や職業イメージであった。このことは前節でも述べたように，初年次教育とキャリア支援教育とを結合させて取り組まねばならないことを改めて痛感させられる結果を示した。また，大学卒業後の進路問題と合わせて，自身の老後のことへも比較的高い関心が寄せられているのは，現在のわが国の若者が置かれた状況を端的に表しているとも言える。ただし，こうした自分への興味関心とは対極にあるのが，社会や政治への関心の低さである。この態度を初年次教育などによって，どこまで変容させることができるのかに大学教育の浮沈がかかっているとも言える結果となった。

2011年度からは大学設置基準として，すべての大学に対し，「社会的・職業的自立に関する指導等」（キャリア教育）を大学教育の一環として実施するよう義務付けられており，本学も初年次教育の一環という形でのキャリア教育セミナーを開催した。このセミナーは，2007年度に国際スポーツ文化学科が初年次教育への先行開拓に着手した折に，当該学科でプログラム開

表３　2011年度国際スポーツ文化学科１年生が期待する大学教育内容

学びたい内容	支持率
大学卒業後の自身の進路やその可能性について	84.3%
スポーツに関連した職業やシゴトについて	82.9%
自身の競技レベル向上につながることについて	65.7%
社会に出るために習得しておくことについて	64.3%
保健体育の役割や教師としてのシゴトについて	62.9%
国内外のスポーツ選手やチームの実態について	62.9%
自分たち世代の老後のことについて	58.6%
日本のこれからのスポーツのあり方について	58.6%
お金の使い方，貯め方について	55.7%
今後，大学でどういう勉強をするといいかということについて	52.9%
地震や津波などの災害，防災について	51.4%
原子力発電や放射線被害について	51.4%
節電などのエネルギーの現状と将来について	50.0%
料理や洗濯などの日常生活のコツについて	47.1%
スポーツと社会（国際社会含む）との結びつきの実態や可能性について	45.7%
パソコンなどの機器の使い方について	45.7%
授業でのノートの取り方や勉強の方法について	38.6%
日本の政治や社会の将来について（故郷の将来像を含む）	37.1%
中東で起きている市民革命などの国際情勢について	15.7%
米国や中国などとの貿易や経済問題について	12.9%

表４　2011年度国際武道大学１年生向けのキャリア教育セミナーの受講後評価

セミナー実施後の感想（複数回答）	割合
結構，知らないことが多く，今後に役立てられそうと感じた。	83.8%
大学の通常授業が，このセミナーのようなスライド・動画が豊富だと理解が進むと感じた。	65.5%
自分の将来像を考え直すきっかけとなった。	57.4%
このセミナーの続きがあれば，参加したいと思った。	22.3%
配布された「ステップアップ」冊子は面白そうだと思った。	27.9%
「スポーツでメシを食う」というイメージがまだわかない。	13.0%
自分はスポーツと直接関係のない進路を考えているので，あまり参考にならなかった。	1.7%
スライドや話の内容が多過ぎて，ちょっと消化不良気味に感じた。	10.3%
入学して間もないのに，卒業後のことを考えるのはおかしいと感じた。	0.8%

発された内容である。この内容を全学１年生向けに改定して実施をしたが，その時の受講学生からの評価結果を表４に示す。

このセミナーでは，武道，体育・スポーツに関連した職業選択の幅は非常に広大であることを，数々の事例を動画中心に紹介し，大学での学習や活動の際のヒントになってくれることを意図したものである。事前に大学卒業後の進路も尋ねているが，その大多数は保健体育教員という，職業開拓への著しい偏りがあることから（希望する学生の割合は約８割），そうした意識の変革がこのセミナーの最大の狙いでもある。学生評価の結果からは，セミナーの趣旨が多くの学生に届いていることがうかがわれる結果を示した。しかし，「このセミナーの続きがあれば，参加したい」という希望は２割程度に留まっている事から，態度の変革を促すまでには至っていない。これはセミナーそのものが単発であることから，そのことによる動機付け不足が原因と思われる。初年次教育を先行させている他大学事例のように，こうしたキャリア教育そのものを授業科目化することによって，常に「続き」がある状態になっておくことが態度変革への近道ではないかと思われる次第である。

４　まとめ

大学教育改革によって，多くの体育・スポーツ系大学（学部）においても教養教育や大学１年生向けのいわゆる「初年次教育」への傾斜が顕著になってきている。本研究では，そうした体育・スポーツ系大学（学部）における初年次教育内容や全国の大学の現状を調査し，今後の体育・スポーツ系大学（学部）カリキュラム構築の方向性についての基礎資料を得ることを目的とした。

その結果，次のようなことが明らかとなった。

- 体育・スポーツ系大学（学部）では半数以上の大学が初年次教育を導入していた。学部教育としての位置づけのところもあれば，学科単位での取り組みなどその展開方法にも大学間での違いがみられた。
- 現在の初年次教育への注目が集まる前から，現在の学士課程教育の再構築路線の大学教育を展開してる日本女子体育大学のカリキュラムは注目すべき内容が多い。初年次教育を導入しているだけでなく，それをさらに強化すべき教養教育の充実ぶりやキャリア教育への積極的なアプローチなど，現在の大学教育に備えるべき内容を1990年代後半から導入してきている意義は大きい。
- 本学１年生も入学前後から，「大学卒業後の進路」への強い関心を示していることが明らかとなった。初年次教育とキャリア教育とをセットで展開することが重要であることが示唆された。

参考文献

［１］土居陽治郎・松井完太郎・木村寿一：国際武道大学における初年次教育の実践報告とその将来展望についての提案，国際武道大学研究紀要，第25号，2009，69－84.

［２］河合塾編：『初年次教育でなぜ学生が成長するのか』，東信堂，2010.

（2011年12月13日　受理）

大学教育研究プロジェクト研究成果報告書

【プロジェクト名】
スポーツにおける薬物乱用者に対するインターネットを用いた副作用相談（国内版，英語版）

【プロジェクトの分類】
一般公募

【研究期間】
2010年４月～2011年３月

【プロジェクト代表者氏名・所属部局・職名】
高橋正人（体育学科・教授）

【共同研究者・(所属)】
立木幸敏（国際武道大学）　河野俊彦（千葉大学）

【キーワード】
薬物乱用
ドーピング

【研究成果の概要】
スポーツにおける薬物乱用者の副作用相談をアンチ・ドーピングの立場で行う。ウエブ上で行うのでホームページを作成した。その上で，スポーツにおける薬物乱用者の副作用を中心とした相談にのり，その内容についてまとめた。

【プロジェクト予算額及び執行額】

（金額単位：円）

	予算額	執行額
2010年度	250,000	4,200
合　　計	250,000	4,200

大学教育研究プロジェクト研究成果報告書

スポーツにおける薬物乱用者に対するインターネットを用いた副作用相談

高橋正人，立木幸敏，河野俊彦

Investigation of Drug Abuse in Sports by Medical Counseling via an Internet Web Site.

Masato TAKAHASHI，Yukitoshi TATSUGI and Tosihiko KOHNO

Ⅰ．目　的

2004年のアテネオリンピックと比較して2008年の北京オリンピックではドーピングによる失格者は少なかった。ハンマー投げにおいてテストステロン値の異常値が認められ，日本人選手を巻き込み現在も順位が確定できていない。さらにエリスロポエチンレセプター活性化促進剤の使用が疑われ，検体について再検査するとの報道もされている。一方，我々はこれまでにスポーツにおける薬物乱用について，スポーツ医学的立場からいろいろと分析を行ってきた。そのうちの一つとして，日本におけるスポーツにおける薬物乱用者の副作用を呈した患者の診断と治療を行い，それについては症例報告も行ってきた。このような症例報告も本邦ではわれわれのみである。以上のような日本における薬物乱用者の状況により，我々はほぼ10年にわたり薬物乱用者の，特に副作用に対する電話相談を続けてきた。さらにインターネットでも同様のことを行ってきた。これらについてはすでに論文として研究報告した。また，現在は薬物乱用者が運営しているものと思われるウエブサイトの掲示板における，アクセス者の運営者に対する相談内容について分析を進めている。

これらすべての論文と試みについては海外で大いに評価され，2008年９月にスウェーデンでスウェーデン政府が公認実施しているアンチドーピングホットライン（カロリンスカ医科大学研究所臨床薬理学教室が運営）15周年カンファレンスに招待され，国会議員，政府職員，警察関係者，弁護士，およびカウンセラーを含む医学関係者に対して１時間にわたって講演を行ってきた。そこではこのような薬物乱用防止の取り組みに政府より資金が出るかとかなりの数の人から聞かれたが，勤務先のそれに特化した研究資金は一切出ていない旨を話さざるを得なかった。また10月にはドイツニュルンベルクで行われた Ehrlich Ⅱ 2nd World Conference on Magic Bullets にも招待され，同様の内容を簡略にポスター発表を行ってきた。ここでは薬理系のカンファレンスで薬物乱用・ドーピングのセッションがひとつのものとして区切られており，自分も読んだことのある論文の複数の執筆者が研究報告を行っていることは驚きであった。このようなことから日本においてもいわゆる麻薬，覚せい剤，大麻のみならず一般の薬物乱用についてもひとつのセッションになるように我々も努力する必要がある。このようなことから，もう少しグローバルなところで，我々は日本語版，および英語版のスポーツにおける薬物副作用患者のウエブサイトを再開設し，日本人ばかりではなく，国際的に患者の医療相談にのる必要があると考えている。国際武道大学の「国際」部分での貢献をしたいと考えている。

Ⅱ．方　法

2009年度はまず第一段階としてインターネットのホームページ（http://www.reco.co.jp/doping/）（http://www.

reco.co.jp/doping）の再構築を行なった。2010年度ではそれを元にして具体的に相談事業を行った。それについては成果で詳しく述べる。

Ⅲ．進行状況

Ⅱに述べたことはすべて遂行した。引き続き継続して事業を展開している。また2010年度の結果を基としてさらにホームページの改善を若干行った。

Ⅳ．研究成果

1．方法

09年のインターネットによる相談の内容についてキーワード別に分類した。キーワードとしては薬物の種類で分類した。多いものにはさらに分類を行った。また症状別のキーワードで分類した。また各年の相談件数の中での薬物使用者も明らかにした。

2．結　果

Fig. 1は年別の相談件数を絶対数で示した。93年から03年までは電話相談の件数である。93年から96年までは年間で50件の相談があったが，97年，98年，99年は年間約30件である。00年は40件台であった。01年は39件。02年は42件。03年は9件だった。09年は18件だった。また薬物使用件数を明らかにした。たとえば09年は18件のうち11件（61,1％）が薬物使用者であった。電話相談のうち，薬物使用歴のあるものは93年から03年までで226名であり，全体の相談件数（463名）の48.8％であった。Fig. 2は09年の相談内容である。筋肉増強剤に関することが5件で，ドーピング検査についての一般的相談は4件，副作用は5件，プロホルモンは1件，サプリメントは2件，その他が1件であった。Fig. 3は症状での分類である。症状の訴えのない者が9件，性器症状が2件，アレルギー症状と女性化乳房が1件ずつ，体調不良が5件であった。

3．考　察

蛋白同化ステロイド等の薬物の副作用については今までさまざまな報告がある（1，2）。年別電話相談件数で97年，98年の相談件数が減少するのは相談するべき人が相談しきった可能性があるのと，相談に対する警戒心があるものと思われる。02年も相談件数は29件に減少した。03年は“Professional Athlete”なるホームページの掲示板で仲間内で相談した結果であると考えられる。

09年になり相談件数が減った理由として，まず6年間サイトを中断していた影響が考えられる。次に薬物乱用者のサイトが長く続いているので，みなに浸透してしまっていることも考えられる。また，このサイトが学術的であり印象が堅くなってしまっているために相談件数が減ったことも考えられる。このサイトの利用者を増やすために，2，3年様子を見てサイトを変えることも必要だと考えられる。

09年になっても薬物使用者は全体の60％を超えているというのが現状であり，この健全な日本でも薬物使用者が多いと言える。

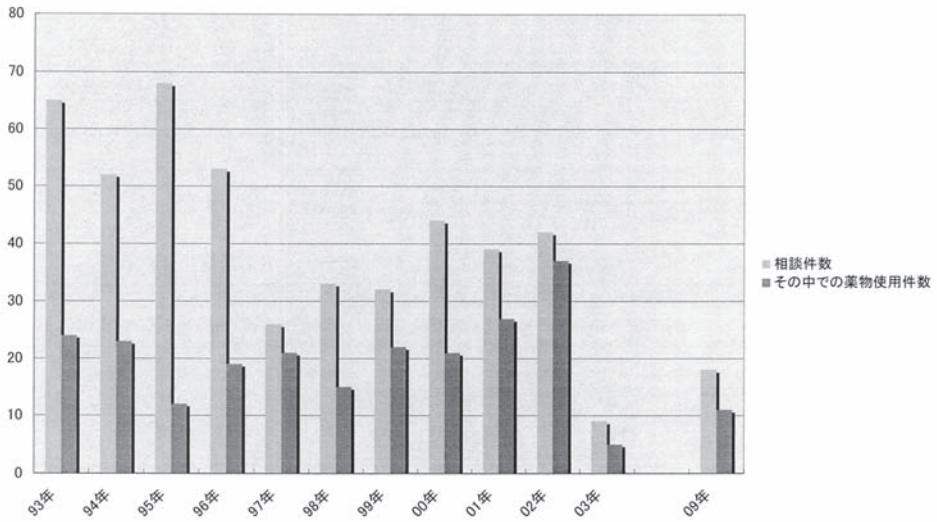


Fig. 1　相談件数と薬物使用者数

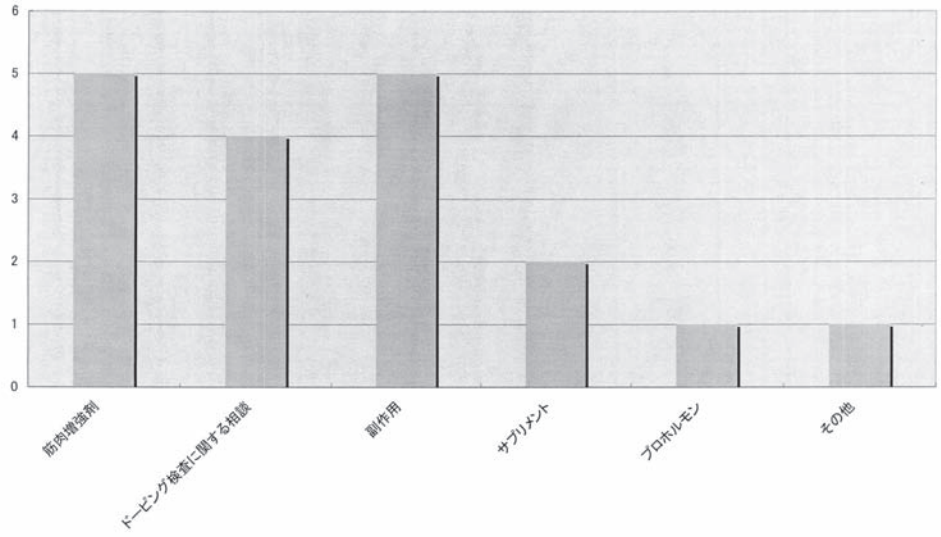


Fig. 2　2009年の相談内容

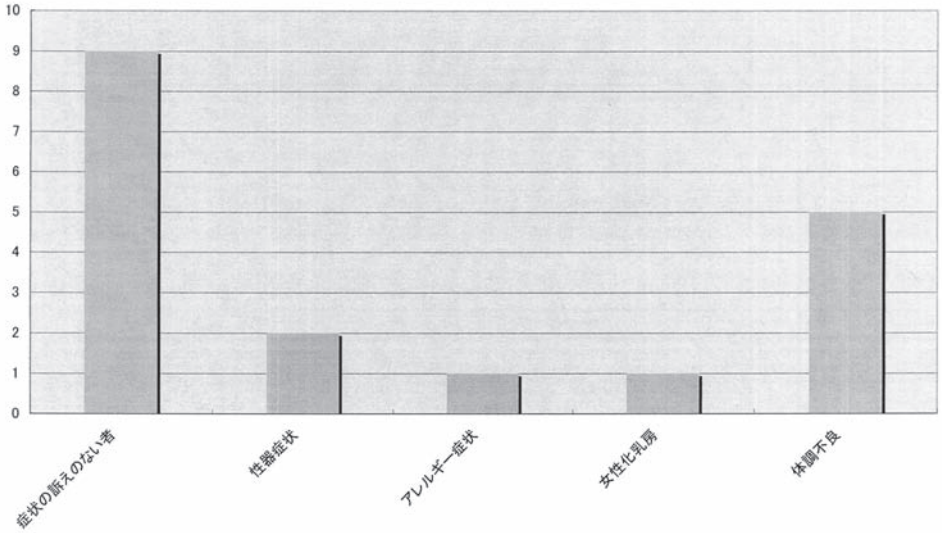


Fig. 3　キーワード別症状分類

以前と比較して，利用者数は異なるが確立的には変わらないか以前より増えているといえる。

相談内容としては，筋肉増強剤（ステロイド）の使用者はボディービル関係が多いことがわかった。副作用については，クロミフェンやアナボリックステロイドの副作用についての質問などがあった。ドーピング検査に関する相談に関しては，スポーツを現役でやっている人達による相談が多かった。

キーワード別症状分類に関しては，症状の訴えのない者がほとんどで，訴えのある者では，無精子症で悩んでる人がいた。体調不良に関しては，免疫力が低下し風邪を引きやすくなったという相談が多かった。

内容別の項目では，女性化乳房の相談は根強いが，今回は少なかった。それは，薬物常用者が運営するウェブサイトで問題を解決している人が多数存

在していることからだと考える。そのかわり，今回の相談では漠然とした体調不良を訴える人が増加した。

本研究の改善点としては，英語でのアクセスがないので、英語のホームページを日本語のホームページのように充実する必要があると思われる。

Ⅴ．発表論文，発表学会，掲載論文

現在，これを最終的には５年程度行い，外国誌に投稿する。アクセプトされればかなり反響のある論文となろう。その前に学会に毎年継続的に発表することになるが，最初は2012年９月に行われる The XXXII FIMS World Congress of Sports Medicine（http://www.fimsroma2012.org/）を考えている。 また投稿雑誌としては Journal of Sports Medicine & Doping Studies（JSMDS）（http://omicsonline.org/jsmdshome.php）を現在のところ想定している。

（2011年12月13日　受理）

大学教育研究プロジェクト研究成果報告書

【プロジェクト名】
体つくり運動への応用を意図したコミュニケーション・ワークプログラムの開発とその検証

【プロジェクトの分類】
一般公募

【研究期間】
2010年４月～2011年３月

【プロジェクト代表者氏名・所属部局・職名】
中西　純（体育学科・准教授）

【共同研究者・(所属)】
鈴木和弘，小磯　透（国際武道大学）

【キーワード】
体ほぐしの運動，体つくり運動，コミュニケーション・ワークプログラム

【研究成果の概要】
体つくり運動への応用を意図したコミュニケーション・ワークプログラムを実施し，その効果を交流分析，IKR 評定用紙および体ほぐしチェックリストを用いて検討した結果，以下の結論を得た。
１）交流分析の結果，自他肯定感が向上することが示唆された。
２）IKR 評定用紙は，生きる力が向上し，長期キャンプに類似の効果が確認された。
３）体ほぐしチェックリストは，心と体の軽さや受容感や楽しさが向上し，一部ではあるがストレスが減少した。
４）上記結論より，体ほぐしの運動のねらいが，コミュニケーション・ワークプログラムを実施することで達成されることが示唆された。

【プロジェクト予算額及び執行額】

（金額単位：円）

	予算額	執行額
2010年度	393,450	272,880
合　　計	393,450	272,880

国武大紀要 (Int. Budo Univ. Journ.)
第27号：75－78（2011）

大学教育研究プロジェクト研究成果報告書

体つくり運動への応用を意図した
コミュニケーション・ワークプログラムの開発とその検証

中西　純，小磯　透，鈴木和弘

Development and its Verification of the Communication Work Program on the Application of the Physical Fitness

Jun NAKANISHI，Tohru KOISO and Kazuhiro SUZUKI

Ⅰ．緒言および目的

筆者らは，2009年度大学教育研究プロジェクト「幼少年期におけるコミュニケーション能力向上プログラムの開発と実践」において，主として幼少年期の子どもを対象に，コミュニケーション能力を向上させるためのプログラムを幼児及び学校教育向けに改変し，研究協力校において実践した。そして，信頼関係や人間関係について検証するために，実践の前後にOKグラム及びエゴグラムを用いて調査した。結果の一部については，第56回日本学校保健学会において，「幼少年期における体力向上プログラムの教材開発―コミュニケーションゲームから体つくり運動へ―」で発表した。

青森県U中学校（２・３年生52名）を対象に，エゴグラムでは事後に，より成熟した集団になる傾向が見られ，OKグラムでは，Y（U＋）他者肯定が有意に高くなり，他者を受け入れやすい集団になる傾向が伺えたことから，コミュニケーション能力向上プログラムの有効性を示すことができたと推察している。

しかし，山形県N中学校においては，OKグラムのみ調査を実施した。その結果，学年全体では有意な変化は見られなかった。そのため，さらに信頼関係や人間関係及び，「体ほぐしの運動」の効果を詳細に調査する必要がでてきた。

一方，レクリエーションや野外教育の分野で開発・実施されてきたコミュニケーション・ワークプログラム（プロジェクト・アドベンチャー，ASE，イニシアティブ・ゲーム等）は野外活動や企業研修などで多く実施されている。これは，様々な人間関係の中で，コミュニケーション促進効果があることによる。また，その効果は数多くの研究で検証されてきた。しかしながら，非日常的且つ，短期集中的であった。加えて，幼児教育活動，学級活動や保健体育，道徳等学校等の学校教育活動全体を通して応用可能なプログラムがあったにもかかわらず，日常的に実践されることは少なかった。

また，体つくり運動は，体ほぐしの運動と体力を高める運動で構成され，自他の心と体に向き合って，体を動かす楽しさや心地よさを味わい，心と体をほぐしたり体力を高めたりすることができるものである。

体ほぐしの運動は，「心と体の関係に気づく」こと，「体の調子を整える」こと，「仲間と交流する」ことをねらいとして行われる運動であることから，上記ゲームの目的と合致するものである。

これらの効果の検証方法として，人間関係の改善や対自・対人関係の改善及び自我の状態を測定する交流分析（エゴグラム，OKグラム），キャンプや野外活動で生きる力を測定する，生きる力の評定用紙（IKR評定用紙），心と体のほぐれ具合を測定する，体ほぐしチェックリストを用いて検証した。

最終的な目的は，児童生徒に対し日常的にプログラ

ムを実践し，その効果を検証することである。

Ⅱ．方　法

B大学に所属し，2010年11月11日（木），12月16日（木）の両日，「基礎レクリエーション実習」の「イニシアティブ・ゲームを楽しむ」に出席した学生，11月（男性46名，女性4名計50名），12月（男性31名，女性16名計47名）を対象に，体つくり運動の体ほぐしの運動を意図したコミュニケーション・ワークプログラムを実施した。なお，両日とも参加した学生はいない。その事前と事後において上記質問紙を用い効果を検証した。

欠損値は全て対象から除外し，有意差は，$p<.05$とした。

授業時間は2時限目（10：50～12：20）の90分で，屋外で実施した。実施したコミュニケーション・ワークプログラムは以下の通りである。

11月11日（木）

1．じゃんけんお回り
2．じゃんけんお回り（おんぶバージョン）
3．魔法の鏡
4．魚群リレー
5．ひっつきくるぶし
6．ボール流し
7．ボール運び
8．トンネルくぐり
9．馬跳び
10．みんな鬼
11．くっつき鬼
12．手つなぎ鬼

12月16日（木）

1．じゃんけんお回り
2．じゃんけんお回り（おんぶバージョン）
3．魔法の鏡
4．ボール流し
5．馬跳び
6．手つなぎ鬼

Ⅲ．結果および考察

1：11月実施

エゴグラムの形は事前・事後ともNP優位タイプのM型となり，自他肯定の形であった。養育的な親の自我状態（思いやり，親切，保護等，母親的な部分であるNPが事後において有意に増加したことからより親身になり集団の中で対応できたと考える。（図1）

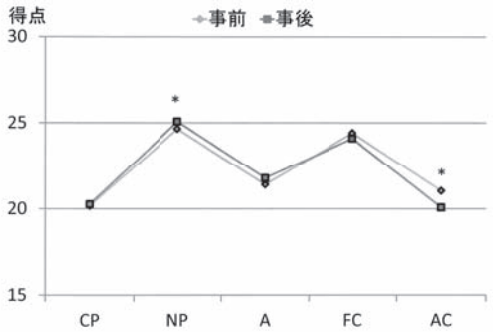


図1　エゴグラムの変化（11月）

そして，順応した子どもの自我状態（子どもなりに身に付けた順応性）のACが有意に減少したことから，自己肯定感が向上したと推察している。

IKR評定用紙は，14ある下位尺度は変化が見られなかったが，平均得点のみが事後に増加したため学生の生きる力が向上したと思われる。（図2）

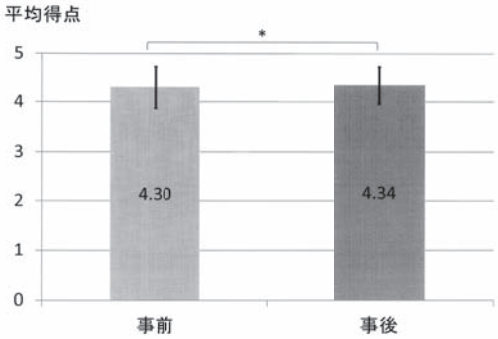


図2　生きる力の平均得点の変化（11月）

体ほぐしチェックリストは，事後において「体が軽い，元気いっぱい」，「周囲に受け入れられている」，「自然と笑顔になる」が有意に増加した。これは受容感が増加し，コミュニケーション・ワークプログラムを実施することにより，心と体が軽くなり楽しい活動であったことからこのような結果になったと推察する。（図3）

2：12月実施

11月の結果とは違い，エゴグラムには変化が見られなかった。OKグラムは，I+（自己肯定）が事後に有意に増加したことから，学生同士でコミュニケーシ

ョンを取ることにより，自分の価値をより認め尊重するようになったと推察する。（図４）

IKR 評定用紙は，11月同様平均得点が事後において有意に増加したことから，生きる力の向上に効果があったと考えられる。（図５）

また，下位尺度である「積極性」（図６），「自己規制」（図７），「野外生活・技能」（図８），も事後において有意に増加した。意図的にコミュニケーションを取るようなプログラムを実施したため積極性が向上し，ルールを守ることにより協調性が生まれ，仲間を思いやることで自己規制を向上させたと推察する。野外生活・技能については，これらに関わる具体的なプログラムを実施していないことから，副次的な効果がプログラムにあったと推察している。さらに，上位尺度である「心理的社会的能力」（図９）が事後において増加した。長期キャンプの体験が14の下位尺度およ

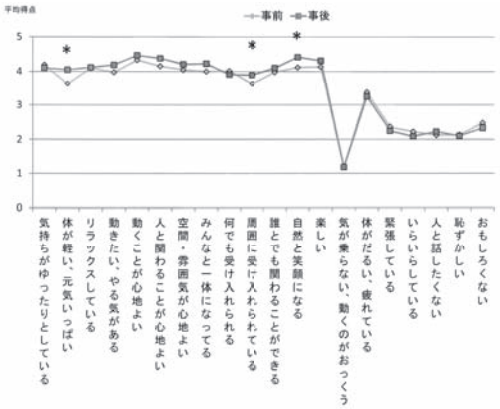


図３　体ほぐしチェックリストの変化（11月）

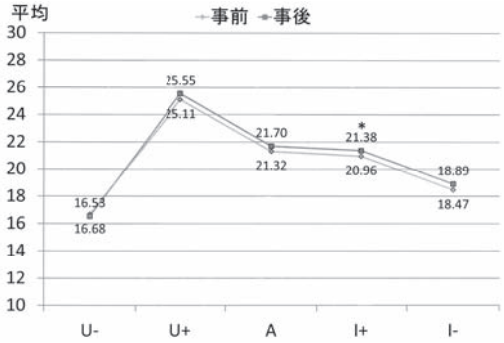


図４　OK グラムの変化（12月）

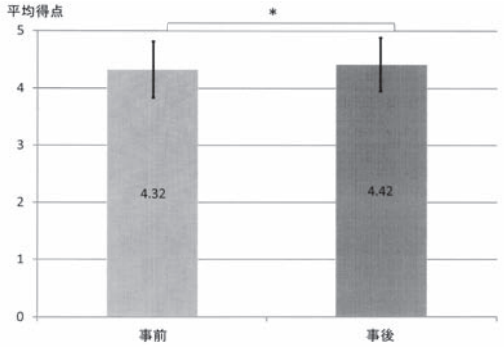


図５　生きる力の平均得点の変化（12月）

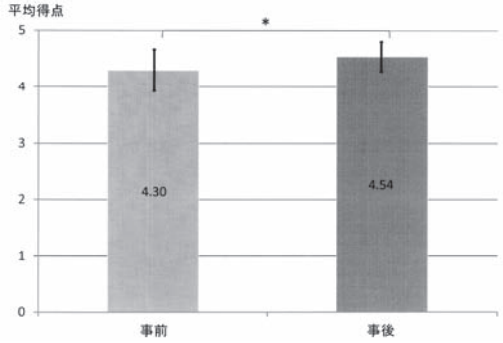


図６　積極性の変化（12月）

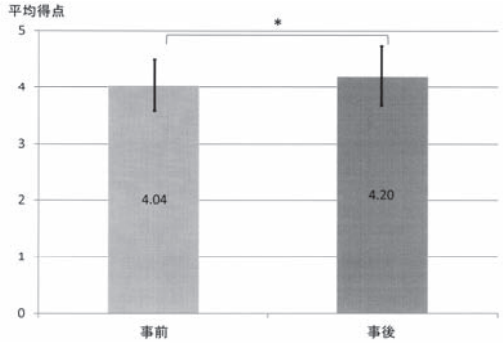


図７　自己規制の変化（12月）

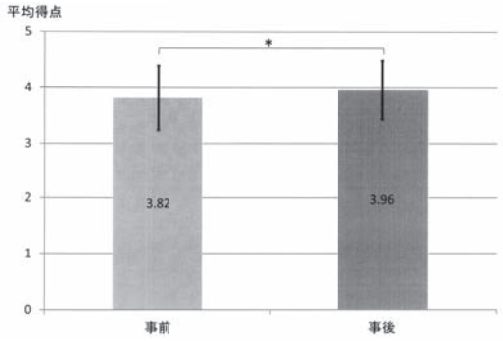


図８　野外生活・技能の変化（12月）

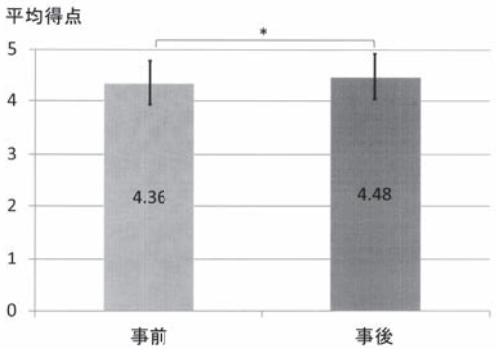


図９　心理的社会的能力（12月）

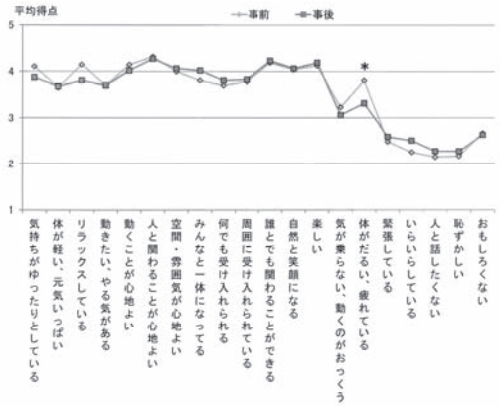


図10　体ほぐしチェックリストの変化（12月）

び３つの能力尺度を向上させ，生きる力の向上に効果を与えた（橘・平野・関根2003）ことから，今回のプログラムが長期キャンプと類似の効果があったと推察する。

体ほぐしチェックリストは，事後において「体がだるい，疲れている」が有意に減少した。（図10）

プログラムを実施したことにより，不定愁訴の一部やストレスの一部が軽減されたと考えている。

Ⅳ．結　論

体ほぐしの運動への応用を意図したコミュニケーション・ワークプログラムを実施し，その効果を交流分析，IKR 評定用紙および体ほぐしチェックリストを用いて検討した結果，以下の結論を得た。

1）交流分析の結果，自他肯定感が向上することが示唆された。

2）IKR 評定用紙は，生きる力が向上し，長期キャンプに類似の効果が確認された。

3）体ほぐしチェックリストは，心と体の軽さや受容感や楽しさが向上し，一部ではあるがストレスが減少した。

4）上記結論より，体ほぐしの運動のねらいが，コミュニケーション・ワークプログラムを実施することで達成されることが示唆された。

文　献

橘直隆，平野吉直，関根章文（2003）長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響，野外教育研究，６（２），46－56

（2011年12月13日　受理）

国武大紀要 (Int. Budo Univ. Journ.)
第27号：79－90（2011）

授業研究報告書

国際スポーツ文化学科における初年次教育の新しい取り組み
―「ディベート形式討論会」実施の試み―

木村寿一，土居陽治郎，松井完太郎，高木誠一

A Debate in Education：A New Method on the First-Year-Experinece in the ISC class

Toshikazu KIMURA，Youjirou DOI，Kantaro MATSUI and Seiichi TAKAGI

Abstract

In the department of International Sports Culture, a seminar on the first year experience has been carried out with first year students since 2007. However, it was felt that there was scope for improvement of this seminar. Therefore, in 2011, a Debate in Education was included in the sports culture seminar. The purpose of a Debate in Education was to develop the students' ability to research the subject and argue their point of view convincingly and in a persuasive manner.

In this activity the students spend the first ten minutes gathering information and preparing for the discussion with the support of their teacher. Next, three students from the group in support of the debating point announce some opinions, and then three students from the opposing group state some of their opinions. The individual students put forward their arguments within one minute. This is followed by a question-and-answer session facilitated by a chairman. Other students who do not participate in the discussion note opinions on the decision sheet while listening to the discussion. The debate is assessed from three viewpoints, clarity, theoretical content and persuasiveness. After the discussion is complete, it is determined which opinion is most convincing.

This Debate in Education, being carried out as a new trial for the first year experience, has highlighted some problems in the organization of the activity. However, the general communication skills and learning attitude of the students have been clearly demonstrated. Next year, there needs to be an improvement in the understanding and the promotion of the importance of intelligence, the allocation of the role of the publisher and the consistency of the instructions provided by different teachers providing support for the exercise.

キーワード：初年次教育，ディベート，チューター教員，コミュニケーション能力

1．はじめに

国際スポーツ文化学科（以後，本学科という）では，2007年度から導入された新しいカリキュラムにおいて，『国際スポーツ文化入門』や『スポーツ文化ゼミナール』といった科目で初年次教育を実施している。そこでは武道，体育，スポーツの専門領域の教育だけではなく，「中学１年生の英語で理解するスポーツ文化」や「スポーツでメシを食おう！」といった，これまでの学習経験の復習やスポーツと社会の繋がりを意識させる内容や，「授業の出席状況」における単位取得や授業態度，「一人暮らしの学生生活」におけ

る炊事洗濯や怪我・事故等への対応といった「スチューデント・スキル」,「自分の在籍している大学を知る」といった「自校教育」, NIE（Newspaper In Education）を通した「情報リテラシー」など，幅広い初年次教育の内容を展開している[1]。

このように2007年度から本学科に導入された初年次教育であるが，まだまだ試行錯誤の状態が続いており，特に学生が主体的に学習に取り組む姿勢についてはNIEや個別ゼミナールの実施をおこなってはいるものの改善の余地がある。また，授業内で自主的に学習した内容を人前で話す機会は，個別ゼミナールを通してグループ別で調査された内容を発表した例が過去にあったが，必ずしも全ての学生が人前で話す機会を得た訳ではなかった。

そこで2011年度は，後期の『スポーツ文化ゼミナール』の授業において，全ての学生が学習成果を積極的に人前で発表する機会を作り，自らの想いを相手に伝える実践的な授業内容として「ディベート形式討論会」を実施した。

ちなみに討論や対話型形式の授業について，新学習指導要領において小中高すべてで展開するように求められており，ある意味，時代の要請を受けての試みということが言える。

2.「ディベート形式討論会」の概要

2.1　ディベート形式について

「ディベート」とは，全日本ディベート連盟によると，アカデミック・ディベートについて,「明確な定義を持つ一つの論題に関して，肯定側・否定側に無作為に立場を決定された上で，発言時間・順序・マナーなど規定されたルールに従い，論拠や証明された議論を用いて，ジャッジと呼ばれる第三者を論理的に説得し，勝敗が決定されるゲーム」[2] と記されている。また，日本ディベート協会では，教育ディベートの種類として論証重視型や即興性重視型[3] などを挙げており，１人制やグループ制など討論の形式には，詳細な規則が決められている場合もある。また，討論途中での肯定側・否定側の立場の逆転なども競技ディベートにしばしみられる。

本来ならこのような活動を通して，調査方法を学び，問題の発見・分析，理論的な思考，説得力のある発表といった教育効果を期待したいところであるが，体育系大学の１年生が取り扱う内容としてやや高度なものと思われた。しかし，学生達がディベートの雰囲気を感じながら，積極的に意見交換や討論に参加できるよう，あえて「ディベート形式討論会」という名称を設定した。

2.2　「ディベート形式討論会」の目的

2011年度の履修の手引きには，『スポーツ文化ゼミナール』の授業概要（一部抜粋）について，

- 「覚える」ことよりも「理解する」「問題として意識する」ことが重要。
- 本や新聞に書かれた内容を鵜呑みにするのではなく，「それって本当？」といった探究心が必要。
- そのために「読む」「聞く」「調べる」「考える」「人に伝える」といった基礎訓練の段階を経ることが重要。

と記述されており，チュータ教員と一緒になって勉強の基礎を磨くトレーニングをおこなうことが述べられている。

こうした授業方針を受けて「ディベート形式討論会」では，学習方法や学習成果のまとめ方を理解することを目標に，以下のことを目的とした。

- テーマに沿った自分の意見を調査し，それを整理して発表する。
- 相手の意見を聞き，それに対する意見を述べる。
- 仲間と協力して，説得力のある表現を行う。

つまり，問題意識を持って情報の収集や整理・選択を行い，自分の意見を他者に分かりやすく伝えることを目的に，仲間と協力しながら，主体的に情報収集に取り組み，幅広い考え方やものの見方を養い，積極的にかつ分り易く意見を述べ，相手の質問や反論に的確に答えるといった，総合的なコミュニケーション能力の育成に主眼を置いた。

2.3　「ディベート形式討論会」の説明会と教員によるデモンストレーション

スポーツを専門として入学してきた学生達においては，ディベートの討論を見たことがある，あるいは体験したことがある者は少ない。また，ディベートそのものの知識がなく，どの様に討論が展開されるのか分からない学生も中にはいる。この様な学生のために，先ずは簡単なディベートの紹介をスライドで説明し，実際にどのような物なのかを少しでも理解してもらうために映像（『ディベート甲子園』）を見せ，その雰囲気を味わってもらった。その後，ディベート（討論）のデモンストレーションを担当教員達で実演した（図１）。

図１　教員によるディベート形式討論会デモンストレーションの様子

本学科には，学生時代にディベートを専門的にトレーニングしてきた教員が複数名おり，その教員の力を借りて，テーマ「スポーツは教育的か？」について討論デモンストレーションを行った。賛成側教員２名と反対側教員２名が両グループに分かれ，それぞれに意見の交換を行った。ルールは賛成側から14分間の意見発表し，その後，反対側の意見発表を14分間という形式で展開した。一通り両グループの発表が終了した段階で，司会・進行役の教員が，両者の意見をまとめ質疑応答と討論を促す発言を15分間おこなった（表１）。

討論では，賛成側教員によってスポーツが教育的であるかどうかを，「スポーツは文化である」「文化は教育的要素を含んでいる」よって「スポーツは教育的である」という三段論法を活用した発表が展開された。一方，反対側教員はスポーツが教育的であるかどうかを「部活動におけるいじめや体罰」，「スポーツ選手のドーピング」や「競技における八百長」など，スポーツの問題点について幾つもの事例を紹介しながら討論が展開された。

なお，デモンストレーションではあったが，教員同士の打ち合わせは全く行わず，真剣勝負の様相を呈したディベートとなった。このときの会場の緊張感はかなりのもので，同席した教員や参観教員（この授業については事前に公開する旨の学内通知を出していた）のみならず，履修している学生たちも討論の醍醐味を十二分に味わうことができ，こうした緊張感が学生たちのモチベーションを高揚させたのは確かであった。予定調和の討論にしなかったことがその後の授業展開には好影響を与えたものと推察される。

表１　教員によるディベート形式討論会デモンストレーション進行

ディベート進行	時間
賛成側教員の発表	14分間
反対側教員の発表	14分間
賛成側，反対側それぞれからの質疑応答	15分間
司会者教員からの質問	
聴講者の学生は，判定用紙にメモを取りながら評価	
討論終了後，聴講者の学生が挙手をして判定	５分間
司会者のまとめ	計50分間

その間，聴講者である学生達は，判定用紙（表２）

表２　ディベート形式討論会における判定用紙

テーマ①：

自己選択	評価 コメント		総合判定
賛成・反対	分り易さ		賛成・反対
	賛成・反対		
	理論的		
	賛成・反対		
	説得力		
	賛成・反対		

の記入方法を練習する為，先ずは自己選択欄[1]に「スポーツが教育的」と思う者は賛成に○を，そう思わない者は反対に○を記入させた。そしてコメント欄にメモを取りながら，教員の発言や質疑応答の内容を「分り易さ」「理論的」「説得力」の３つの観点から判定し，賛成側・反対側の有利と思われる方に○を記入させた。討論終了後，そのテーマに対して賛成側・反対側のどちらの意見や応答がより適切であったかを総合判定し，優位だった方に○をつけさせた。こうした判定用紙はその後の「ディベート形式討論」授業においても用いるので，教員によるデモンストレーションに合わせて予行練習を行った形となった。

なお，このデモンストレーション討論が終了し，聴講している学生達の判定も記入終了時点で，学生たちの判定用紙の使い方を確認するために，総合判定等についての記入結果を挙手によって確認させた。

２．４　「ディベート形式討論会」のテーマについて

「ディベート形式討論会」のテーマは，大学１年生レベルを十分に考慮した上で，討論がより活発になるよう身近な題材について設定しなければならない。また，討論の前の準備段階で比較的手軽に情報を収集でき，より深く思考，検討できるようなテーマになるように注意を施した。

「ディベート形式討論会」第１回目は，大学生活における体育系学生としての態度について，教職員が日頃から感じていることや話題となるような内容を学生に問いかけるものとした。これらのテーマは，本学学生の実態の真偽はともかく，理想的には賛成側に有利な意見が展開されることを予測してテーマを設定した。したがって，反対側が如何にして賛成側の意見を覆し，反対側に有利な内容で討論を進められるかがポイントとなる。

「ディベート形式討論会」第１回目テーマ＜大学生活について＞

①ジャージやサンダル登校を禁止すべきかどうか。
②バイク登校を禁止すべきかどうか。
③単位取得の少ない学生は部活動禁止（公式戦出場禁止）にすべきかどうか。

「ディベート形式討論会」第２回目は，教職課程を履修している学生や，そうでない学生にとっても自身が小学校，中学校，高等学校で必ず経験してきたことを，専門的に検討してみることを念頭に置いたテーマ設定とした。特に学校教育における保健体育教科の位置づけを考えるうえで，教科の重要性や教育的役割をどの様にとらえるかが討論の視点となるように設定した。また，テーマに選んだ内容は，ほぼ全ての教育現場において実施されているものであり，そうした当然として扱ってきた内容を改めて検討することで，これらの教育内容の理解を深めることがポイントとなる。

「ディベート形式討論会」第２回目テーマ＜学校体育について＞

①保健の授業は必要か。
②体力テストは必要か。
③体育祭は必要か。

「ディベート形式討論会」第３回目は，『スポーツ文化ゼミナール』授業で取り上げることになっている「オリンピックを考える」に引き継げる内容で，世の中でも話題となっている題材を取り上げた（表３）。ここで取り上げたテーマは個人や組織，さらには国家によって賛否が分かれる内容で，必ずしもどちらが良いとか悪いとかを区別できるものではない。そのため討論における発表者の問題意識や理解力がそのまま聴講者の判定に繋がり易いテーマである。

「ディベート形式討論会」第３回目テーマ＜オリンピックについて＞

①野球・ソフトボールを復活するべきか。
②2020年オリンピック開催において東京は誘致すべきか。
③国籍を変更してまでオリンピックに出場すべきか。

1　この「自己選択欄」とは，討論の前の段階で，自分自身はどちらの考えに賛同しているのかを確認させるためのもの。

表３　2011年度『スポーツ文化ゼミナール』授業計画

	月日	形態	内容
1	９月27日	全体	ガイダンス授業
2	10月４日	全体	ディベート形式討論の説明会＆模擬討論
3	10月11日	ブロック	第１回ディベート形式討論（大学生活）
4	10月18日	ブロック	第２回ディベート形式討論（学校体育）
5	10月25日	ブロック	第３回ディベート形式討論（オリンピック）
6	11月１日	全体	オリンピックを考える
7	11月８日	個別	【個別ゼミナール】役割分担
8	11月15日	個別	【個別ゼミナール】調査
9	11月22日	個別	【個別ゼミナール】情報の整理
10	11月29日	個別	【個別ゼミナール】まとめ
11	12月６日	個別	【個別ゼミナール】表現の方法
12	12月13日	全体	個別ゼミナールの全体発表会
13	12月20日	全体	松前重義と五輪
14	１月17日	全体	君はスポーツで社会を豊かにすることに挑めるか？
15	１月24日	個別	【個別ゼミナール】年度総括

２．５　「ディベート形式討論会」授業の進行方法

まず，履修している国際スポーツ文化学科１年生全員（71名）をチューター教員別の９つのグループに分け（８名８組，７名１組），さらにこの９つのグループを３つのブロックに分割した。つまり，各ブロックが３つのチューター教員グループで構成されていることになる。各ブロックで実施教室を付与し（1323教室ブロック，1322教室ブロック，8208教室ブロック），その教室内で３グループによる「リーグ戦」方式で討論会を実施した。

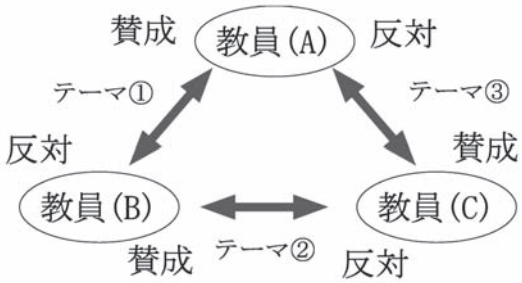


図２　学生によるディベート形式討論会授業における対戦方法

討論は，テーマによってチューター教員グループが１回の授業内で，必ず賛成側，反対側の両方を経験できるように設定した。例えばチューター教員（A）グループは，テーマ①の討論については賛成側で，テーマ③の討論では反対側を担当するといった形式である（図２）。そして討論に参加していないチューター教員が，そのテーマの司会進行の役割を担うと同時に，チューター教員グループ学生が判定用紙に記入するという「聴衆」役を担うという進行である（図３）。

「ディベート形式討論会」の進行は，最初の10分間

図３　学生によるディベート形式討論会授業の様子

で学生それぞれが調査してきたテーマに関する情報を集約し，どの様な意見が有効か，また，対戦相手の質問を想定した回答の打ち合わせなど，担当教員と共に討論の準備を行う。

次にチューター教員グループから３名の代表学生が討論に参加し，賛成側から１人１分以内で意見を述べ，同様に反対側の意見の発表が終了してから，司会教員によって両グループに質問や追加の意見の確認がおこなわれる。質問や追加の意見が無い場合，司会教員から各グループに質問を行う方式を原則とした。

討論に参加していないチューター教員グループ学生は，配布された判定用紙に，先ずはテーマに対する個人の賛否を「自己選択欄」に記入し，討論の最中にはメモを取りながら，発表者の意見や質疑応答を「分り易さ」「理論的」「説得力」の３つの観点から判定し，賛成側・反対側の有利判定を記入していく。討論終了後，そのテーマに対して賛成側・反対側どちらの意見や応答が，より適切であったかを総合判定する。総合判定の後，司会者の教員によって討論のまとめや内容の確認など補足説明をおこない，テーマに置ける重要事項について，学生達に再認識させたり共通理解を持たせたりする（表４）。

表４　学生によるディベート形式討論会授業進行

ディベート進行	時間
・テーマに関する賛成・反対意見を，各グループで集約	10分間
・１グループで代表者３名が発表者	６分間
・１人１分以内で３名全員が発表（賛成派から発表）	
・発表終了後，司会役の教員によって質疑応答の開始	６分間
・聴講者の学生は，判定用紙にメモを取りながら評価	
・討論終了後，聴講者の学生が挙手をして判定	
・司会者のまとめ	計25分間

３．事例：ディベート形式討論会の実際

３．１　第３回目テーマ「野球・ソフトボールを復活させるべきかどうか」

日時：2011年10月25日　３時限目
場所：1323教室（図４）

司会者：「では，賛成側から発表をお願いします。」

賛成 A：「サッカーなど人気のあるスポーツは，基本的には世界大会が沢山あるので，日本で人気のある野球に世界大会が無いのは不公平と思う。」

賛成 B：「オリンピックの競技から抜けた理由として，一部の地域からしか人気が無いと言われるけど，オリンピックという大きな舞台で野球を開催することで，世界の知られていない所で野球の楽しさを伝えることが出来るのだから，オリンピックから無くすのはつまらなくなると思う。」

賛成 C：「野球は日本でも世界でも競技人口が多く，子供から大人までやっても見ても楽しめる競技です。オリンピックではプロのみならずアマチュアの人が出場できるので，アマチュアの人が世界で経験を積む機会があり，オリンピックに野球・ソフトボールがあった方が良いと思う。」

（２分経過：その後，追加意見無し）

司会者：「それでは反対側の方どうぞ。」

反対 A：「一回オリンピック競技から外されたのなら，復活させる必要はないと思います。」

反対 B：「日本では人気があるかもしれないが，世界的にみて人気が無い。次のロンドンオリンピックでは，イギリスでは野球が盛んではないのにその為だけに野球場を作っても，その後，利益が無いというか，野球場をどうするのか。また，参加国が少ないことを考えると復活しなくても良いと思う。」

反対 C：「野球とソフトボールはお金がかかるところが大きい。サッカーなどの競技と比べると，バットやグローブなどいろいろ合わせてお金がかかるし，野球やソフトボールなどはカンボジアなどでは知られていない。そこで広げるとなると年数がかかって大変だと思うので，それだったら開催しない方が良いのではないのか。また，バットとかは乱闘などが起きた時に危ないのでは。凶器になると思うので，それも危ないと思う。そして，野球はルールが複雑で，サインも覚えるのが大変だし，それが楽しいのかもしれないがそこが大変だと思う。」

（２分45秒経過：その後，追加意見無し）

図４　学生によるディベート形式討論会授業（「野球・ソフトボールの五輪復活の是非」）の様子

司会者：「今の発表で，大きく意見が分かれたのは，賛成側は競技人口が多い。反対側は競技人口が少ないという発表でしたが，賛成側は何をもって競技人口が多いとと考えているのか？」

賛成 C：「世界の各地域のパーセンテージを見たらそんなに多くないかもしれないが，アメリカや一部の地域では，密集して競技人口が多いと思う。」

司会者：「それに対して競技人口が少ないと言っている反対側どうですか？」

反対 B：「オリンピックは世界的におこなうものなので，一部で多くても世界を見た時に，やってない所が多いと…。」

司会者：「世界的に見て，もっと競技人口が多くなければオリンピック競技としては，いけないのではないかという意見ですね。では，反対側からなるほどと思った意見として，施設を新しく作らなければならないと。アメリカや日本なら既に球場は多くありますが，ロンドンとなると野球場は新しく作らなければなりません。作った後どうしたらいいのか。こんな使い道あるとかなど如何ですか？」

賛成 C：「日本でもあるのですけど，甲子園球場に芝をひいたりしてラグビーをしたり，野球所は結構広いのでコンサート会場にしたり，他のスポーツに利用できたり出来ると思うので不便はそんなにないと思う。」

司会者：「もしオリンピックで野球をするとしたら，会場は１つで足りますか？」

賛成 C：「ソフトボールと野球で最低２つは必要になると思います。」

司会者：「賛成側は，コンサート等でも使い道があると言っていますが，反対側はそれに対して如何ですか？」

賛成 B：「そこは野球場を建てた訳ですから，オリンピックは滅多に行えるものではない訳ですし，一回建てたら世界遺産の様にいじらない。変更を加えてはならない！！」

賛成 C：「もし，そういう風にしたら，地面とかグランドが悪くなってしまって使えなくなるかもしれない。」

司会者：「賛成側から，野球を普及させるには，オリンピックで放送してもらうのが，知らない地域で普及させるための手段ではないのかという意見がありましたが」

反対 B：「野球を知らない所では，放送されない。」

司会者：「オリンピックで野球を普及させるのは無理があるのではという意見ですが，野球を普及させるために良い方法は考えられませんか？」

賛成 C：「日本の人が使ったグローブ等を寄付したりして，野球を少しずつでも普及させようとしている活動があると聞いたことがある。」

反対 B：「用具があっても教える人がいないし，中古の用具だと直ぐに壊れて，やっと野球が楽しくなってきてもスポーツ店が無いと修理も出来ないし，つぎのグローブはいつ届くといったこともある。」

司会者：「では，賛成側の人，オリンピックで野球を

復活させる利点は何ですか？」

賛成側：「…」

（質疑応答の６分間が終了）

司会者：「野球の世界選手権が無いという意見がありましたが，WBCのような日本が２連覇している大会もありますし，重要な論点としては何故オリンピック種目になる必要があるのかをしっかり考えていただけると良いのかなと思います。」

３．２ 「事例：ディベート形式討論会の実際」の結果考察

討論前の意見集約として設けられた10分間で，発表者同士が意見の取りまとめや，相手からの質問を想定した対応など，積極的な話し合いに取り組んでいる姿が見られなかった。その原因は明らかに情報収集不足であり，話し合いの時間を有効に使えなかったことが実情であろう。また，担当教員もそれらを予測して，学生達の話し合いを促すための準備や最低限の情報収集がなされていなかった印象が残った。

賛成側の発表にあった「野球には世界大会が無い」という意見は，最後に司会者も指摘していたが，WBC（ワールドベースボールクラシック）などの世界大会は開催されている。他にもIBAFワールドカップやアジア大会における野球競技，ヨーロッパ野球選手権大会など，様々な国際大会が行われている。確かにサッカーのように世代別の国際大会が頻繁に行われているわけではないので相対的には少ないと感じるが，「世界的な大会が少ないからオリンピックから外すのはつまらない」という意見は少し的外れの印象がある。また，アマチュア選手の参加については，確かにIBAFワールドカップなどでは，日本代表はアマチュア選手でチームを構成しているものの，2004年のアテネオ五輪大会以降はアマチュアの選手が代表チームに参加することはなくなり，日本に限って言えばアマチュア選手のオリンピック出場は，プロ野球選手になってからの目標でしかなくなっている。一方，反対側の発表では，大会終了後の野球場の利用価値や，用具の多さやルールの複雑さなどの問題が提起されており，「説得力」とい点において討論を優位に進めやすい立場を上手く利用した意見を述べていた。

司会者からの「競技人口が少ないこと」についての質問に，賛成側から「世界の各地域の参加割合を見たらそんなに多くないかもしれない」という発言は，自らの立場を悪くするものとなった。賛成側が自らの立場を不利にするような意見，あるいは悲観的な意見を述べてしまうのは，ディベート形式討論においては致命的である。しかも具体的な数値を述べる訳でもなく，意見が憶測でしかない印象を与えてしまっている。しかし，司会者から「野球場を新設した後の利用価値」についての質問に対する賛成側から述べられた「他の競技やコンサート会場としての利用が可能である」といった回答は，具体的な例として賛成側を有利に導くものとなった。それに対して反対側は，まとまりの無い主観的な意見を述べるにとどまってしまった。しかし，その後の，オリンピック競技種目採用による野球の宣伝・普及といった討論では，「中古の用具を寄付している」といった意見はでたものの，1992年のバルセロナ五輪から2008年の北京五輪までの16年間に，IBAF（国際野球連盟）や各国野球連盟がどの程度の世界的な野球普及に取り組んできたのか詳細な情報を述べることが出来なかったため，賛成側の「説得力」の支持を上げるには至らなかったようであった。

そして，最後に司会者が「野球がオリンピックに復活する利点は何か」との質問に，賛成側が何も反応することなく黙してしまったことは，総合判定を不利に決定づけるものとなった。例えば，「日本にとっては野球やソフトボールは数少ないメダル獲得のチャンスだ」や，「選手が活躍すると野球用品やソフトボール用品が良く売れて経済の活性化につながる」など，聴講者に「そういった考え方もあるな」と思わせる意見を述べられれば，まだ，「分り易さ」や「説得力」において挽回のチャンスがあったかもしれない。

３．３ 「事例：ディベート形式討論会の実際」の判定結果

この事例による聴講学生たちの判定は，自己選択では賛成，つまり「野球・ソフトボールの五輪復活」を支持した者が13名，支持しない者が２名と圧倒的に賛成側が多かった。しかし，討論終了後は，賛成が４名，反対が11名と反対側の発表者を評価する数が増えた（図５）。また，判定の内容を見てみると，問題提起をして討論を優位に進めやすい立場の反対側が，「大会終了後の野球場の利用価値」や「用具の多さやルールの複雑さ」などを述べて「説得力」（賛成側５名：反対側10名）において多くの支持を得た。このテーマにおける他のブロックでも，この事例ブロック同様の判定結果（賛成側２名：反対側14名）を示したこ

テーマ：「野球・ソフトボールを五輪に復活させるべきかどうか」

教室	立場	自己選択	分り易さ	理論的	説得力	総合判定
A教室	賛成	13	7	2	5	4
	反対	2	7	12	10	11

「野球・ソフトボールの五輪復活」に賛成だった者たちの多くが、討論後に反対支持に変わった。

B教室	賛成	11	6	3	2	2
	反対	5	9	13	14	15

C教室	賛成	10	3	4	6	4
	反対	2	7	5	4	4

図５　テーマ：「野球・ソフトボールを五輪に復活させるべきかどうか」の判定結果

とから，賛成側の発表内容における具体性や説得性に課題があるものと推察される。

このテーマにおいて特徴的だったのが「理論的」判定結果である。反対側が特に詳細なデータを示した訳でもないのに，賛成側の曖昧な意見によると思われる「理論的」（賛成側２名：反対側12名）な判定は興味深い。曖昧な意見を述べることは，自らの立場を不利にし，何もしていない相手に好印象を与えてしまう結果をもたらすようである。この傾向は他のブロックでも確認することができたことを考え合わせると，現状の五輪種目不採用という事実とそのことにおける国際的な理由づけが，一種の思考基準のバイアスとなっていることがその背景にあるのではないか。

ここで報告したオリンピック種目における「野球・ソフトボールを復活させるべきかどうか」といったテーマでの討論では，反対側が問題点を提起して，それに対して賛成側が答えるといった質疑応答が展開された。このテーマに限らず，今回設定したテーマの多くは，事象に対して反対意見や事実，理由などを列挙しやすいものだった傾向は否めない。賛成側は，道義的に是という立場での論証に至ることから，具体的な論拠を見出しにくかったのは事実であろう。その意味では，授業運営側も「ディベート形式」での経験値が不足していた感が残った次第である。

４．ディベート形式討論会授業の課題と改善点

４．１　討論会授業についての説明

教員によるデモンストレーションを実施した授業では，授業の後半を討論形式の説明を施し，「ディベート形式討論会」の準備として，どの様な情報を収集するのが効果的かを予定したテーマに沿っていくつかのキーワードを提示し，授業準備用のメモ用紙に記入させることを試みた。しかし，多くの学生がその情報をきちんと書き留めるわけでもなく，そうした確認を教員側も怠ってしまったことから，討論授業の準備段階における積極的な態度形成に至らなかった。その結果，討論授業が開始されても，情報収集不足や論点整理といった準備が不十分のまま討論を展開することになり，討論形式授業の目的達成にはかなり不十分な結果となってしまった。

今後の改善点としては，テーマについて今の自分がどの程度の情報を持っているのを書かせるようなワークシートを事前準備し，そのワークシートを確認するだけで討論に至ることが可能かどうかについての評価（自己評価含む）を設定することが必要であろう。また，教員によるデモンストレーションを，討論の緊張感や面白さといった表面的な伝達だけでなく，そうした討論に至るために教員がどういった準備を展開しているのかをわかりやすく説明するような丁寧さが求められるのではないかと思われた。

４．２　討論会授業実施上の課題

前述したように，履修学生たちの討論に備えての情報収集や発表者同士の打ち合わせなどの事前準備が不足気味であった。この原因としては，担当教員の関与度にも大きな問題が含まれており，一部の教員では全ての作業を学生達に一任してしまい，円滑なコミュニケーションを怠っていたことが考えられる。そのため

前述のような消極的な討論がおこなわれ，その場しのぎとしか思えない内容となってしまった。その一方で，担当教員によっては「ディベート形式討論会」の前日までに，学生達に情報収集と自らの意見をまとめたものを提出させ１枚のレジュメを作成し（表５），当日の討論前10分間に学生達に意見を集約させる工夫がされていたところもある。

今後の改善策としては，担当教員の役割として何をどの程度まで学生に指示をして実行させるのか。また，担当教員が学生達にどの程度の討論をさせたいかを計画して，教員自らが資料等を準備するなど，担当教員の指導内容を共通化する必要がある。

ただし，こうした対応を施しても，発表時にどの内容をどういう順で話を展開するかといったことや，質問や反論に対応できるだけの本当の理解力や表現力，さらに重要な問題としては，学生自らそのテーマに対する思い入れのような主体性が欠けていては，形式的な準備を重ねてもいい討論には至らない。また，人前で自分の意見を述べるといった基本的な態度形成そのものに不慣れな者が多く，本形式授業に対する学生たちの負担感は高かったのは事実であろう。

また，討論形式の成否には司会者役の教員の統制力は欠かせない。今回用いた方法では，賛成側と反対側双方の発表が終了してから，各々の論点を整理し，どういった観点での議論が成立するのかといった，一種の”交通整理”を行った上で，双方に質疑応答を促し，意見交換を活発化させるような質問を投げかけなければならない。しかし，実際には，司会教員自らの意見を主張し，学生たちの議論を引き出せなかったり，どちらか一方に質問が集中したりするなど，司会役として不適切さが散見された。確かに学生達の情報収集不足で，活発な討論が進まない中，司会役を初めて体験する教員としても，どうにか学生から意見を引き出さなければならない苦労はある。しかし，テーマにそぐわない発言や判定を決定付けるような誘導的な発言には注意しなければならないのは当然である。また，討論に参加していない聴衆役グループ学生たちへの指示として，メモの取り方や判定の方法など基本的な作業や聞く態度，発表者の発言における重要なポイントの再確認など，司会者としてその「ディベート形式討論会」を円滑に運営するための気配りは欠かせないものがある。

表５　ディベート形式討論会におけるチューター教員指導用レジュメ

2020年五輪の東京招致【自チーム＝反対】
☆は自チームの意見 ★は敵チームの意見（想定） ⇒自チームの反論　　→敵チームからの反論（想定）
★日本のスポーツが活性化される ⇒余暇活動消費の第１位がパチンコ。スポーツする雰囲気は薄い。五輪時には国内が盛り上がるが，その後の継続性は低い。 ⇒欧米の場合，日曜日は安息日で店も開いていないからスポーツするという土壌があるが，五輪によって日本がそんな国になるとは思えない。
★震災復興のシンボルになる ⇒「頑張りました！」というメッセージは多少伝わるが，五輪開催に使うお金は原発対応を含めた復興資金にすべき。 ⇒五輪が終わったら復興への努力も消えてしまう恐れがあり，近い将来の東海地震などへの備えも疎かになる。 ⇒多額のお金をつぎ込むことで，2004年アテネ五輪後のギリシャのような借金大国での政情不安に陥る可能性もある。
☆五輪の中枢の欧州から遠すぎる。16年夏がブラジル，18年冬が韓国と遠方開催が連続することのデメリット大きい ⇒五輪はどの大陸でも開催する意味があるので，場所は関係ない。 →この地図を見ると日本がどのくらい離れているかが一目瞭然なので，年寄りの多いIOC役員には負担
☆開催までの経費の問題。復興資金だけでなく，現状の社会問題解決にそうしたお金は回すべき。スポーツ以前の生活にすら苦しんでいる人々が多いので（生活保護者だけでも年間３兆円もかかっている）。 →社会問題はきちんと税金などでまかなうべきで，スポーツによる「夢」によっての活力の方が大事。 ⇒ならば，五輪選手は皆，社会のためにどれだけ貢献しているのか？一部の選手や元選手の活動は聞くが，毎回何百人も出場していて，社会のために活動しているという話を聞いたことがない。

司会について，特に何を注意して討論を進行させなければならないか，といった共通の見解や規則は設けなかった。しかし，各ブロックで司会者の采配によって討論の進行にかなりの違いがあったようにも感じる。今後は，司会進行の方法についても一定の規則に則って，どのブロックにおいてもある程度同じレベルで討論が実践できるような方法を考える必要がある。

「ディベート形式討論会」授業は，教員による討論会デモンストレーションからはじまり，学生たちによる討論の実施という経緯となったが，こうした実践教育を通して，学生達の意欲を高いレベルで維持させることの困難さに直面した。「この程度の準備で大丈夫であろう」や「はなから真っ当な討論をするつもりはない」など，面倒くさいといった態度をありありと見せる学生達もいた。そして，自分の意見が上手く伝えられなかったり，予測していた内容とは異なる質問を受けたり，思っていたい以上に討論に苦戦していた学生達も多かった。

しかし，この経験から学生達が得たものは討論の難しさだけではなく，今後のコミュニケーションにおいて多くの気付きの機会でもあった。例えば，就職試験の面接に備えて，あるいは教育実習の保健の授業に備えて，何を準備しなければならないかについては多少理解できたであろう。また，これまで分かっていたつもりでいたことが，改めて調査することで理解を深め，より正確な情報を発信することの重要性を感じたはずだ。決断された立場で，その正当性や妥当性を実証し，また，相手の意見を集約しそれに対する答えを見つけ，与えられた任務を遂行するコミュニケーション能力は，まさに社会に出てから必要な処世術である。今後も初年次教育では「ディベート形式討論会」で得られた経験を活かし，多様な教育効果を得ることの出来る授業を展開するために，様々な工夫を凝らした初年次教育内容の開発に邁進していきたいと思う。

5．まとめ

2007年度から国際スポーツ文化学科では初年次教育を積極的に展開し，一定の成果を見るようになったが，不十分な点は，「主体性」といった社会人基礎力養成の上で最重要視されている内容である。そのことを少しでも改善できる可能性がある授業形式ということで，多くの大学では発表や討論形式の授業方法が導入されている。そこで国際スポーツ文化学科の初年次教育では発表形式は導入されているものの，さらに主体性に関わる討論形式の授業導入による教育効果を確認すべき時節と判断し，2011年度の授業において，「ディベート形式討論会」を展開した。

この授業では，学習方法や学習成果のまとめ方を理解することを目標に，以下のことを目的とした。

- テーマに沿った自分の意見を調査し，それをまとめ発表する。
- 相手の意見を聞き，それに対する意見を述べる。
- 仲間と協力して，説得力のある表現をおこなう。

つまり，問題意識を持って情報の収集や整理・選択をおこない，自分の意見を他者に分かりやすく伝えることを目的に，仲間と協力しながら，主体的に情報収集に取り組み，幅広い考え方やものの見方を養い，積極的にかつ分り易く意見を述べ，相手の質問や反論に的確に答えるといった，総合的なコミュニケーション能力の育成に主眼を置いた。

ディベートするためのグループはチューター教員別とし，全員が毎回意見を述べられるように，学科全体を３分割するなどの工夫や，討論そのものの評価を示す判定用紙の導入など，授業としての形式を整えて実施した。

「ディベート形式討論会」を実施して，本学に入学してくる学生達が中学校や高等学校で教育されてきたであろう基礎的な授業態度が，実戦向きに能力開発されていないことが明らかとなった。確かに，高校まで一方向の一斉展開授業形態から，実践活動を通じてスキルアップに重点が置かれた授業形態に変わり，多くの学生達が戸惑いを見せたのは事実であった。しかし，最初は消極的な学生達でも，積極的に授業に取り組む姿勢を身に着けさせる指導が重要で，そのために，学生達が積極的に討論に挑めるような環境の整備が必要で，授業進行における担当教員の支援・協力は必要不可欠であることは，今回の授業実施を経て強く印象付けられた次第である。

今後，「ディベート形式討論会」を国際スポーツ文化学科の初年次教育に積極展開する場合，以下の問題点を改善しなければならない。

- 「ディベート形式討論会」授業実施のための説明の充実化（教員デモンストレーションとそれを成立する準備の重要性の提示や，情報収集の実践を促すとともに担当教員の補足的な支援）
- 学生が主体的な討論への取り組みを実現するためのグループ内での連携
- 円滑な討論を促すための司会役教員の統制力向上

や，全体指導を円滑化するための教員同士の連携と指導格差の是正

初年次教育の新しい試みとして実施した「ディベート形式討論会」は，運営上の多くの問題点を明らかにしたが，一方で大学生としての総合的なコミュニケーション能力や適切な学習態度の必要性も明らかにできた。このような授業を通して，定期試験の点数だけでは見極めることの出来ない性格・能力，学習態度を把握することができる。これは学生指導の立場からも，初年次教育における重要な役割の一つであろう。こうした基礎的学習態度形成を，大学時代の初期段階に習得することにより，学生生活全体へ活用できるようになることも，初年次教育の重要な使命だと思われる。

参考文献

［1］土居　陽治郎・松井　完太郎・木村　寿一：国際武道大学における初年次教育の実践報告とその将来展望についての提案国際武道大学研究紀要第25号，2009，69-84.

［2］全日本ディベート連盟ホームページ（http://www.coda.or.jp/）.

［3］日本ディベート協会ホームページ（http://japan-debate-association.org/）.

（2011年12月13日　受理）

国際武道大学研究紀要　投稿規定

1．紀要は原則として年１回発行し，寄稿の締切は各年度10月１日（１日が土・日曜日にあたる場合は翌月曜日に繰り下げる）とする．
2．投稿は原則として本学教員に限る．但し，共同執筆者に本学以外の者を含む事は差し支えない．また，大学院修了者で本学の研究生として在籍している者及び本学大学院生は，指導教員と共著であれば投稿することができ，その場合，筆頭著者となることは差し支えない．
3．研究統括委員会において必要と認めたときは，上記２．以外から寄稿することができる．
4．投稿者は，「国際武道大学研究倫理規程」，「国際武道大学「ヒトを対象とする研究」倫理規則」，「国際武道大学「動物を対象とする研究」倫理規則」を遵守するものとする．
5．投稿原稿の種類は次のとおりとする．総説，原著論文，短報，研究報告，資料，講座，展望，書評，その他
6．掲載原稿の採否は研究統括委員会において決定する．但し，原著論文及び短報については，それに先立って学内及び必要に応じて学外の，２名の審査員により審査を行うものとする．
7．論文の形式は所定の原稿執筆要領による．
8．投稿の原稿・図表は，原本のほかにコピー２部をつける．
9．掲載原稿原本は紀要発行時まで研究統括委員会紀要編集担当者が保管する．
10．著者校正は３回とする．
11．目次・本文・英文抄録・和文抄録・キーワードはインターネット上に公開（PDF）し，非営利機関に限りその利用を認めることがあるものとする．
12．『大学教育研究プロジェクト報告書』については，別に定める投稿規定によるものとし，巻末に一括掲載する．
13．別刷は表紙付き50部は無償とするが，それ以上を希望する場合は著者負担とする．

投稿原稿の種類

総説（Review）：ひとつのテーマに関連する多くの研究論文の総括，評価，解説．
原著論文（Original Article）：研究結果，研究方法，研究材料，自他の研究成果の解釈等において新知見または創意が含まれているもの．及びこれに準ずるもの．
短報（Rapid Communication）：研究過程を将来の方向づけを行うためにまとめ予察的な考察を加えたもの，又は，研究成果の早急な公表を必要と判断されるもの．
研究報告（Report）：研究結果，研究方法，研究材料，自他の研究成果の解釈等を論じたもので，必ずしも審査を必要としないと判断されるもの．
資料（Material）：特定の目的に限定されず，将来の研究に広く利用されるべく収集又は集計された情報で，新知見・予察的な考察等を含む必要はない．
講座（Lecture）：既に学会等で確立された又は定説となった理論・研究方法等について，わかりやすく解説的・説明的に述べたもの．
展望（View）：将来の研究発展を促す新しい研究方法・機器などの紹介．
書評（Book Review）：近刊の単行本，学術論文等で，特に紹介を要するものの内容抄録，批評．
その他（Others）：上記いずれの種類にも該当しない原稿で，研究統括委員会において掲載を認めるもの．

原稿執筆要領

1．和文原稿はＡ４版400字詰原稿用紙を用い，縦または横書きとする．ワードプロセッサーを用いる場合もＡ４版の用紙を用い１ページあたり，24字×22行（横書き），または29字×25行（縦書き）で作成する．原稿には英文抄録（400語以内）・和文抄録（600字以内）をつける．和文中に出てくる欧語はタイプする．
2．欧文原稿には英文抄録（400語以内）・和文抄録（600字以内）をつける．
3．欧文はすべてダブルスペースでタイプ又はワープロ書きとする．
4．キーワード（10語以内）は英文抄録のあとにつける．
5．ランニングタイトルは，和文原稿は和文を30字以内，欧文原稿は欧文を40字以内とるする．
6．図表中の文字と説明は和文または英文とする．作図は縮小製版できるよう鮮明なものとする．図表は原則として１つ１つを別の用紙に記載し，挿入する箇所を原稿本文中の欄外などに明確に指定する．また，アート紙を用いた写真図版については研究統括委員会の裁量により実費を著書負担とすることもある．
7．引用文献は本文の次にページを別にして入れる．
8．図表説明文はページを改めて引用文献の次に入れる．
9．図表・写真などはページを改めて図表説明文の次に入れる．

研究支援委員会

委 員 長　　魚住　孝至

紀要編集担当

田中　寿朗　　小磯　　透

この研究紀要に関する問合せは下記あてに願います。
All communication relating to this journal should be addressed to the International Budo University Journal, 841, Shinkan, Katsuura, Chiba
299-5295, Japan
The International Budo University Journal, No.27

国際武道大学研究紀要　第27号

2012　年　3　月　25　日　印刷　　2012　年　3　月　31　日　発行

発行者　蒔　田　　実　　印刷所　㈱　正　文　社

千葉県勝浦市新官841
国際武道大学　　千葉市中央区都町１丁目10番６号

発行所　　国　際　武　道　大　学

〒299-5295　千葉県勝浦市新官841　　ＴＥＬ　0470－73－4111
ＦＡＸ　0470－73－4148

A Research on Essentials of Budo in Japanese Culture as found through Studies on *Shinkage Ryu* and *Itto Ryu*

Represantative: Takashi UOZUMI
Fellow researchers: Yukitoshi TATSUGI, Teruo OBOKI, Tomoo YOSHIDA, Katsuhiro SENDO, Joubon Park, Tetsuya NAKAJIMA, Nobuyuki CHONAN

Abstract

This report is a summary of "A Research on Essentials of Budo in Japanese Culture as found through Studies on *Shinkage Ryu* and *Itto Ryu*". The project was supported with a Category (C) Research Grant for Fundamental Research, granted by the Japan Society for the Promotion of Science from 2008 to 2011.

In Chapter Ⅰ, we have mentioned about the purpose of our project work. Our research focuses on the training methods of two major schools of swordsmanship, that is, *Shinkage Ryu* and *Itto Ryu* in the *Edo* era (1603−1867). From the second half of the 16th to the first half of the 17th Century, swordsmanship was practiced according to individual education system including practiced of fencing models patterns, or paradigms (*kata-geiko*). Various schools of swordsmanship were born another than these two schools. Analyzing dozens of models, paradigms (*kata*), of *Shinkage Ryu*, we have verified what samurai aim at through practice of fencing models. Furthermore, in the second half of 18th Century, *gekiken* (a new fencing style using protectors and bamboo swords) was popularized. From suggestions of *Itto Ryu*, we have shown how traditional swordsmanship changed with the introduction of *gekiken*.

In Chapter Ⅱ, a summary of the results of our project work from 2003 to 2007. The Chapter Ⅲ and Ⅳ include the summaries of our four year project work (2008−2011). In Chapter Ⅴ, we have summaried the results of our project work (Chapter Ⅱ, Ⅲ)：1. *Shinkage Ryu*, 2. *Itto Ryu*, 3. *Niten Ichi Ryu*, 4. Changes on swordsmanship style around 1750−1860's. 5. Succession and transfomation of traditions in Japanese Budo.

From the above results, we will further discuss essentials of Budo in order to clarify several issues or points to consider.

キーワード：武道文化　流派剣術　新陰流　一刀流　形稽古　撃剣

ものであろう。剣道形は、竹刀が剣の代わりであることを意識させるものでもある。

まとめにかえて

これまでの研究によって、新陰流と一刀流の元来の形の実際がほぼ明らかになってきた。文献から推定復元した元来の構えと遣い方が、両派とも今に伝承されるものとは異なっているのは、江戸後期に変容したことによるようである。

上泉が「陰流において別に奇妙を抽出し」と言っていたように、当初は相手に勝つ実戦的な形の中から勝てる原理を取り出し、相手の太刀の下へと踏み込む覚悟を持ち、間合を見て取って上下左右に相手の打ちをかわし、身を転じて見事に勝つ。一刀流でも打ち込んでくる相手の太刀を下から受け、体全体の働きで太刀を手前に廻して相手の太刀がおのずと「切落」されるべく遣う。流派の形は、これで行くと決めた覚悟を表現するものであり、最初から最後まで一貫する原理がある。「非あれば即ち打たれる」（『新陰流表討太刀目録』）、刀であれば切られるので、隙がないように稽古する。形稽古は決して約束稽古ではなく、いろいろな場合を想定し幾様にも変化させた「砕き」で、その形が有効か否か吟味・検証する。流派の形には最初にその流派の原理を示すものを置き、他流のものを取り込んだと思われるものも含まれているが、最後はまた最初の形に戻る。相手の動きに合わせて無理なく勝てるように、身と心を磨いて技に熟達して「おのずから」動けるようになると、「無心」と表現される自在な境地に開かれる。相手が技を出す前に見抜いてその技が出せないようにすれば、戦わずして勝つことが出来る。形稽古の最後はただ詰めるだけで終わる。技を脱することを示すのである。

このように見れば、剣術は相手と打ち合う術から、自らの身と心を磨き、相手の技が出る前に見抜いて対処する高度な道になっていると見てよい。それ故、柳生宗矩は剣術鍛錬の至極は「無心」とし、宮本武蔵は鍛錬を磨き遂せては「空」の自在な境に達すると言うのである。

近世初期、流派剣術が成立する中で、剣術鍛錬は、確かに武士の人格修養の道となっていたのである。ここに日本の武道文化の成立基盤が見出せるのではないか。

剣術鍛錬が武士の人格修養の道であるという理念は、以後撃剣にも受け継がれる。そして現代剣道は「剣道は、剣の理法の修錬による人間形成の道である」（「剣道の理念」）を標榜する。さらには「武道憲章」も「武道は、武技による心身の鍛錬を通じて人格を磨き、識見を高め、有為の人物を育成することを目的とする」（第一条）と謳っている。これらは理念であって、実際に技に即してどのように修錬すれば実現できるのかこそ、本当は問題である。

本研究で解明した流派剣術の元来の形稽古のあり様が、一つのヒントになれば幸いである。

（文責　魚住孝至）（二〇一一年十二月十三日　受理）

も鍛練法も流派剣術とは異なるが、竹刀は刀だとする観念と武士としての自覚の養成という理念は受け継いでいた。幕末になると、撃剣は広く普及する。幕府も軍隊の近代化を図る必要に迫られて、「講武所」を設立した。ここで重視されたのは、洋式の砲術と撃剣であったことは、撃剣が武士の心得を養成する意味を持つと認識されていたことを明示している。講武所では諸流を越えて一同に会して稽古する場が作られ、竹刀の長さも統一された。実質的に近代剣道の形が幕末の段階で出来上がっていたのである。

6．近・現代剣道における伝統と変容

近・現代も含めた武道の歴史に関しては、Ⅳ．②「武道の歴史とその精神　概説」とⅣ．⑫「武道の比較文化論的考察」に概括的に論じている。

明治維新によって武士階級が解体され、近世武術は終焉を迎えることになる。ただ撃剣は幕末までにプレ近代化され、維新を担った下級武士や境界身分層にも広がっていたので、警察、軍隊、結社、高等学校の部活動などであまり変わることなく受け継がれていた。けれども流派の形稽古は幕末のように併行して行われることはなくなった。

剣道の近代化にとって画期となったのは、日清戦争直後の一八九五年大日本武徳会が設立されたことである。参加した六割は剣術関係で、柔術、弓術、古流も合せて武術が統括された。この全国組織は技量特に優れた者に「範士」・「教士」の称号を授与する中で、流派を超えた新たなピラミッドが築かれることになる。

一九一一年、武徳会はいろいろな流派の形を基にして「大日本帝国剣道形」太刀七本小太刀三本を制定した。「機を見て打つ」ことは受け継ごうとした。これ以後、各道場ではそれぞれ稽古していた流派の形に代わってこの制定形が稽古されるようになる。

また、一九一一年から中学校でも撃剣・柔術を教えることができるようになり、それぞれの専門教員が武徳会の武術専門学校と東京高等師範学校で養成されるようになる。学校教育に合わせて集団指導法が工夫された。これまで道場で基本的には師範に一対一で教えられていた稽古法とは大きく異なるものであった。

また、一九一〇年代後半から、剣道でも高等学校・専門学校・師範学校などの学生を中心として競技会を盛んに行うようになり、三人による審判法なども工夫された。

以上の過程を経て、剣術は近代的に作り換えられ、近代剣道が成立することになる。この近代剣道が現在まで受け継がれている。

一九四五年の敗戦から十年近く、剣道は占領軍によって禁止されたので、「スポーツとしての剣道」を標榜して復活するという歴史があった。そのため現代剣道は流派剣術の伝統からさらに離れて、競技の性格を強めたものとなっている。

今日、剣道は竹刀打ちとともに日本剣道形を行っている。剣道形は大日本帝国剣道形と同じで、段位審査の科目にもあるので、木刀や刃引きを用いて稽古・演武されている。ただやり方について詳しい加註を付した教本があるので、形は決まったやり方になりがちである。しかも元来さまざまな流派の形を基にして大正元年に制定された形なので、一貫した原理を見出すのは難しい。けれども木刀を持って二人で行う形であり、「機を見て打つ」ことを旨とするので、剣の操作と打ち込む間合と呼吸を知るにはよい

捨てられ、実戦的に吟味していた形の稽古も、次第に決まった形になってくる。技を遣う際の身心のあり様が問題にされ、禅僧との交流もあって「無心」が強調されてくる。技を出す前の「機前の兵法」や相手の技を出す前の「枕をおさえ」が言われる。切り合う武術よりも、戦いに備える武士の人格修養としての性格を一層強めてくる。仏教や儒教の道に伍して「兵法の道」が言われ、個としての武士の、日常から隙なく自らを磨き生涯深めていく修練が言われる。『兵法家伝書』や『五輪書』などの理論書が著され、各流派が確立する。

十七世紀後期、次の世代になると、兵法師範となった流派では、流派の形と理論を受け継ぐことが主になった。一刀流では小野忠常の時に形は五十本に倍増したが、それは従来は基本的な形を稽古の中で変化させて検証していたものも一つの独立した形として整理して成立したと思われる。十七世紀後期に新陰流と一刀流はともに形も伝書も確定して、以後代々それらが受け継がれることになる。また実際に刀を抜く場面がほぼなくなったことに対応して、新陰流の四代目にあたる針ヶ谷夕雲は実際的な術の心得を言わずに、「心法」を言う無住心剣を言い出した。この頃から、稽古の中で流派の形をその都度変化させて吟味・検証するという意識が希薄となり、形として固定化し、やがて「華法化」していった。

5. 近世後期、撃剣の展開

十八世紀初期から防具を着けて竹刀で打ち合う撃剣が工夫され、中期に一刀流中西派などにも取り入れられてから撃剣は本格化し、十九世紀には大きく展開し、近代剣道へとつながることになる。従来、流派剣術の形稽古の形骸化を打開するため、撃剣が生まれたと言われることが多かったが、木剣や袋撓を以って形を稽古する本来の流派剣術と、防具を着け竹刀で打ち合う撃剣とは、担った層もその技術的稽古内容もかなり異なる。

一刀流の小野宗家は、十八世紀末に中西派一刀流が竹刀打ちを専らにしていることを「修行の障り」として禁じる達し書を出している（Ⅳ．⑦）

他方、十九世紀に中西派に学んで撃剣を「六十八手」に体系化した千葉周作は、形（組太刀）の大事さを強調する。「組（形）を以て定格を立て」「太刀の取様より一身の体作り、手足の働きより、撃たり、払たり、突たり、勝口の収め様に至るまで、其格を立て、初学の者より之を教え」る。「試合に至りては定格を本として変化活用して他流と手合」し、その上「心気・気海の精錬に至りては、組（形）を静に存し、動に察して自得」せよ（『北辰一刀流組遣聞書』）。しかし、千葉の一刀流の形の遣い方は、中西派とは異なり「突きにて勝ちを取る事を専らとす」（『組遣様口伝書』）とする。（現在、小野派一刀流の伝承とされる形の遣い方は北辰一刀流の遣い方と同じようである。）

Ⅳ．⑧「十八世紀における武術文化の再編成―社会的背景とその影響―」は、江戸中期の武術奨励の流れの中で、下級武士（浪人を含む）や境界身分（郷士・豪農層）が実際に打ち合うこと、競って実力を見せることへの関心が高まる中で撃剣が広まり、十九世紀になると武者修行も始まり、大きな町道場も出現し、やがて藩校などにも採用されて展開していったことを論じた。技法

流派剣術の形成期のほぼ最後に現れ、養父・宮本無二斎の二刀の当理流から出発し、実戦勝負から理論の展開まで、一代で、流派剣術の形成過程を凝縮している感がある。壮年期から三つの藩で大名の客分として遇されたが、どこかに定着して流派として大きく展開させたわけではなかったが、先行流派を見ながら理論化を深めた。

【二天一流の刀法と術理】

養父以来の二刀の形稽古を主とするが、若い時の『兵道鏡』から実戦的な心得は別に教え、さまざまな相手に応じた心得を幾つも挙げていたが、次第に相手が技を出す前に抑える「枕のおさえ」を言うようになる。術の基礎となる「身なり」「目付」「心持」を詳しく論じ、全身隙（すき）なく居付かず即座に動ける「生きた体」の鍛練を強調する。形については『兵道鏡』は七本（増補版では裏の形五本も併せる）だが、『五輪書』は五本の形「五つのおもて」を示し、その都度最も自然な「太刀の道」に即する感覚を摑むとともに、相手との間合を知ることが大事だとする。形稽古の意味を強調するとともに、構えや形の数に囚われぬように注意する。他流を批評しながら、いつでも通用する術理を説く。柳生宗矩の「大の兵法」、「空」の理念など取り入れつつ、剣術論から武士の心得としての武士道論へと展開している。

4．近世初期の流派剣術

近世の流派剣術全体についての研究は、先行的に大まかにはⅡ．④「東アジアにおける武術の交流と展開　覚書」とⅡ．⑤「剣術にみる「武道」の思想」にまとめて書いている。

流派剣術は、戦国末の統一期から江戸幕藩体制確立期まで約一世紀かけて、新たな武士の文化として成立した。新陰流流祖の上泉は、諸流を学んで技の原理を摑み、相手と一体の中で自らを顧みつつ相手との関係を読む、これまでとは位相の異なった見方を切り拓いた。新陰流の形は、相手の太刀の下に踏み出し、上下左右に相手の打ちをかわし、受けて、打ち勝つ。柳生宗厳は、それを受けて「無刀」の工夫をし、新陰流の形を最後は技を脱するように仕上げた。彼等は大軍勢の合戦では敗れた武将であったが、個としての独立を保って「英傑」「英雄」の剣たらんとしたのである。上泉は禅語を取り入れて、「殺人刀」「活人剣」を言うが、この用語は『一刀流兵法目録』にも見られる。一刀流は「切落」を原理とする別の流派だが、二人の間合による組太刀の中で自らを顧みつつ相手との関係を読むのは同じである。武術は相手に勝つより、武士として何にも負けぬ人格修養的な性格を持つようになったのである。

覇権を握った徳川家康は、対抗する諸大名の軍団の軍事力を警戒して、個によった武士の伝統を強調して、流派剣術を取り入れ、個人の武術鍛錬を奨励した。諸大名も集団軍事演習は憚（はばか）れる中で、有名武芸者を抱えて「武の尊重」の姿勢を内外に示すようになる。

江戸幕府が確立した十七世紀中葉になると、流派の兵法者は合戦体験のない将軍や諸大名の周辺に「御伽衆」や「客分」などとして召し出されたので、「兵法」に治世者としての意識を養成する意味も持たせて「大分の兵法」を言うようになる。合戦が起きる可能性が遠のく中で、合戦での具体的な心得は切り

調査では、一刀流小野宗家の伝来原本（春風館文庫蔵）を直接調べ、山岡鉄舟関係地を訪れ、無刀流の諸資料も調査・収集した。

【流派の形成と展開】

(1)形成過程　流祖・伊藤一刀斎により創始され、小野忠明が受け継いだが、分派も多い。十七世紀初頭、忠明が将軍家兵法師範となって以降、小野家が継ぐことになる。組太刀は初代・忠明の時は二十五本であったが、四代までには「表五十本」が確立していた。一刀流の組太刀は、元来は「五点」（妙剣・絶妙剣・真剣・金翅鳥王剣・独妙剣）五本を根本とするが、その五本を各代が工夫する中で組太刀が増え、それらを五本一組としてまとめて「表五十本」が作られたようである。十七世紀末期の小野家四・五代の注釈や三・四代の弟子の津軽家文献から、当時の組太刀の仕様が解明される。

(2)流派の組太刀の変容　十八世紀後期に中西派一刀流が防具を着け、竹刀で打ち合う撃剣を導入した。最初は流派の組太刀の吟味の意味づけだったが、小野家六代は刀法を変質させると警告した。十九世紀の北辰一刀流は撃剣をさらに展開、近代剣道の母胎となる。幕末から明治初期の山岡鉄舟は北辰一刀流を学び撃剣を深めて自得して「無刀流」を称したが、後に小野家九代に出会ってそれが一刀流元来の精神に合致することを見出したとして「一刀正伝」を冠した。

【組太刀の研究】

(1)術技の研究　一刀流は十八世紀後期以来、撃剣の影響が強いので、元来の組太刀の仕様はそれ以前の文献に基いて厳密に検証しなければならない。組太刀の仕様を記した十七世紀末期の二文献を照合させると、「セイガン」の構えは「一重身（ひとえみ）」で、左の肩を引き足を踏み割った形で切先が相手の左目に当てるように斜めに構え、「切落」は、相手が打ち下ろすのに対して、上から打ち下ろすのではなく、セイガンから手の内を変えずに相手の方より手前へ回るように太刀を平行移動させて、車を廻すようにして受け取り、結果として相手の太刀が自然に切落されるようにする刀法だったと推定される。この仕様で「表五十本」の最初五本から最後の組太刀「切落」五本も文献にある表現に照合して復元出来、「切落」が流派の組太刀を貫く原理であったこと、また一刀流の古い組太刀「三重」に「切落」の原形が見られることが明らかになった（Ⅳ．⑦）。

(2)新陰流の勢法との共通点　基になった原型の形「三重」を残して稽古している。流派の組太刀を貫く原理がある（新陰流「轉」、一刀流「切落」）。組太刀には他流の形も取り入れた上で、最後には再び流儀の形をまとめる。多くのバリエーションを作るのでなく、原理に則った形にして、最後には流儀の形のエッセンスを一本に集約して最後は詰めるのみで終わる。

3．二天一流剣術の研究

宮本武蔵の二天一流については、代表者の著作二点（Ⅱ．③、Ⅳ．③）があるが、研究会でも論じられた。

【形成過程と展開】

宮本武蔵は、十七世紀初頭に諸国武者修行をして六十余度の勝負に勝って「兵法天下一」を称し自流を樹立したが、三十歳以後「なおも深き道理」を追求、六十歳過ぎに『五輪書』を著した。

督を継ぎ、尾張系では取り上げ遣い・下から遣いが定着して、流派の変容が見られる。十八世紀後期、尾張系では八代・厳春が古伝を探求、弟子の長岡房成が十九世紀初頭に古伝の各伝書に詳しい注解を付け、それを基に「内伝」（古伝）と「外伝」（試合勢法）を制定し、尾張柳生家の今日にまでつながる稽古法を作る（Ⅳ．⑥）。江戸系では十九世紀初期、九代・俊豊が「中伝」（福田文献）の伝書を遺している（Ⅳ．①）。

【新陰流勢法の研究】

流祖・上泉が「陰流において別に奇妙を抽出し、新陰流を号す」と記すので、まず新陰流の勢法に組み入れられた陰流の「燕飛」と新陰流の根本太刀「三学」を比較すると、敵の太刀筋を軸にして身を上下左右に転じて相手の太刀筋を抜けて勝つことが注目される。上泉の目録に言うように、相手の打ちに負けずと打ち合うのではなく、「敵に随って轉（転）変して一重の手段を施す」ことが見られる。しかも「三学」の元来の遣い方を推定・復元してみれば、「転じつつ一拍子に打つ」「合（が）っし打ち」（「十字勝ち」）で勝っている。柳生新陰流では「合っし打ち」を「轉勝（まろばし）ち」と言うが、足を踏み出しつつ間合を勝って、打ち込んでくる相手の太刀筋を軸に身を転じて上（うわ）太刀になる。上泉はこうした「轉」によって今までの諸流とは根本的に異なる位相に立ったと自覚していたようである。目録の序で、「予は諸流を廃せずして、諸流を認めず、寔（まこと）に魚を得て筌（せん）を忘るる者か。然るときは、諸流の位、別に莫（な）きのみ。千人に英、万人に傑たるにあらざれば、いかでか予が家法を伝えんや。古人豈（あに）道はずや、龍を誅（ちゅう）する剣、蛇に揮（ふる）はずと。」と書いている。上泉には実戦的な諸流の剣術から、その真髄を得て新たな剣の道へと昇華させたという自負があったようである。「英傑」のみが伝えるべき、争いに使う（「蛇に揮う」）ものではなく、より高尚なもの（「龍を誅する」）ものだと言うのである。

「九箇」「天狗抄」の勢法は、他流の太刀を取り入れたと思われるが、敵に「転変」して勝つのだと柳生十兵衛は『月の抄』で解説する。新陰流の表の勢法をまとめる「極意之太刀」六本の構成を見ても、敵の打ちを様々に抜けて勝つ。新陰流の極意とされる「轉（まろばし）」は身を転じ相手の太刀筋を抜けて勝つことと考えられる。最後の「八箇必勝」は真直ぐに一拍子で打つ「十字勝ち」で勝つ。「三学」から「八箇必勝」まで貫くものが「轉」なのである。

柳生宗矩は『兵法家伝書』で「我にあたらぬ積りをよく覚え、敵に打たせて却って勝つ」とし、敵が太刀を「右へまわせば右へ心が転じ、左にまわせば左に転じる」と専ら転じることを求める故、沢庵の「無心」を受容したと思われる。勢法の仕様を解明すれば、これらの理論が展開する背景も理解できるのである。

2．一刀流剣術の研究

一刀流に関しては、これまでほとんど知られていなかった十七世紀末の二文献を翻刻・紹介するとともに、これらに基いて一刀流の刀法の元来の仕様の基本を解明するとともに、山岡鉄舟の「無刀流」まで貫くものを明らかにした（Ⅱ．⑩）。また一刀流の組太刀の元来の仕様を具体的に推定・復元して、現在伝承されている仕様とは異なるが、これによって組太刀全体を貫くものと流派の組太刀の構成も見通せること、伝承の仕様は撃剣を取り入れた北辰一刀流の影響が推測されることを論じた（Ⅳ．⑦）。

新陰流について、流派の形成から主に江戸と尾張の柳生家によって伝承されて今日に至るまでの過程を、古文献に基づいて概観した（Ⅱ．⑥）。

新陰流の勢法について、現在演武されているのは、尾張柳生系統の伝承のやり方だが、その「三学」、「九箇」の勢法には、「取り上げ遣い」と「下から遣い」の二通りの遣い方がある。では二通りとなる以前の新陰流の元来の勢法はどうであったのか、古文献によって、逐一研究する必要がある。そこで、新陰流の勢法について、一本ずつの仕様を書いている尾張系の柳生利方『新陰流表討太刀目録』（一六八五）と江戸系の松平信定『新陰流兵法目録事』解説文（一七〇七）を比較対照することにした。この両文献は、それぞれ六十五歳、八十一歳の著者が、若い頃、父・兵庫助、師・宗矩に習った勢法の仕様を書いているので、内容的には寛永後期（一六三〇年代）に遡る遣い方を示していると考えられる。両文献の叙述を一文一節ごとに対照させて解釈し、伝承されている仕様も踏まえて推定復元し、他の文献で確証する方法を取った。こうして陰流の「燕飛」（Ⅱ．①）、新陰流の「三学」（Ⅱ．②）、「九箇」（Ⅱ．⑧）、「天狗抄」、「極意之太刀」（Ⅳ．①）の元来の仕様を解明した（各論文には復元した演武の分解写真も併せて掲載）。以上で「表の勢法」（本伝）全てを解明したが、現在の伝承のやり方とはかなり異なっていた。さらに柳生宗厳の目録に付された「二十七箇条截合」について、尾張柳生中興の祖とされる長岡房成が宗厳の目録にあるメモ書きを注釈して、その仕様を推定した手記を残していた。これを基に、吉田氏が「二十七箇条」は本伝を応用・吟味する「砕き」に相当することを論じた（Ⅳ．⑥）。

新陰流の勢法を貫く真髄については、吉田氏の覚書（Ⅱ．⑦）を掲載した。学会発表は、「三学」の復元方法（Ⅱ．⑨）と「新陰流勢法」（Ⅳ．④）について、二度行った。

調査では、陰流の愛州移香斎の出身地、柳生の庄、尾張柳生家、尾張徳川家蓬左文庫を訪れ、諸資料を収集した。

【流派の形成と展開】

新陰流は、流派の形成過程でも、社会への定着過程でも最も初期であり、他の流派のモデルとなる主導的な役割を果たした。

⑴形成過程　流祖・上泉伊勢守は、十六世紀半ばに諸流を学ぶ中で陰流から核となるものを取り出して新陰流を創始した。上泉は上野の武将であったが、合戦に敗れた後、新陰流を広めるため上洛して将軍足利義輝、正親町（おおぎまち）天皇の天覧を受け、「兵法天下一」の称号を得る。二代柳生宗厳は十六世紀末徳川家康に招かれて、その技を賞賛され、五男・宗矩を出仕させた。宗厳によって流派の形（勢法）と目録、口伝書が整備された。さらに三代柳生宗矩、柳生兵庫助によって、その思想的意味も含めて展開された。

⑵社会への定着　江戸幕府が成立すると、宗矩は二代・三代の将軍家兵法師範となり、兵庫助は尾張徳川家の兵法師範となり、以後江戸と尾張の柳生家で代々受け継がれていくことになる。十七世紀前半の宗矩・兵庫助までが形成期である。四代目の十兵衛や連也以降は流派伝承の形が見られる。十八世紀初頭までは宗矩・兵庫助に学んだ子や弟子が生きており、術技はほぼ変わることなく伝承されていた。

⑶流派の変容　十八世紀初期になると、宗矩・兵庫助に学んだ世代は亡くなって、江戸柳生家では宗矩の血統は絶えて養子が家

（日本武道学会第四十二回大会　大阪大学）

⑤調査報告（柳生新陰流・心形刀流・陰流関係）

年報第十五号（一三七～一四八頁）

⑥吉田鞆男「長岡房成（桃嶺）手記による新陰流「二十七箇条截合」に関する考察　―本伝の砕きについて―」

同号（一一九～一三六頁）

二〇一〇年度

⑦長南信之・立木幸敏・魚住孝至「小野家伝書から見る一刀流剣術」

年報第十六号（九八～一三四頁）

二〇一一年度

⑧魚住孝至「十八世紀における武術文化の再編成―社会的背景とその影響―」

（『十八世紀の日本の文化状況と国際環境』

（思文閣出版）三六七～三九二頁）

⑨学会発表　立木幸敏「小野家伝書から見る一刀流剣術」

（日本武道学会第四十四回大会　国際武道大学）

⑩特別講演　魚住孝至「武道の比較文化論的考察」

（日本武道学会同上大会）

⑪魚住孝至「日本の武道の比較文化論的考察」

（『武道論集』第3集一一～五〇頁）

⑫魚住孝至「武道の比較文化論的考察」

（日本武道学会『武道学研究』第四十四巻三号一～一四頁）

新陰流に関しては、これまでの三回の勢法研究（「燕飛」、「三学」、「九箇」）と合わせて①によって、本伝の勢法全てを一本ずつ文献に基いて推定・復元することが出来た。新陰流の勢法が、相手の太刀筋を軸にして転じる「轉（まろばし）」を根本として組み立てられていることが明確になった。その成果は④で学会発表した。⑥は、この本伝の勢法を変化させて応用した「砕き」を考察して、実際の稽古のあり様を明らかにしようとした。

一刀流に関しては、これまでの吉田氏の研究（Ⅱ．⑩「小野派一刀流について」）を踏まえながら、⑧では、まず基本の構え「セイガン」と流派の刀法の眼目とする「切落」の元来の仕様を明らかにするとともに、「表五十本」の最初の五本から組太刀「切落」五本までの形の仕様を復元して、それらが一刀流の組太刀を貫いていることを明確にした。その成果は、⑨で学会発表をした。

③は、近世初頭、新陰流や一刀流の影響も受けながら独自の剣術論を展開した宮本武蔵の研究である。②は、中世から現代までの日本の武道文化の展開を概観したもの、⑧は、本研究の基盤が十八世紀にいかに再編成されたのかを総括的に論じたもの、⑩、⑪、⑫は、それらを踏まえつつ、中国武術や近代スポーツなどとの比較もしながら、日本の武道文化の特性とその思想的意味を論じようとしたものである。いずれも本研究の武道文化の成立基盤をより大きな視点で問題にしたものである。

Ⅴ．研究成果の主題別のまとめ

Ⅱ．とⅣ．に掲げた研究成果を、主題別に整理して、これらの研究を通じて明らかになってきたことを簡単にまとめておく。

1．新陰流剣術の研究

Ⅲ．本研究四年間の調査一覧

二〇〇八年度から研究テーマを絞って「日本の武道文化の成立基盤―新陰流と一刀流剣術を通じて―」とした。科学研究費補助金・基盤研究(C)に採択されたので、研究をより効率化するため、二流派を分担して研究する体制とするとともに、基礎資料を確実にするべく、二流派の関係地を訪れ調査することにした。

研究は、吉田氏・仙土氏を中心として、新陰流については朴氏・中嶋氏、一刀流については立木氏・長南氏が、伝承術技を古文献に基づいて検証する研究・稽古会を毎月行うようになった。全員によるプロジェクト研究会は年に4回ほど開いた。

調査一覧

二〇〇八年度

・無刀流石田文庫調査（埼玉県狭山市・山崎卓氏宅）

・一刀流関係春風館文庫（金沢市立図書館近世史料館）

・一刀正伝無刀流・山岡鉄舟関係（岐阜県高山市）

・尾張新陰流継承者・柳生耕一氏に面会調査（名古屋市）

二〇〇九年度

・柳生新陰流関係調査（奈良県柳生町・芳徳寺他）

・心形刀流関係調査（三重県亀山市・心形刀流道場）

・陰流愛洲移香斎関係調査（三重県南勢町・愛洲の館）

二〇一〇年度

・愛洲移香斎関係調査（三重県南勢町・中瀬古祥道氏、山本篤氏）

・尾張徳川家・蓬左文庫（名古屋市・新陰流関係文書収集）

二〇一一年度

・新陰流流祖上泉伊勢守関係調査（福島県米沢市・上泉一治氏）

陰流、新陰流、一刀流、無刀流などと関係の深い現地を訪れて、その風土を知り、関係者のお話を伺うとともに、その地にしかない諸資料を入手することが出来、本研究の基礎となる資料を大方収集することが出来た。新陰流の基になった陰流の愛洲移香斎の出身地で地元郷土史家に直接お話を聞き、その研究書も入手した。新陰流の柳生家伝来の原典の閲覧はかなわなかったが、周辺の伝書は集められた。一刀流に関しては、宗家の小野家伝来の春風館文庫の原典資料を写真撮影するとともに、村上康正氏より山岡鉄舟が書写した主要な伝書の影印本八冊の寄贈を受けた。

上記の調査内容とその成果は、各年度の年報の冒頭に簡単に報告した。

Ⅳ．四年間の研究成果一覧

毎年度の研究成果は、年報に研究概要の紹介と研究論文の形にまとめて報告した。それ以外に日本武道学会大会で二度研究発表をした。その他、研究代表者が関連する著書、論文を発表した。

二〇〇八年度

①新陰流勢法研究4「天狗抄」「極意之太刀」
年報第十四号（一三五～一六六頁）

②魚住孝至「武道の歴史とその精神　概説」
（『武道論集』第1集七～四〇頁）

③魚住孝至『宮本武蔵―「兵法の道」を生きる』（岩波新書）

二〇〇九年度

④学会発表　魚住孝至「新陰流勢法研究」

陰流「燕飛」の復元　年報　第九号（三五九～三八〇頁）

二〇〇四年度

②新陰流「三学」の古文献資料、「三学」組太刀試論

年報　第十号（三五四～三八八頁）

③魚住孝至校注『定本　五輪書』（新人物往来社）

二〇〇五年度

韓国調査旅行（魚住、大保木、吉田、朴）

羅永一ソウル大学准教授に会う、ソウル市韓国弓術射亭、水原・朝鮮伝統武芸二十四技、友鹿洞、慶州訪問

④魚住孝至「東アジアにおける武術の交流と展開　覚書」

年報第十一号（三三四～三一五頁）

⑤吉田鞆男「剣術に見る「武道」の思想」

同号（三一四～三一三頁）

⑥魚住孝至「新陰流の形成と定着」

同号（二九六～三一三頁）

⑦吉田鞆男「新陰流の真髄「轉（マロバシ）」」

同号（二九五～二九四頁）

2．二〇〇六年度

「東アジアにおける日本武道の成立と展開」

研究メンバー　魚住、大保木、吉田、仙土、朴、田中、阿部、高橋、大石、立木

⑧新陰流の組太刀研究３「九箇」

年報第十二号（二五三～二八〇頁）

⑨学会発表　魚住孝至「古流流派剣術の技の復元―新陰流「三学」を中心に」

（日本武道学会第三十九回大会）

3．二〇〇七年度

「武道文化の展開―流派剣術から撃剣、近代剣道へ」

研究メンバー　魚住、吉田、大保木、仙土、田中、立木、朴

⑩吉田鞆男「小野派一刀流について」

年報第十三号（一三〇～一六四頁）

三年間の「東アジアにおける武術の交流と展開」の研究成果の概要が④で、中国・朝鮮・日本の武術文化の比較と日本の流派武術の特性について考察をまとめた。また日本の流派剣術の実態を具体的に知るために、新陰流に焦点を絞って研究することにした。

まず新陰流の成立から今日までの歴史的な流れについて、古文書に基づいて、十六世紀の陰流から新陰流への展開、新陰流が勢法（形）と伝書を整備し、近世社会の中で定着していった過程、さらに十八世紀に再編成されて今日に伝わっている経緯を、⑥にまとめた。新陰流の術技については、変容する以前の十七世紀初期のあり様に遡る元来のあり様がどうであったのか、十八世紀初頭までの六つの古文献の叙述を比較検討して復元することを試みた。陰流の「燕飛（えんび）」①、新陰流の「三学」五本②、「九箇」九本⑧の仕様を推定・復元し（監修吉田、論述魚住、演武〔吉田・仙土〕の分解写真掲載）、日本武道学会でも発表した⑨。他方、一刀流に関しても、十七世紀末期の二文献（小野家伝書と津軽家伝書）に基いて元来の刀法を探るとともに、十九世紀の山岡鉄舟にまでつながるものを、⑩で明らかにした。

これら五年間の準備的な研究を踏まえて、二〇〇八年度から本研究に取り掛かることになったのである。

つの形とあり様が明らかになる。しかも一刀流の中から十八世紀後期に、防具を着け竹刀で打ち合う撃剣（げきけん）を受容する中西派が展開するので、撃剣によって流派剣術がいかに変容したのかを見通せる視点が得られることも期待できる。中西派から十九世紀前半に撃剣を発展させた千葉周作の北辰一刀流が出、さらに明治維新後に「一刀正伝無刀流」を称する山岡鉄舟までつながるが、彼等はいずれも撃剣の前提として一刀流伝来の形を稽古していたので、一刀流の元来の形のやり方を解明した上で、中西派、北辰一刀流、無刀流のそれぞれの段階での形のやり方の相違を見ることができれば、流派剣術が変容して、近代剣道が誕生するまでの一つの見通しを得ることが期待される。

以上から、近世武術を主導した新陰流と一刀流剣術の研究を通じて、日本の武道文化の成立基盤を考えてみたい。

Ⅱ．基になったプロジェクト研究とその研究成果

科学研究費補助金「基盤研究(C)」に採択されたのは、二〇〇八年度からであるが、この研究の基になったのは、二〇〇三年度からのプロジェクト研究であった。本研究は、その成果を引き継いで展開したので、基になったプロジェクト研究についても簡単に紹介しておくことにする。

二〇〇三年度から、魚住が大保木氏と相談して日本の武道文化を成立基盤から共同研究することを企画し、尾張新陰流の技を継承するとともに、古文献に基いて研究されている吉田氏と弟子の仙土氏を迎えて、古流剣術を中心にプロジェクト研究を立ち上げることにした。その際、日本の剣術を中国・朝鮮などの武術とも比較しながら大きな視野から捉えるべく研究テーマを「東アジアにおける武術の交流と展開」として設定した。剣道史の田中守氏（国際武道大学）、文化人類学の阿部年晴氏（埼玉大学）、中国武術に造詣が深い高橋克也氏（同）、朝鮮武術研究の大石純子氏（八洲学園大学）、新陰流研究の朴氏にも共同研究者として入ってもらった。日本の剣術を問題にするにも、術技を中心に伝わってきた経緯を踏まえて、出来るだけ古い文献に基づいて術技を検証して研究することにした。

上述の問題意識を共有して研究を深めるため、何度か共同研究会を行い、日本の剣術流派の成立期の研究の他、朝鮮武術についての研究発表（大石氏）、中国武術についての研究発表（高橋氏、ゲストスピーカー林伯原氏）も行い、二〇〇五年度にはメンバー四人で韓国にも調査に出掛けた。二〇〇六年度から立木氏が入り、二〇〇七年度から研究所プロジェクトの方針変更があったので、武道大学関係のコアメンバーに絞った形となった。

毎年度の研究成果は、国際武道大学『武道・スポーツ科学研究所年報』（以下、年報と略記）に研究概要の紹介と研究論文の形にまとめて報告している。

研究題目・メンバー・成果一覧

1．二〇〇三年度～二〇〇五年度　研究所特別プロジェクト

「東アジアにおける武術の交流と展開」

研究メンバー　魚住、大保木、吉田、仙土、朴、田中、阿部、高橋、大石

二〇〇三年度

①本研究の問題意識、「新陰流表討（おもてうち）太刀目録」解題・翻刻、

国武大紀要 (Int. Budo Univ. Journ.)
第 27 号：91 － 103（2011）

研究報告

日本の武道文化の成立基盤
―新陰流と一刀流剣術の研究を通じて―

研究代表者　魚住孝至[*1]
共同研究者　立木幸敏[*1]、大保木輝雄[*2]
研究協力者　吉田鞆男[*3]、仙土克博[*3]、朴周鳳[*4]、中嶋哲也[*4]、長南信之[*5]
*1国際武道大学、*2埼玉大学、*3古流剣術研究会
*4早稲田大学、*5国際武道大学大学院研究生

本稿は、日本学術振興会の科学研究費補助金「基盤研究(C)」（二〇〇八年～二〇一一年度）に採択された標記の題目の研究報告書である。以下の構成で論じることにする。

Ⅰ．本研究の問題意識と研究目的
Ⅱ．基になったプロジェクト研究と成果一覧
Ⅲ．本研究四年間の研究と調査一覧
Ⅳ．本研究四年間の研究成果一覧
Ⅴ．研究成果の主題別まとめ
　1．新陰流剣術、2．一刀流剣術、3．二天一流剣術
　4．近世初期の流派剣術、5．近世後期の撃剣の展開
　6．近・現代剣道における伝統
まとめにかえて

Ⅰ．本研究の研究目的

本研究は、日本の武道の特性を、その成立基盤となった近世の流派武術に遡って根本的に解明することを目的としている。十六世紀後半から十七世紀前半にかけ、形（かた）（勢法・組太刀）を中心とする技術伝承の教育システムを持った流派が生まれ、武芸者が将軍家や大名家（藩）の兵法師範として社会に定着する中で、多くの伝書や理論書が作成され、武士の教育の核となる独自の武術文化が形成されてきた。それは、単なる武術だけに止まらない、個としての武士の覚悟も示すものであり、近代に「武道」と呼ばれるものの基盤となることになる。本研究では、流派武術の中でも特に主導的な役割を果たした新陰流と一刀流剣術の研究を通じて、合戦で切り合う実戦的な剣術から、形を中心として武士教育としての性格を持つ流派剣術へと飛躍する原理を解明したい。

流派では形の術技伝承が根本であり、伝書もそれを基礎に作られている故、形の術技を解明・分析することが重要である。形の術技は流派で伝承されていくが、技を行う者によって微妙に変わり、時代を経るにつれて形のやり方が変容していることがある。それ故に伝承術技を古い文献で検証して元来の術技を解明することが必要である。新陰流は、徳川将軍家の兵法師範となった柳生家を中心に伝書が多く遺されており、十六世紀後半から十七世紀半ばまでの形成過程が比較的明瞭に跡づけられる。これら伝書と形の内容から流派剣術が生まれた思想を明らかにしたい。また十七世紀前半に一代で実戦剣術から「道理」を追求した理論書を著した宮本武蔵の二天一流も合わせて考えてみる。他方、一刀流も将軍家兵法師範となった小野家を中心として、影響力の大きな流派だが、形成期の伝書はわずかで、術理の詳しい伝書類が出て来るのは十七世紀末で、時代はやや遅れるが、流派剣術のもう一

The International Budo University Journal

No. 27（2011）

CONTENTS

Original Articles

Study on Development of Chinese Spearmanship in Ming Dynasty
— Taking spearmanship schools, spearmanship system and spearplay training as the centre —
……Lin Boyuan 1

Alpine Ski Technik Ⅱ
— Eine didaktische (technische) Forschung der alpinen Grundeinstellung oder des alpinen Fahrverhaltens und Hauptphase des Schwingens beim alpinen Skifahren —
…… Makoto TSUKAWAKI 13

Report

A study of the concept of "self" in health education in junior and senior high schools
…… Seiichi TAKAGI 37

Scientific and Clear Holmes and Mysterious and Ambiguous Father Brown
— Why do we Love Detective Stories? — …… Yoshie MOCHIZUKI 45

Material

Survey on Kendo Among High-School Students
— at the Wakashio Budo Cup — …… Kimiharu IWAKIRI 55

Reports on Education and Reseach Activities

Project Reseach

A Research on Practice-based Faculty Curriculum for the First-year Experience of a Department of Physical Education
……Kantaro MATSUI, Youjirou DOI, Toshikazu KIMURA and Masanobu SATOH 63

Investigation of Drug Abuse in Sports by Medical Counseling via an Internet Web Site.
……Masato TAKAHASHI, Yukitoshi TATSUGI and Tosihiko KOHNO 69

Development and its Verification of the Communication Work Program on the Application of the Physical Fitnes
……Jun NAKANISHI, Tohru KOISO and Kazuhiro SUZUKI 74

Report on Education

A Debate in Education : A New Method on the First-Year-Experinece in the ISC class
…… Toshikazu KIMURA, Youjirou DOI, Kantaro MATSUI and Seiichi TAKAGI 79

Report

A Research on Essentials of Budo in Japanese Culture
as found through Studies on *Shinkage Ryu* and *Itto Ryu*
… Takashi UOZUMI, Yukitoshi TATSUGI, Teruo OBOKI, Tomoo YOSHIDA, Katsuhiro SENDO, Joubon PARK, Tetsuya NAKAJIMA and Nobuyuki CHONAN …… 91